

2030年に向けて——  
「守るもの」、  
「壊すもの」、  
「創るもの」

世界に向けて未来を提案しよう!

2030年代。日本は、世界は、どんな姿に?  
目指したい未来社会の実現のために、  
何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか?  
学生が提案する革新的な未来社会の姿。

NRI 学生小論文コンテスト2015  
受賞論文記録集

野村総合研究所  
Nomura Research Institute



# NRI 学生小論文コンテスト2015

2030年に向けて—

「**守るもの**」、

「**壊すもの**」、

「**創るもの**」

# 「NRI学生小論文コンテスト」とは？

野村総合研究所（NRI）は、「未来創発—Dream up the future.」という企業理念のもと、未来社会のパラダイムを洞察し、その実現を担うことを使命としています。

そうしたNRIの社会的責任の一環として、次代を担う若い世代の皆さんに、日本や世界の未来に目を向け、自分たちが何をなすべきかを考え、その熱い思いを発表する機会を持っていただこうと、2006年に開始したのが「NRI学生小論文コンテスト」です。

10回めの開催となる2015年は、NRIの創立50周年の年にあたり、記念事業のひとつとして位置付けました。

毎年、学生の皆さんから、日本と世界の新たな関係づくりや、未来に向けた斬新で力強い提案をいただいています。

NRIは、コンテストで受賞したそれらの提案を広く社会に公表することによって、若者を含む幅広い世代が日本の未来を考えるきっかけにしたい、と考えています。

## これまでの募集テーマ

大学生の部・留学生の部 | 高校生の部

- 第1回（2006）ユビキタスネット時代のITと人間の関わり | モチベーションクライシス
- 第2回（2007）日本が世界と共生するには | 日本から見た世界 世界から見た日本
- 第3回（2008）日本の「第三の開国」に向けて | 2015年の日本人像・家族像
- 第4回（2009）ITを活用した日本発ビジネス | 日本はコレで世界一になる！
- 第5回（2010）日本が世界のためにできること | 世界のなかで日本の魅力を高めるには
- 第6回（2011）2025年、新しい“日本型”社会の提案 | 2025年の日本を担うわたしの夢
- 第7回（2012）自分たちの子ども世代に創り伝えたい社会  
あるべき社会の姿と私たちの挑戦 | 私たちがすべきこと、できること、やりたいこと
- 第8回（2013）あなたが考える“わくわく社会”を描いてください
- 第9回（2014）創りたい未来社会—あなたの夢とこだわり



これまでの記録集

# コンテストへの思い

## 日本や世界の夢ある未来を提案してください！

NRIグループは企業理念に「未来創発—Dream up the future.」を掲げており、夢（Dream）と未来（Future）という2つの想いを大切にしています。「NRI学生小論文コンテスト」でも、大学生、留学生、高校生の皆さんから、日本や世界に向けた、夢のある未来の提案をお待ちしています。

NRI代表取締役会長 兼 社長  
**嶋本 正**



## どんな人が書いたのかと、思いをめぐらせ審査

毎年「NRI学生小論文コンテスト」の審査に参加し、若い世代の方々の新鮮な発想に触れています。審査では応募した人の属性が一切明かされないの、論文を読めば読むほど「これを書いたのはどんな人だろう？」「実際に顔を見てみたいな」という思いが強くなります。実際に表彰式で受賞者の方たちとお会いできる本コンテストの審査は、私にとって毎年の楽しみであり、自身の勉強にもなっています。

「NRI学生小論文コンテスト」  
特別審査委員

**池上 彰 さん**

いけがみ あきら—ジャーナリスト、東京工業大学教授。1973年NHKに記者として入局し、1994年から「週刊子どもニュース」の“お父さん”を11年間務め、2005年独立。著書に『伝える力』『池上彰の現代史授業—21世紀を生きる若い人たちへ シリーズ』『知らない恥をかく世界の大問題』『池上彰教授の東工大講義』『大世界史』など。

## 日本や世界の課題にとって、大切な「情緒」や「感性」

IT化が進んだことで、人間の思考方法がある一定のフレームに自分の意見をおさめ、要約するようになってきたという説があります。そこで一番にそぎ落とされるのは、行間を読む、沈黙する、相手の言葉を正しく聴くといった「情緒」や「感性」です。しかし、日本や世界が抱える課題にとって、人と人との関係性における「情緒」や「感性」ががとても大切であることを、論文を書く際にはぜひ強く意識してほしいと思います。

「NRI学生小論文コンテスト」  
特別審査委員

ノンフィクションライター  
**最相 葉月 さん**

さいしょう はづき—ノンフィクションライター。科学技術と人間の関係性、災害、医療などを中心に取材執筆活動を行う。著書に『絶対音感』『星新一—〇〇—話をつかった人』『青いバラ』『ビヨンド・エジソン』『セラピスト』『れるられる』『最相葉月 仕事の手帳』『調べてみよう、書いてみよう』『東工大講義 生涯を賭けるテーマをいかに選ぶか』など。





## 目次

- 2 「NRI学生小論文コンテスト」とは？
- 3 コンテストへの想い
- 6 NRI学生小論文コンテスト2015 2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」
- 7 募集要項
- 8 入賞作品
  
- 11 **受賞論文 大学生の部**
- 12 大賞 人に寄り添う医療を目指して——2030年へ向けた医療改革の提言 岡口 和也・岡口 正也
- 15 優秀賞 地域力結集で実現する『中継ぎ保育』の拡充 岩間 優
- 19 優秀賞 日本のベンチャー市場の活性化にむけて 武者修行退職制度の導入 宮生 侑祐
- 23 特別審査委員賞 公共オンブズマンの設置——市民の政治参加の架け橋 松本 淳志
  
- 27 **受賞論文 留学生の部**
- 28 大賞 問題解決学科——「守破離」の精神から 李 超君
- 31 特別審査委員賞 中国留学生から見た青森県の地域活性化について 金 春海
- 36 特別審査委員賞 デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか——選択代行時代への移行 朴 知遠
- 40 コラム NRI学生小論文コンテスト 受賞OB・OGのいま——Part1
  
- 41 **受賞論文 高校生の部**
- 42 大賞 「地方院」構想——民主主義と地方を守り、無意味な議会を壊し、私たちの議会を創る 橋本 康平
- 44 優秀賞 日本で本当にグローバルな人材を育てるには 江橋 朱里
- 46 優秀賞 2030年バイキング式社会の実現へ向けて 金 道慶
- 48 優秀賞 世界に目を向けさせるために、「世界問題」の授業を行おう 近藤 柚香
- 50 コラム NRI学生小論文コンテスト 受賞OB・OGのいま——Part2
  
- 51 **募集告知から審査、そして表彰まで**
- 52 募集告知
- 54 審査
- 56 最終審査会
- 58 ドキュメント最終審査会
- 64 表彰式
- 66 論文発表
- 68 コンテストへの応募動機
- 70 NRIグループ社員による審査の感想
- 72 NRIグループ社員によるコンテスト告知活動
- 73 先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」
- 74 おわりに
- 75 メディアでの掲載

# NRI 学生小論文コンテスト2015

世界に向けて未来を提案しよう!

大学生の部、留学生の部、高校生の部 募集テーマ

## 2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

[テーマ詳細]

今から15年後の2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？  
皆さんが今よりもっとわくわくした毎日を送り、社会も豊かになっている姿(様子)を描いてみてください。

「守破離(しゅはり)」という言葉があります。  
剣道や茶道など「道」の世界で、修行の段階を表す言葉です。  
「守」で基本となる教え(型)を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作り上げた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え(思想)です。

「守破離」のような視線で未来像を描けないでしょうか。  
今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る(守)」、次に旧態依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す(破)」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る(離)」。  
このような3つの活動や挑戦が過去から積み重ねられ、世界中で様々な発展が生まれて、今日に繋がっているとNRIは考えます。

未来は誰にも分かりません。2030年代にかけて起こりそうなことをイメージした上で、皆さんが望ましいと思う未来社会の姿を描いてください。  
そのような新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい(貢献したい)のかをまとめてください。

2030年代は、皆さんが社会の中核となって活躍する時代であり、皆さんの世代が「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思・責任感を持って、具体的な行動を起こすことが不可欠です。

皆さんの知識や実体験に基づいた独自の観点から、革新的な未来社会の姿を提案してくださることを期待しています。

募集要項

目指したい革新的な未来社会の姿を提案してください!

大学生の部

応募資格 — 日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4~5年)に在籍している学生で、2015年7月1日時点で27歳以下の個人またはペア。  
ペアの相手は、留学生の部、高校生の部の応募資格者でも可。  
字数 — 4,500~5,000字 \*別途400字程度の要約を添付  
賞 — [大賞1名] 賞金50万円、[優秀賞若干名] 賞金25万円、[奨励賞若干名] 賞金5万円

留学生の部

応募資格 — 日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4~5年)、日本語学校に在籍している留学生で、2015年7月1日時点で30歳以下の個人またはペア。  
ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る。  
字数 — 4,500~5,000字 \*別途400字程度の要約を添付  
賞 — [大賞1名] 賞金50万円、[優秀賞若干名] 賞金25万円、[奨励賞若干名] 賞金5万円

高校生の部

応募資格 — 日本国内の高校、高等専門学校(1~3年)に在籍している、2015年7月1日時点で20歳以下の個人またはペア。  
ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る  
字数 — 2,500~3,000字 \*別途200字程度の要約を添付  
賞 — [大賞1名] 賞金30万円、[優秀賞若干名] 賞金15万円、[奨励賞若干名] 賞金3万円

[応募の際の注意点]

- ・論文は日本語で執筆された、自作で未発表のものに限る。
- ・テーマをそのまま論文タイトルとはせず、独自のタイトルを必ずつける。
- ・3名以上のグループでの応募は、審査対象外とする。
- ・図表の数は5点以内とする。
- ・論文の中で他の著作物を引用する場合は、その箇所を明記するとともに、論文の最後に出所を記載する。出所は字数に含まない。
- ・図表タイトル、図表中の文字、注釈、参考文献一覧は、字数に含まない。



## 入賞作品

# 入賞者の皆さん、おめでとうございます！

### 大学生の部

大賞 人に寄り添う医療を目指して ― 2030年へ向けた医療改革の提言  
岡口 和也 宮崎大学 医学部1年  
岡口 正也 東京大学 法学部3年(共著)

優秀賞 地域力結集で実現する『中継ぎ保育』の拡充  
岩間 優 東京医科大学 医学部3年

優秀賞 日本のベンチャー市場の活性化にむけて 武者修行退職制度の導入  
宮生 侑祐 慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 修士課程2年

特別審査委員賞 公共オンブズマンの設置 ― 市民の政治参加の架け橋  
松本 淳志 東京大学 法学部3年

### 留学生の部

大賞 問題解決学科 ― 「守破離」の精神から  
李 超君 北海道大学大学院 経済学研究科 修士課程1年

特別審査委員賞 中国留学生から見た青森県の地域活性化について  
金 春海 弘前大学大学院 人文社会科学研究科 修士課程2年

特別審査委員賞 デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか ― 選択代行時代への移行  
朴 知遠 一橋大学大学院 社会学研究科 文部科学省国費研究留学生1年

### 高校生の部

大賞 「地方院」構想 ― 民主主義と地方を守り、無意味な議会を壊し、私たちの議会を創る  
橋本 康平 宮崎県立宮崎大宮高等学校1年

優秀賞 日本で本当にグローバルな人材を育てるには  
江橋 朱里 The Hills Grammar School 2年

優秀賞 2030年バイキング式社会の実現へ向けて  
金 道慶 神戸朝鮮高級学校3年

優秀賞 世界に目を向けさせるために、「世界問題」の授業を行おう  
近藤 柚香 千葉県 私立 市川高等学校2年

### 奨励賞

### 大学生の部

真の積極的平和外交へ  
石井 明日夏 横浜市立大学 国際総合科学部3年

MAKE UP JAPAN ― 化粧のチカラで日本を元気に  
井出 愛実 群馬県立女子大学 国際コミュニケーション学部3年

憲法の下に、差別のない社会を目指す  
澤本 幸美 武蔵野大学 文学部3年

2030年、日本は世界を牽引する健康長寿国へ  
― 医療を守る、枠を破る、和を創る  
露木 愛 慶應義塾大学 薬学部5年

日本の未来につながる高齢者対策について  
― 支え合う社会への提案

練生川 真司 東京大学公共政策大学院 公共政策学教育部 専門職学位課程1年

佐藤 彩花 東京大学公共政策大学院 公共政策学教育部 専門職学位課程1年(共著)

再び、真に実りある生活を。  
藤田 このむ 神戸大学 農学部2年

多様な「働き方の選択肢」を創るために  
― 「グローバル人事組織」による日本的雇用慣行の変革  
伏野 里保 関西学院大学 法学部4年

病院と学校による新たな地域コミュニティの創造  
舛田 桃香 慶應義塾大学 総合政策学部2年

学校教育に「ダイバーシティ科」を ― ダイバーシティを共有し、社会を構築していく人材の早期からの育成を目指して  
森田 裕己彦 立命館大学 政策科学部4年

### 留学生の部

2030年東アジア助け合い共同体  
― 草の根レベルから共同アイデンティティへ  
沈 家銘 京都大学大学院 法学研究科 研究生

人権で描く美しい未来社会  
孫 昌佑 京都学園大学 経営学部4年

イノベーションを生み出す国を目指す  
― 日本を世界規模の「シリコンバレー」に  
MAI MAICUONG 横浜国立大学 理工学部4年

### 高校生の部

ビルの中の畑 ― 都市部から始める新たな農業  
石井 優実 埼玉県 狭山ヶ丘高等学校2年

日本人の戦争観 ― 今こそ色眼鏡を外すとき  
石川 聖竜 東京都 暁星高等学校1年

第二次エネルギー革命への挑戦状 ― SSPS  
石原 夢美 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校1年

地方再建 ― 守りたいふるさと  
井上 莉緒 広島県立安古市高等学校2年

「心のバリアフリー」を考えて  
大沼 恭子 埼玉県 本庄東高等学校2年

世界に誇れる「日本」を目指して  
岡西 善治 広島県立安古市高等学校2年

グローバル化の諸問題とその対策  
小澤 亮哉 東京都 中央大学高等学校3年

「いき」方を考える  
金子 水桜 東京都 白百合学園高等学校2年

富裕層と貧困層の壁を無くすために私たちができること  
栗原 里奈 東京都 お茶の水女子大学附属高等学校1年

「いただきます」の言える社会  
須賀 真悠子 埼玉県 本庄東高等学校2年

発展途上国の女子を救うために  
須藤 あかり 千葉県 私立市川高等学校2年

加速する高齢化社会に向けて  
——いつまでも生きがいの人生を  
瀬戸 愛美 兵庫県 西宮市立西宮高等学校1年

人間とロボットが共創していく未来社会  
竹内 諒 東京都 中央大学高等学校3年

「アイヌとの架け橋創造プロジェクト」で多文化共生社会へ  
土屋 もえり 岐阜県 立関高等学校2年

全ての子どもに教育を受ける機会をください。それが  
人類を明るい未来へ導きます。  
寺島 祐樹 北海道札幌南高等学校2年

高齢者と若者とのつながり —— 農業・漁業を活気づける  
中野 玲衣 兵庫県 西宮市立西宮高等学校1年

「高齢者見守りネットワーク」を構築し、真の「おもてなし」の心を育てよう  
野澤 郁明 兵庫県 神戸大学附属中等教育学校4年

過去から拓く未来  
干貝 真央 兵庫県 神戸大学附属中等教育学校4年

病気を好きになる  
宗村 華月 大分県 大分東明高等学校2年

コメの未来を考える  
森 さくら 福岡県立修猷館高等学校2年

日本づくりに関わる人をふやせ —— 教育で社会は変わる  
森岡 竜一 茨城県 茗溪学園高等学校・Greenbay High School 2年

オリジナルカルチャー  
葉 晃成 埼玉県 狭山ヶ丘高等学校1年

## 論文の応募概況

応募論文数と入賞論文数は、以下のとおりです。

### 応募論文数

大学生の部	留学生の部	高校生の部
158	21	2,443
総数 2,622		

### 入賞論文数

	大学生の部	留学生の部	高校生の部	計
受賞 (大賞・優秀賞・特別審査委員賞)	4	3	4	11
奨励賞	9	3	22	34
計	13	6	26	45

# 大学生の部

## 大学生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

### 2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、 「創るもの」

今から15年後の2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？  
皆さんが今よりもっとわくわくした毎日を送り、社会も豊かになっている姿（様子）を描いてみてください。

「守破離（しゅはり）」という言葉があります。  
剣道や茶道など「道」の世界で、修行の段階を表す言葉です。「守」で基本となる教え（型）を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作上げた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で、「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え（思想）です。

「守破離」のような視線で未来像を描けないでしょうか。  
今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る（守）」、次に旧態依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す（破）」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る（離）」。このような3つの活動や挑戦が過去から積み重ねられ、世界中で様々な発展が生まれて、今日に繋がっているとNRIは考えます。

未来は誰にも分かりません。2030年代にかけて起こりそうなことをイメージした上で、皆さんが望ましいと思う未来社会の姿を描いてください。  
そのような新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい（貢献したい）のかをまとめてください。

2030年代は、皆さんが社会の中核となって活躍する時代であり、皆さんの世代が「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思・責任感を持って、具体的な行動を起こすことが不可欠です。

皆さんの知識や実体験に基づいた独自の観点から、革新的な未来社会の姿を提案して下さることを期待しています。

\*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。





## 大賞 [大学生の部]

# 人に寄り添う医療を目指して ——2030年へ向けた医療改革の提言

宮崎大学 医学部1年

**岡口 和也** おかぐち かずや (写真左)

東京大学 法学部3年

**岡口 正也** おかぐち まさや (写真右) (共著)

これまでも取り上げられてきたテーマである「かかりつけ医制度」をグループで担うという着想の独自性に加え、その報酬体系や人材確保などの課題に対する考察の納得感、それによって目指す社会が明確に描き出されている点が、審査委員の評価を集めました。

## はじめに

私が子供の頃、“かかりつけのお医者さん”がいた。母は私の具合が悪くなるたびにそのお医者さんのもとに連れていき、そのお医者さんは幼い私にも優しく接してくれた。いつものお医者さんであるから、安心して診察を受けられたのだ。それが、私が医師を目指す原体験だった。

現在、日本ではこうした地域に根差した医療を提供する診療所は衰退し、かわりに大病院への患者の集中が進んでいる。高度な治療ができる病院のほうが安心できるという大病院志向のために、本来医療法では外来患者40名に対して医師1名と規定されているが、1名の医師が1日100名の外来患者を診ているのが現状である。その結果、大病院は高度治療に集中するのが難しくなり、医療費の増大や勤務医の負担増加につながっているのである<sup>1)</sup>。

しかし、この問題はそれだけにとどまらないと私は考える。医師と患者の関係が一回限りの大病院では、患者の付き合いはどうしても無機質なものにならざるをえない。患者は病気の際にだけ病院を訪れ、医師は丁寧な診察を行いはするが、そのつながりは一回限りのものである。昔ながらのかかりつけのお医者さんにみられた「寄り添う医療」はそこにはない。高齢化が進み、医療の重要性が増していく中で、医師と患者の距離が遠ざかっていく日本の医療のあり方に私は大きな問題意識を持った。

医師と住民が信頼関係を築き、住民の生活に寄り添う医療を目指すべきである。そこで、2030年に向けて、イギリスやオランダなどで実施されている家庭医の制度を参考にした“かかりつけ医制度”を提言すべく、本論文を投稿するに至った。

## 寄り添う医療の構築——かかりつけ医制度

通常みられる病気や外傷などの治療とあわせて、疾病予防や

健康管理など、地域に密着した医療はプライマリーケアと呼ばれる。米国国立科学アカデミーの定義によれば、「プライマリーケアとは、患者の抱える問題の大部分に対処でき、かつ継続的なパートナーシップを築き、家族及び地域という枠組みの中で責任を持って診療する臨床医によって提供される、総合性と受診のしやすさを特徴とするヘルスケアサービスである<sup>2)</sup>とされる。

私の提案するかかりつけ医は、このプライマリーケアを担う医師である。かかりつけ医制度では、診察や軽い病気の診療、医療予防のアドバイスを行うかかりつけ医を地域に置き、地域に寄り添う医療を実現する。住民は地域のかかりつけ医に登録し、かかりつけ医は登録されている患者の人数に応じて報酬が与えられる仕組みをとる(人頭払い方式)。1人当たりが担当する住民の数はだいたい一定であるから、かかりつけ医は同じぐらいの額を受け取れる。かかりつけ医制度の参考としたイギリスの家庭医制度では、それに加えて、住民の健康水準の維持・向上に対して家庭医に追加報酬が与えられる仕組みができていく(成果払い方式)<sup>3)</sup>。日本のような点数方式の報酬体系では、無料の診察や医療予防のアドバイスなどは医師にとってお金にならない。結果として、医師はやたらに風邪薬を処方する、あるいは対話・アドバイスなどのサービスを軽視するようになってしまいがちなのである。かかりつけ医・家庭医の報酬体系であれば、薬の処方だけでなく、単なる診察や予防のためのアドバイスを行うこともサービスの一環となり、住民の健康管理に対して報酬が支払われるため、私が提言する「寄り添う医療」により近づくことができる。イギリスでは、もっとも高く評価されている職業が家庭医であるとされる。地域に密着したプライマリーケアを行うことで、医師と住民の信頼関係が築けているのである。

イギリスやオランダでは、医療の機能分化を徹底させるために大病院へのフリーアクセスの制限を行っている。患者はまず家庭医にかかることを義務とし、家庭医の紹介なく大病院に行

くと保険の適用外となる制度をとっている。結果として、紹介された医師以外の医師の意見（セカンド・オピニオン）を求めづらいうというデメリットも生じている<sup>4)</sup>。日本にこの制度を導入する際には、複数紹介状を認めることでセカンド・オピニオンの問題に対応していくことができるのではないかと考える。かかりつけ医制度は、イギリスやオランダの家庭医制度より柔軟な運用を可能にすることを目指したい。

## 人材の確保——グループ・プラクティスの実践

かかりつけ医を日本で制度化するにあたっては、人材の確保が問題となる。かかりつけ医は総合的な医療の知識が求められることになる。現状、日本の医学部の教育課程では、分野を固定せずに横断的な教育が行われ、開業の際には自由に診療科を標榜するわけであるが、専門の開業医として時間が経ってしまうため、自分の専門以外の診療科には対応できないケースが多い。研修などを実施することで、かかりつけ医となることのできる医師も一定程度存在するだろうが、それができない医師も多いであろう。

日本では2013年には、総合診療専門医という資格が創設された。これは、地域においてよくある病気の基礎的な診療から患者の生活状況まで総合的に診察する医師のことであり、かかりつけ医の理念に沿う医師資格である<sup>5)</sup>。この総合診療専門医を拡充していくことで、日本にかかりつけ医制度を導入する際の人材問題に貢献することができる。しかし、総合診療医が全国に広まるのを待つのは現実的ではない。とても長い時間がかかってしまうだろうし、あわせて既存の開業医との摩擦も避けられないだろう。

そこで、私はかかりつけ医のグループ・プラクティスを提案したい。これは、グループで事業を行えば、個人の場合と同じようにかかりつけ医の資格を認める、というものである。具体的に説明していこう。まず、現状の開業医でも、認定によってかかりつけ医の資格を取ることを可能とする。研修などをあわせて実施することで、先に述べたようにかかりつけ医となる医師を確保できる。しかし、現状の開業医では、かかりつけ医の認定に際して、対応できない診療科ができてしまうことが問題であった。そこで、グループで事業を行い、グループ全体でかかりつけ医の資格を満たしていれば、かかりつけ医の資格をグループで取ることを可能とするのである。例えば、小児科に対応できない内科医の場合には、小児科医とグループ経営を行うことでかかりつけ医となれる。異なる医師の連携が行われることで、実質的にかかりつけ医と同じ効果を期待できるのである。実際、現状の開業医がかかりつけ医になる際にネックとなるのは、小児科や耳鼻科、産婦人科など、グループ・プラクティスによってカバーできる分野である。これによって、2030年に向けて安定的にか

かりつけ医の人材を確保していくことができる。

## 効果的な予防医療へ向けて——データヘルスの活用

かかりつけ医制度が機能し、診察とあわせて健康に関するアドバイスを適切に行えるようにするためには、住民の健康データをかかりつけ医が把握できることが重要である。検診などを行い、そのデータに応じてアドバイスができる体制の構築が望ましいといえる。

広島県呉市では、住民に検診を受けてもらい、検診データをもとに住民に健康状況の報告とアドバイスを行っている。特に、健康水準が低い住民や、そもそも検診に来ていない住民に積極的にアプローチを行うことで、より効果的な予防への取り組みを行っている<sup>6)</sup>。データヘルスを活用した予防医療の例である。

この呉市の事例を参考に、かかりつけ医制度においても、データヘルスをうまく活用していくことを提案する。まず、住民に対して定期的に健診の機会を設ける。これはかかりつけ医において実施することにする。ただし、人間ドックなどは大病院で受ける場合もあるので、その場合にはデータをかかりつけ医が共有できるようにする。かかりつけ医は、データ分析を行う事業者などと連携しながら、検診などから得られたデータをもとにして、住民に健康状態と健康に関するアドバイスを行う。この際、検診のデータをもとに、体脂肪率など健康水準が悪い人や検診の受診率が低い人の健康水準の向上が見られた場合の、かかりつけ医の報酬額をより高めに設定することで、より効果的に住民の予防医療を行うことができる。

さらに、個々のデータを匿名化してデータベースにすることで、健康観察をより正確なものにすることができる。オランダでは、1970年代以降、家庭医の診察内容がデータベースに蓄積されてきた。その情報によって、住民の健康の変化や特色をプライマリーケアの段階で観察できるのである。情報の集約化によって、住民の健康観察をより効果的なものにすることができる<sup>7)</sup>。

かかりつけ医が健康に関するデータ管理を行うことのメリットは大きい。かかりつけ医が検診を継続的に行うことで、長期的な健康状態の変化を把握できるようになる。さらに患者や家族とコミュニケーションをとりながら健康状態を把握できるため、正確な情報を得ることができる。かかりつけ医は、データ情報に基づく医療と親和性の高い、現代的な医療でもあるのだ。

## かかりつけ医の可能性——社会の視点から

ここまで、かかりつけ医制度導入の提案と、かかりつけ医制度の導入にともなう人材確保の問題の解決のための総合診療専門医の拡充とグループ・プラクティスの実践、そして広島県呉

市を参考にしたデータヘルスと連携した予防医療を提案してきた。最後に、かかりつけ医が社会をどう変えていくかを示していきたい。

かかりつけ医は、住民と密接な関係を築くことができる。怪我や病気のとき、安心して診療を受けることができるようになる。このことは、特に終末期医療において、大きな意味をもつようになるだろう。現在、終末期におけるQOLの向上を目指した在宅医療への移行が叫ばれている。終末期を安心して自宅で過ごすには、信頼できる医師の存在が欠かせない。かかりつけ医は、そうした終末期の在宅医療の受け皿になる可能性を秘めている。

それだけではない。かかりつけ医は、住民の健康管理に責任を負う。住民の検診の結果が望ましくなければ、適切なアドバイスをを行うことができる。かかりつけ医の導入によって、医療の予防効果が期待されるのである。これは、今後、高齢化によって医療費がかさんでいく日本の財政問題に対しても、かかりつけ医が貢献できることを示している。予防医療を担うかかりつけ医を機能させ、医療費の増大に歯止めをかけることができれば、将来に向けた高い医療水準の維持が期待できるだろう。そうした予防の観点からも、かかりつけ医を置くメリットは非常に高いのである。

## 終わりに

私が地域医療にこだわるのには、私の将来の医師像に関係している。私は将来、生まれ育った茨城県で地域医療に携わりたいと考えている。茨城県は、全国的にも医師不足が深刻な地域として知られている。茨城県の地で開業し、地域に密着した医師になりたい。私が小さいころにお世話になった“かかりつけのお医者さん”のような、地域住民の生活に寄り添い、信頼される医師になりたいと思っている。

今後の日本の医療は、高度な技術をもって患者を治すだけでなく、住民に寄り添い、信頼される医療が目指されなければならないと私は思う。医療は人の一生を支える。医師は人の誕生にかかわり、人の生活を支え、人の死に立ち会う。だからこそ、医師は住民に最も近いパートナーとして人生を支えていくべきではないだろうか。そのために、かかりつけ医のような、“寄り添う医療”の構築が必要不可欠であると私は考えている。

## 参考文献

- 1) 日本医師会 病院委員会「平成25年度 病院委員会審議報告 病院の機能分化と役割分担—とくに病院外来のあり方について」2014年3月  
[http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20140409\\_8.pdf](http://dl.med.or.jp/dl-med/teireikaiken/20140409_8.pdf)
- 2) 一般社団法人日本プライマリ・ケア連合学会ホームページ「プライマリ・ケアとは？」  
<http://www.primary-care.or.jp/paramedic/>
- 3) 一圓光彌・田畑雄紀「イギリスの家庭医制度」『健保連海外医療保障』No.93、2012年3月、健康保険組合連合会 社会保障研究グループ  
<http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~ichien/w/a/2012.3-2.pdf>
- 4) 在英国日本大使館ホームページ「医療」  
<http://www.uk.emb-japan.go.jp/jp/ryoji/iryo02.html>
- 5) 厚生労働省「専門医の在り方に関する検討会 報告書」平成25年4月22日  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r98520000300ju-att/2r98520000300lb.pdf>
- 6) 地方創生に資する「地域情報化大賞」受賞優良事例 ICTを用いた広島県呉市における「データヘルス」の取り組み支援、『Future』Vol.18、2015年3月、一般財団法人 全国地域情報化推進協会  
[http://www.applic.or.jp/pdf/futuer\\_18/04/04.pdf](http://www.applic.or.jp/pdf/futuer_18/04/04.pdf)
- 7) 武内和久・澤憲明ブログ「プライマリ・ケアで変わる日本の医療——オランダの医療システム」  
<http://healthcare-agera.com/2013/06/23/6/>

※ウェブサイトは2015年9月2日最終閲覧

## 【受賞者インタビュー】

### 兄弟で政策論文に挑戦 具体的な制度設計に 苦労した

#### ——コンテストに応募した理由、きっかけは？

もともと政策に関心があり、大学でコンテストのポスターを見かけて興味を持ち、弟を誘って医療分野で小論文を書くことにしました。(正也)

#### ——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

1週間から2週間ぐらいで書き上げました。(和也)

#### ——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

今まで政策論文を書いた経験がなかったので書き方が分からず、兄にかなり頼ることになりました。(和也)  
かかりつけ医という大きな方向性を具体的な制度設計に落とし込む際に、考えられる障壁を乗り越えるアイデアを出すのに苦労しました。(正也)

#### ——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

政策や、国の政策を動かしていく政治に興味を持つようになり、非常に良い経験になりました。(和也)  
かかりつけ医のアイデアを多くの人に発信できることが嬉しいです。(正也)

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか？

趣味で作曲をしていて音楽に興味があります。学問では興味の分野はもっぱら医療ですが、より質の高い医療体制に変えていくには政治に対するアプローチも必要なので、医療体制にも興味を持つようになりました。(和也)  
これからの地域社会のあり方に興味があります。少子高齢化で財政が逼迫し効率化が必要とされる中で、人の温かみのようなものを守っていく方向に向かうにはどうしたらいいかという問題意識を持っています。(正也)



## 優秀賞 [大学生の部]

# 地域力結集で実現する『中継ぎ保育』の拡充

東京医科大学 医学部3年

岩間 優 いわま ゆう



独自のインタビュー調査で「働く母親」のニーズを把握し、地域の中の「中継ぎ保育室」という提案につなげた点に説得力がありました。育児支援を出発点に、学生の活用、地域の活性化、医療との連携など、豊富な具体案も評価されました。

### 1. はじめに

政府により、社会での女性活用策が採られてきている。しかしながら、とりわけ働く女性にとって、子どもを産み、育てながら仕事を継続することは、未だに様々な悩ましい現実問題がある。

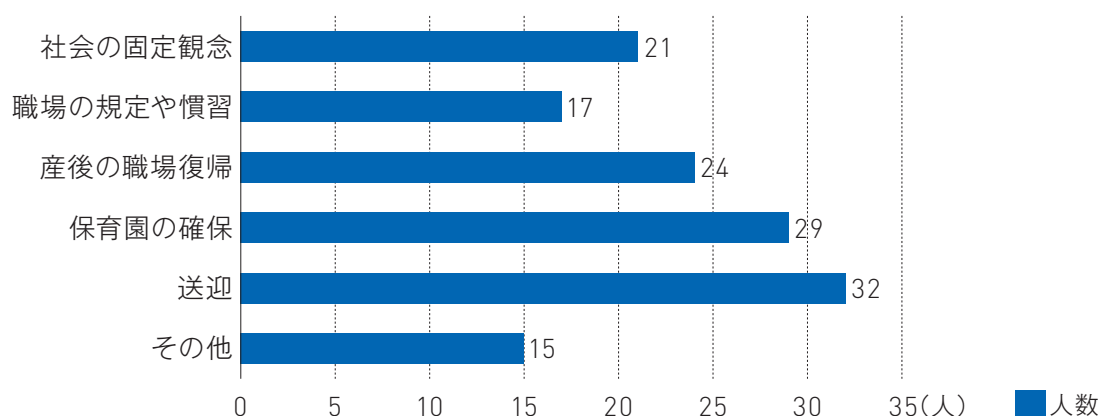
女性がいかなるライフステージにあっても、いきいきと働き、家庭生活を営むことができるようになることは、これからのグローバル時代に日本がさらに飛躍するために最も重要なことだと私は思う。以前に私が台湾でホームステイをした家庭のホストマザーは、仕事と家庭を両立し、キャリアを積んできた女性だったが、台湾では共働き家庭は一般的で、専業主婦はごくまれだという。子育ては母親だけの負担ではなく、家族はもちろん、地域の皆で子どもを見守っている印象を受けた。

これまでの「家庭か仕事かのどちらかの選択」という固定

観念を『壊し』、仕事のやりがいや家庭での生きがいを『守り』、「家庭と仕事の両立」が当たり前の社会環境を『創る』。それによって、男女共により働きやすい職場環境になり、さらには家庭生活もより充実することで、子どもを産み、育てやすい社会になる。そのためにも、働く親の「保育、育児の困った」をすべからず解決しなければならない。

いみじくも今年度から「子ども・子育て支援新制度」が実施された。消費税率引き上げにともなう財源が充てられ、地域型保育給付も創設された。地域の実情に応じた子育て支援を、これまで以上に地域の力で活性化させたい。次世代へ向けて保育サービスを量的に拡充し、保育支援の提供手段を多様化するために、かつて日本の地域文化を築いた相互援助を手本とした方策について提言したい。日本の絆文化が子育て支援制度の世界標準となり得る夢を描きたい。

図1 仕事と家庭の両立における問題点



都内在住在勤の仕事と家庭を両立している母親 50人に対する聞き取り調査 (2015年4月21～23日実施、自由回答・複数回答あり) をもとに筆者作成

## 2. 仕事と家庭を両立する母親たちの現状

ワークライフバランスをより現実的なものにするためには、公助はもちろん、地域での共助、家庭内での自助の三位一体で整備される必要がある。しかし、現実には保育園や託児所なども不足しており、育児にあたる女性への支援は不十分だ。地域では子どもの声が騒音にされるなど、公共の場でのおおらかで寛容な配慮は乏しく、家庭での男性の理解や協力を欠く場合もしばしばある。さらに、社会での仕事や育児についての根深い固定観念があり、それを修正するのは容易ではない。

このことは、今回、私が実施した働く母親への聞き取り調査の回答からも明らかで、課題が山積している(図1参照)。調査の詳細は以下の通りである。

\*インタビュー対象：未就学児・小学校低学年児童を持つ都内在住在勤の、仕事と家庭を両立している母親 50人(20代12人、30代24人、40代14人)

\*インタビュー内容：育児、保育など仕事と家庭の両立における問題点(自由回答・複数回答あり)

\*インタビュー方法：2015年4月21～23日の3日間、東京都文京区本郷住宅地の保育園、幼稚園、小学校、駅周辺にて聞き取り調査

### ●社会の固定観念の問題

○男性優位の社会で、女性が子どもを持ちながら働くことに理解が得られない場面がある。○家事や子育ては女性の役割という考えが根底にある夫の協力を得にくい。○子どもが小さいときに園に預けるのは可哀想だと言われる。

### ●職場の規定や慣習の問題

○労働時間に規定があり、家庭の都合に合わせて柔軟に勤務対応できない。○長時間労働が慣習のようにになっている。○残業や休日出勤も頻繁にある。長期休暇が取りにくいので、子どもとの夏休みなどの過ごし方が悩ましい。

### ●産後の職場復帰の問題

○元の職場や役職に戻れないうえに、子育てをしながらでは職場に迷惑をかけがちで、居づらい雰囲気があった。○産休、育児休暇の間に進化している職場環境に遅れをとってしまった。○幼児はすぐに熱を出すので、職場を休みがちになってしまう。仕事が休めないときに病児、病後児の預け先が見つからない。

### ●園の確保の問題

○子どもを預ける保育園が定員オーバーでなかなか見つからなかった。下の子が上の子と同じ保育園に入所できずに、違う保育園になってしまい、送り迎えが大変になった。

### ●子どもの園への送迎の問題

○シフト制の仕事のため、早朝・深夜の勤務のときの園以外の

預け先を探すのが難儀だった。○駅から家からも遠い園に通っているため、出勤時・帰宅時の園への送迎が困難。

○特に週明けの月曜日は園で使用する荷物が多く、出勤前に朝から大荷物で園に送りに行くのが重労働。○園で病気になったときの急な迎えの要請に対応できない。○仕事が終わらず当日急に残業になってしまったときに、迎えに行く代理人が見つけない。○園が終わった後に習い事の場所まで送ってもらうことを頼める人がいない。

### ●その他

○平日の行事に仕事の都合でなかなか参加できない。○シングルマザーのため、1人での仕事と家庭の両立が時間的に厳しい。○子どもが発達障害のため、預かってもらう先を見つけるのが困難。

聞き取り調査の結果、働く母親の悩ましい問題として、園の送迎や、園や小学校の学童保育後など親が帰宅するまでの子どもの預け場所についての声が多く挙がった。そこで、解決の一助となるシステムを身近な地域の中で整えることが急務だと実感した。そこで、分園的存在の保育室を拡充させ、地域で支え合う制度を提案する。

## 3. 保育の受け皿を拡大する中継ぎ保育室の増設

待機児童をなくす施策に公が取り組むことは必須だが、それだけでは子育て支援は十分とは言いがたい。そこで、本園とは別の、地域密着型分園の中継ぎ保育室が有効になる。

保育室については、官民間問わず既存の地域施設の一角や空き家の自治体での借り上げなどによって確保し、自治体に申請し、登録する。

中継ぎ保育室は、保育園や幼稚園、認定こども園の本園の補完的な役割で、本園の活動と連携し、協力する。また、保護者の意向を受け止め、一人ひとりの状況を考慮して、保護者支援を行うものとする。地域の家庭的保育事業、事業所内保育事業など、認可外保育とされている既存のシステムの利点を取り込みながらも、それとは別の形でもっと地域住民が関わり、分園の保育室の創設による地域興しを目指すものとした。

地域住民の子育て支援に関する理解を得るためには、自治体の取り組みだけに頼らず、より地域密着型に特化して推進することを提案する。例えば、管理は自治体でも、運営は町内会やNPOなど小さなユニットから関心を高める活動を実施する。小規模単位でのコミュニティにおけるリーダー的な存在が活動を主導し、子どもを預かる人材を増やし、マッチングでの依頼者の選択肢を増やす。それによって、本園への送迎など保護者の細かい要望にも、常時あるいは非常時でも即時対応しやすくなる。基本的には依頼者対支援者は1対1対応とするが、預か

る保育室では複数の子どもの居場所を確保することで、閉鎖的な環境にしない。

さらに、中継ぎ保育室を地域の子育て交流の拠点として機能させることもねらいとする。そこでは、子どもにとっても二重保育のストレスから解放される家庭的なくつろぎの場であることが望まれる。親同士が互いに子育ての情報を共有するなど、育児の悩みを解決できる場、家族ぐるみの交流ができる場とすることを旨とする。地域の世代間交流の場としても生かしたい。

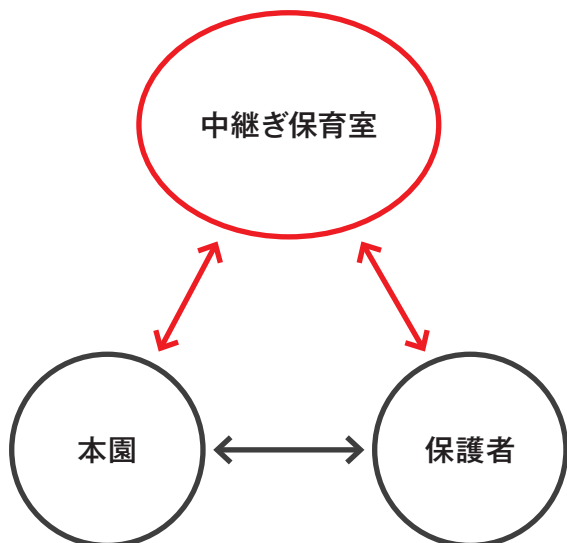
必要に応じて、特定の保育室には、子どもや家族の健康を守るために地域の医師、看護師、栄養士などの専門性を生かした体制を整える。定期的に専門職員による健康セミナーや育児相談ができる機会を設け、親の悩みや不安を解消するなどの援助も実施する。例えば、産婦人科医師による産前産後のケアや、不妊治療の相談や子どもの栄養相談にも対応するなど、安心して子どもを産み、育てられる地域づくりを実現させ、少子化対策も推進する。このような社会的意義を中継ぎ保育室の付加価値とする考え方だ(図2参照)。

#### 4. 保護者と地域住民との協働による運営

##### ① 子育て支援の担い手を多世代で増やす

安全な環境の中で子どもの成長を見守る人材を育てることで、地域コミュニティも活性化するきっかけとなる。支援する人材を増やすために、保育や福祉、医療を学ぶ学生の実習の場としての活用を促し、大学や専門学校の単位として認め、「地域創生枠」を設け、子育て支援に参加する学生に無利子奨学金を優先的に支給する仕組みを作る。さらに各自治体と地域の企業

図2 中継ぎ保育室の位置づけ



が基金を作り、卒業後に地元で就職するなどした学生の奨学金の返済の一部を免除する取り組みを作る。また学生に限らず、子育て支援員として参加することで、定められた報酬の他に自治体交付による地域の商店で利用できるポイント券が付与されたりするなど、支援者へのメリットを増やし、地域の経済活性も促す。支援に対するモチベーションを上げ、結果として『人の役に立つ』という社会的意義を実感することで、やりがいも生まれる。

支援者としての経験者が新たな支援希望者に対して講習、アドバイスを指導し、支援者を増やす連鎖の仕組みを作る。支援者は登録制にして、依頼者からの要請を仲介する機関からの要請によって、必要に応じて職務にあたる。

##### ② 安心・安全の維持

子どもの預け先で生じるのが、安心・安全への不安だ。そもそも他人に子どもを預けることへの不安は、互いのコミュニケーション不足による信頼感の欠如に起因するものだ。海外に目を向ければ、外国人ベビーシッターを付けて子育てをしている母親は実に多い。先の私の台湾でのホストマザーもそうであったが、「互いをよく知り、納得したうえでの契約なので、特に不安はない」と語っていた。このことは多様性を受け入れている証であるとも感じた。地域に多様性を確保するためにも、老若男女問わず多様な背景を持った人たちが地域の子育てに関わることは望ましいはずだ。日本ではまだそのような意識は持ちにくいとしたら、両者のマッチングを管理、調整する機関が、依頼人と支援者それぞれの要請をきめ細やかにすくい上げるシステムを作り、両者で承認する契約を交わす(その際は必ず第三者が仲介すること)で安心・安全を保証する。そのうえで、両者がコミュニケーションを密にし、互いを知ることで警戒心を解き、信頼を得ることで不安を解消する。なお、保育士以外の保育支援者は、必ず定めによる研修を終了した者とする。研修後も地域のイベントとして子育て支援学習会などを開催し、支援者の技量のレベルアップのための機会を設け、同時に依頼者も参加することで、相互間で絶え間なく意識向上に努めるようにする。両者の要望に添った安心・安全な運営も、地域での小単位での取り組みだからこそ可能となる。複数人の支援者による複数の目が見守ることで、互いに安全性を高め、実績のある保育士が適時地域を巡回するようにする。支援者と依頼者との信頼関係が築けた後も、緊張感のある関係を維持できるような仕組みであるように仲介機関は常に目配りをする。

#### 5. おわりに

必要ときに安全で便利な子育て支援サービスを受けられるシステムが拡充、完備されれば、働く親はストレスが減り、余

裕を持って家庭と仕事の両立ができる。既存の保育ママとも違う、複数の支援者とその依頼者が集う学童保育の乳幼児版保育室で、幼少のときから地域の多様な人たちとふれ合いながら顔見知りを増やし、成長する機会を得る。日常的な地域交流の中で、子どもたちが見守られて育つ環境を作ることも可能になるだろう。

それによって、子どもたちには地域愛が芽生え、将来、地域に恩返しをする思いが芽生えるきっかけにもなるかもしれない。

医学生の際は、将来医師となったとき、地域の医師が街づくりでも中心的な役割を果たすことが期待されると予想する。そこで、中継ぎ保育室を地域の病院や診療所などの医療機関の一角に設け、地域の「かかりつけ医」を中心に、特に病児・病後児の保育の安心を得られる環境作りの具現化を進めたいと望んでいる。地域の小児科医のネットワーク作りや、かかりつけ医の推奨、予防についての地域学習会なども実践したい。医療、育児、生活サービスなどを切れ目なく提供する地域包括ケアシステムの拡充は、今後ますます重要になるはずだ。

日本の中継ぎ保育の拡充で、子育て支援制度を確立し、世界のスタンダードとなるシステムとして構築したい。

#### 参考文献

- ・ 厚生労働省「保育所関連状況とりまとめ」平成26年4月1日  
<http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/0000057750.html>
- ・ 厚生労働省「子育て援助活動支援事業（ファミリー・サポート・センター事業）について」  
<http://www.mhlw.go.jp/bunya/koyoukintou/ikuji-kaigo01/>
- ・ 東京女子医科大学 男女共同参画推進局 女性医師・研究者支援センター  
ファミリーサポートの概要  
<http://www.twmu.ac.jp/w-support/syusanki.html>
- ・ 相馬範子『保育の現状と子どもの未来』、脳の育ちと子育ての科学シリーズ、東洋書店、2013年
- ・ 近藤幹生『保育とは何か』岩波新書、2014年
- ・ 武藤安子・吉川晴美・松永あけみ編著『家庭支援の保育学』建邦社、2010年
- ・ 関口はつ江・太田光洋編著『実践としての保育学 現代に生きる子どものための保育』同文書院、2009年

#### [受賞者インタビュー]

### 自分が医師として働くときに 直面する問題を 考えたかった



#### —— コンテストに応募した理由、きっかけは？

私が将来、医師として働くときに直面するであろう家庭と仕事の両立を考えると、悩ましい課題のひとつである子育てを支える社会の仕組みについて考察したいと思ったからです。

#### ——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

約1カ月かかりました。

#### ——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

働く親たちの困難に関する現状を知るため、保育園に送り迎えに来る方々に聞き取り調査を行ったことです。

#### ——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の考えをまとめ、他者に示す事ができたことです。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか？

ICTを活用させて、地域包括医療システムを構築することです。

## 優秀賞 [大学生の部]

# 日本のベンチャー市場の活性化にむけて 武者修行退職制度の導入

慶應義塾大学大学院 経営管理研究科 修士課程2年

宮生 侑祐 みやお ゆうすけ



2030年に向けて日本の成長に欠かせないベンチャー企業の活性化のために、大企業・ベンチャー企業間の人材流動化を促進する「武者修行退職制度」を提言。その独創性、実効性、大企業・ベンチャー企業・社員、全てに対して価値がある点が評価されました。

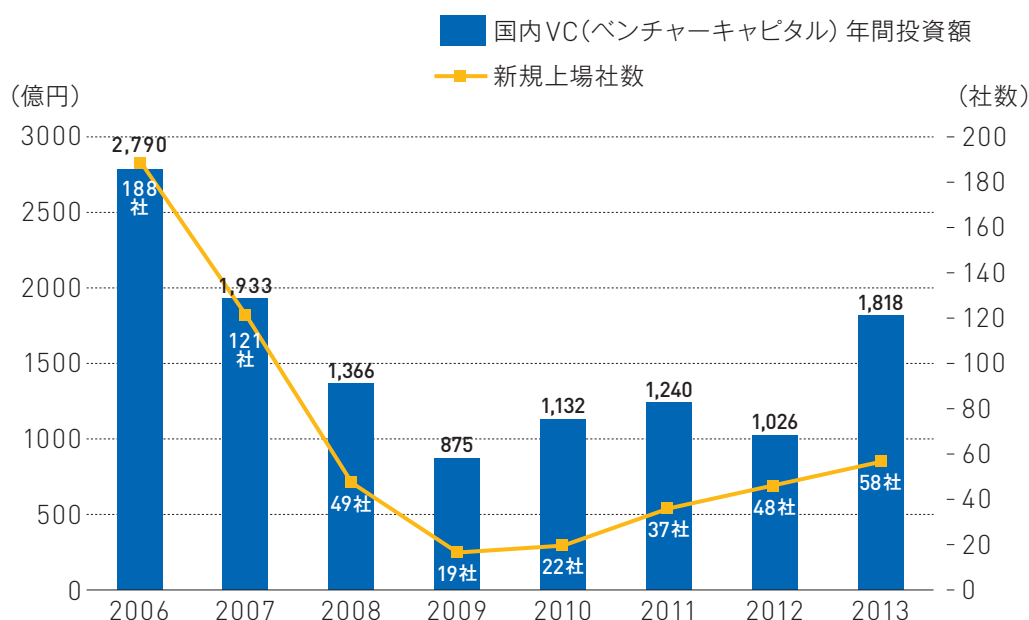
### 1. はじめに

私は2012年に4年制大学を卒業し、自動車メーカーに就職した。その後2年間の社会人生活を経て、現在は起業するため退職して大学院で経営の勉強をしている。最近是我のように起業を目指して退職したり、ベンチャー企業に転職する人が増えているようだが、それでもまだまだ少数派である。おそらく仕事を辞めることのリスクが大き過ぎるため、多くの人が起業や転職をしたいと思っても行動に移せないのだと思う。そしてこの退職のハードルの高さが、技術や資本がありながらも日本ではベンチャー企業が育たないと言われる最大の要因になっていると

考える。

しかし、これからの日本を考えると、新たな成長エンジンとしてベンチャー企業の成長は欠かせない。現在“大企業”と言われている企業もかつてはベンチャー企業だったわけで、それらの企業が今までの日本の成長を支えてきたように、これからの日本の成長は新たなベンチャー企業が支えなければならない。本稿では、なぜ日本ではベンチャー企業が育たないと言われているのかをもう一度考え直し、今の日本に必要な施策を提案する。

図1 国内における新規上場件数と投資額の推移



出所：日本ベンチャーエンタープライズセンター「ベンチャー白書2014 ベンチャービジネスに関する年次報告書」より筆者作成



## 2. 日本のベンチャー市場の今と問題点

### 株式市場の現状

2015年9月4日現在、日本の新興企業向け株式市場と呼ばれる東証マザーズ、JASDAQスタンダード、JASDAQグロースには、1,031社が上場している<sup>1)</sup>。特に活況な東証マザーズに限って言えば、ここ数年新規上場を果たす企業が増えており<sup>2)</sup>、全体的にはベンチャー企業にとって追い風が吹いていると言える。この背景には、ベンチャー企業に投資をするベンチャーキャピタリスト（以下VC）の存在がある。新規上場社数が増加し始める2009年ごろから、VCによる投資額も増加している（図1）。このVCによる投資が更なる事業拡大を可能にし、景気の回復もあって新規上場までこぎつけた企業が増えたということだろう。しかし、少し新規上場社数が増えてきたと言っても、アメリカのベンチャー市場と比べると、新規上場社数、その後の時価総額、M&A規模などは比喩ものにならないほど小さい。これは私が小さい頃から言われていることで、10年以上経ってもこの状況は変わっていない。

では、この差はどこから生まれるのだろうか。法規制の違い、資金調達力の違い、商習慣の違いなどさまざまな要因が考えられるが、私は「人材の集まり方」の違いが大きいと考える。ひと口に人材と言ってもさまざまな切り口があるが、ここでは「就活生の大企業志向」と「新卒一括採用と終身雇用制度」という2つの視点から「人材の集まり方」について考えたい。

### 就活生の大企業志向について

大手就職支援エージェントのアンケートによれば、今の就活生の44.9%が「絶対に大手企業がよい」または「自分のやりたい仕事のできるのであれば大手企業がよい」と答えている<sup>3)</sup>。日本全国には約385万社の企業が存在し<sup>4)</sup>、そのうち大企業の定義に当てはまる企業は約1万社<sup>4)</sup>で、全体の1%にも満たないことを考えると、日本の就活生の大企業志向がいかに強いかが分かる。このアンケート結果を私の周りのアメリカ人留学生に見せたところ、一様に「ベンチャー企業にもチャンスがあるのにもつたいない」という反応が返ってきた。客観的にアンケート結果を見れば、私も全く同意見である。しかし、一方で私は一度大企業に就職している。それだけに現在の就活生の気持ちも痛いほど分かる。特に新卒であれば、大企業でしっかりと研修を受けて、実務を通じて着実に実績を積みみたいという思いを持つのは合理的な考えである。ただ、大企業以外にも特色のある企業が数多く存在していることを考えると、大企業という数少ない席を取り合う就職活動は、結局のところ企業にとっても就活生にとっても損失になるのではないかと考えてしまう。加えて、ベンチャー企業の成長という観点からこの状況を見ると、ベンチャー企業にとっては若い人材が集まらないという環境ほど辛い

ものはない。お金がない分、若さを生かしたハードワークで日々を乗り切っているベンチャー企業も多いはずだ。しかし、肝心の若い人たちが集まらなければ、その戦術も単なる消耗戦になるだけである。

### 新卒一括採用と終身雇用制度について

もう一つ大きな問題として、新卒一括採用と終身雇用制度を挙げたい。これら制度のもとでは、入社した会社で何十年と働いて定年まで勤め上げることが美德とされ、就職の前提にもなっている。確かに長い時間をかけて技能を習得し、それを伝承するような職場にはピッタリな制度である。事実、高度経済成長期には製造業を中心にこれらの制度が機能した。しかし現代のように国境を越えた企業間競争が激化し、製品のライフサイクルがどんどん短くなっている時代においては、従来の雇用形態を引き継ぐだけでは企業は生き残れないのではないだろうか。むしろもっと多様な働き方を認めて、外部からの人材をどんどん活用する体制を整える必要があるのではないだろうか。

また、これらの制度はベンチャー企業にとっても大きな問題でもある。浮き沈みが激しいベンチャー企業が終身雇用を約束できるわけもなく、どうしても安定性のある大企業に人気で負けてしまう。そして大企業に優秀な新卒を取られ、その後も定年まで勤められては、人材不足になるのは当然である。

## 3. 武者修行退職制度の導入

### 制度の内容

そこで提案したいのが、武者修行退職制度である。この制度は大企業を一種の人材バンクと見立てて、そこから人材をベンチャー企業に送り出すことで、今までに起きなかった化学反応を起こそうとするものである。まずは大企業の研修制度の一環として運用を開始し、徐々に中小企業にまでこの制度を広げていく。具体的内容は以下のとおりである。

まず大企業の従業員が、この武者修行退職制度を利用するために退職後のプランを作成することから始まる。そしてそのプランを会社に提出し、会社側がこのプランを認めれば、その従業員は一定期間内の武者修行退職が認められるというものである。退職した人はその後起業してもいいし、ベンチャー企業に転職してもいい。大学院に進学してもいい。どのプランに対して承認を出すか、どれくらいの期間の退職を認めるかは、それぞれの企業が決める。そして期限を迎えたら、もう一度もとの企業と面談して会社に戻るか、そのまま退職するかを決める。期間中は退職しているため給料は出ないが、現行制度での退職よりも企業との結びつきが残る分、退職に対するハードルは下がることになる。この制度は従来の休職とも退職とも異なる。イメージとしては、一時的に予備役に入るような感覚に近いかもしれ

れない。

私の経験上、大企業で働く人の中にも、起業やベンチャー企業に興味を持っている人は結構いるように思う。特に若い人に多いように感じる。しかし、現在の終身雇用制度のもとでは一度会社を辞めてしまえば、ほとんどが自己都合退職となり、元職場に復職することはほぼ不可能である。それゆえ行動に移せない人が多い。しかし、私の提案する武者修行退職制度を利用すれば、期間内であれば復職できる可能性が残る。もちろん期限到来時の企業側の事情もあるため、必ず復職できるという保証はないが、それでも辞める人にとっては大きな心の救いになるに違いない。またこの制度は、従業員を出す大企業にとっても、従業員を受け入れるベンチャー企業にとっても、制度を利用する従業員にとってもそれぞれメリットがある。

#### 制度導入のメリット

大企業にとっては、人材育成費の削減とベンチャー企業との連携加速というメリットがある。短期的に考えると人材を外部に出してしまうため戦力ダウンになってしまうが、その従業員が復職してきた場合、大企業ではなかなか経験できない幹部職を経て帰ってくることになる。これは、年間何百万円もかけて従業員をビジネススクールに派遣するよりも高い費用対効果が見込める。また、一度退職した従業員が起業や転職をしてそのまま帰ってこない場合でも、自社から人材を輩出したということで、その相手先企業とのつながりを持つことができる。昔のような自前主義が通じなくなった今、リスクを取ってイノベーションを起こそうとするベンチャー企業とのつながりを持つことは企業として大きなメリットがある。

また、人材を受け入れるベンチャー企業にとっては、まさに即戦力となる人材が転職してくるわけだから、大きな戦力アップにつながる。また、その従業員がそのまま会社に残ろうが、元職場に復帰しようが大企業とのコネクションが作れるため、こちらにも大きなメリットがある。

そして制度を利用する従業員にとっては、外から自分の会社を見る良い機会になり、何より大企業ではなかなかできない経営に携われる経験ができるというメリットがある。この制度の利用はまずは大企業を想定しているが、実績を積んで次第に中小企業にも広がるようになれば、日本の労働市場の流動化が進み、ベンチャー企業だけでなく多くの企業が活性化されると考える。

#### 4. 武者修行退職制度導入にあたり、 守るもの・壊すもの・創るもの

##### 守るもの

今回提案した武者修行退職制度は、大企業・ベンチャー企

業・従業員のそれぞれにメリットをもたらすが、この一連のモデルを成立させるために欠かせないものがある。それは大企業の研修制度である。日本の大企業の研修制度は旧来の終身雇用制度を前提としたものが多く、それだけに新卒で入社した直後から幹部社員になっても定期的にそれぞれのポジションに合わせたきめ細やかな研修があり、かなり充実している。これと同じ研修をベンチャー企業で行うのは不可能に近い。それゆえ、この一連のモデルの土台を固めるという意味でも、現在の大企業での研修制度は守る必要がある。

##### 壊すもの

一方で、壊さなければならないものもある。それは、従業員の新卒一括採用と終身雇用制度に対する固定観念である。この意識改革を行わない限り、今回のモデルは成功しないだろう。たとえ、無理やり武者修行退職制度を実施しても、旧来の雇用形態に対する固定概念が残っていれば、復職してきた社員への風当たりは強くなり、次第にこの制度を利用する社員はいなくなる。この意識改革こそ最大の障壁となるが、地道に実績を積み、従業員の意識を変えるしか方法はない。

##### 創るもの

最後に創るべきものである。それは、大企業・ベンチャー企業・従業員のそれぞれの将来像である。大企業にとってはどのような起業プランを認め、どのようなベンチャー企業への転職を認めるのか、またベンチャー企業にとってはどのような大企業から人材を受け入れるのかによって、その企業が進む道が大きく異なってくる。今までにない制度だからこそ、企業として進むべき方向性を再確認し、それに照らし合わせて独自の基準を作る必要がある。また、従業員個人についても同じことが言える。ある種の期限付き退職とはいえ退職するわけであり、その後のキャリアに大きく影響を与える。企業にとっても従業員にとっても、大きな分岐点となるため、明確な将来像を描いた上での決断が必要となる。

#### 5. 最後に

日本では、いまだにベンチャー企業が育たないと言われてしている。そして、さまざまなアンケート結果がそれを支持している。しかし、私はそのアンケート結果が全てだと思わない。日本には、これまで世界初の製品やサービスを生み出してきた企業が数多く存在し、それらの多くが最初は小さなベンチャー企業だった。日本にはまだまだ表には出ていない秘められた可能性があると感じている。その可能性を呼び起こすためには、何かを変える必要がある。しかし、やみくもに何かを変えることは失敗を招くし、全てを変えることは現実的ではない。また、海外

で成功している事例だからと言って、それをそのまま日本に移植しても機能するとは限らない。日本の商習慣・文化にフィットした、日本独自のモデルが必要なのではないだろうか。

今回は、可能な限り現行の制度の形を残しつつ、大きな変革を生むモデルを考えた。この提案が、2030年のより良い日本の未来の実現に役立てば幸いである。

#### 文中注

- 1) JPX日本取引所グループホームページ「上場会社数・上場株式数」  
<http://www.jpx.co.jp/listing/stocks/co/>
- 2) 一般財団法人日本ベンチャーエンタープライズセンター「ベンチャー白書 2014 ベンチャービジネスに関する年次報告書」
- 3) 株式会社マイナビ「2015年卒マイナビ大学生就職意識調査」  
[https://saponet.mynavi.jp/enq\\_gakusei/ishiki/data/syuusyokuisiki\\_2015.pdf](https://saponet.mynavi.jp/enq_gakusei/ishiki/data/syuusyokuisiki_2015.pdf)
- 4) 中小企業庁編『2014年版中小企業白書～小規模事業者への応援歌～』付属統計資料  
[http://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H26/PDF/18Hakusyo\\_huzokutoukei.pdf](http://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/H26/PDF/18Hakusyo_huzokutoukei.pdf)

#### [受賞者インタビュー]

### 自分の将来のキャリアを 深く考えることができた



#### ——コンテストに応募した理由、きっかけは？

学生生活の集大成として、なにか自分の考えを世の中に発表したいと考えていたことがきっかけです。

#### ——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

テーマ選定に1週間程度、文章作成に3日程度かかりました。

#### ——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

はじめて論文を読む人でも内容が理解できるよう、分かりやすいストーリーを作るのに苦労しました。

#### ——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

論文作成をきっかけに、自分の将来のキャリアについて深く考えることができました。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか？

日本のベンチャー企業に興味を持っています。

特別審査委員賞 [大学生の部]

## 公共オンブズマンの設置

—— 市民の政治参加の架け橋

東京大学 法学部3年

松本 淳志 まつもと あつし

政治への信頼を取り戻し、社会における当事者意識を育むシステムとして「公共オンブズマン」を提案。その役割や機能の具体的設計には実現への期待感を抱かせることに加え、問題設定や考察プロセスの鮮やかさ、疑問が解決される文章運びも評価されました。



### はじめに

戦後から現在までの日本は民主主義であり、それらは日本政治のコアとして定着しているが、一方で、政治に対する国民の評価は厳しさを増している。アクセンチュアが市民に対して行った調査<sup>1)</sup>においても、Edelmanが行ったオンライン調査<sup>2)</sup>においても、政府、行政、メディアや企業への不信が高まり、近年では投票率の低下も顕著で、政治離れが危惧される。

政治への不満は様々な悪影響を及ぼし、政府への不信は財政再建のための増税が困難となり、中身の是非はさておき、特定秘密保護法やマイナンバー制度のように、政府施策への信頼が得られにくくなり、行政のパフォーマンスも低下する恐れがあると思われる。

政府がいかに国民の信頼を得るかという問題は日本だけでなく、各国政府の共通課題であろう。この問題に対しては、私は日本に導入する場合に主眼を置きながらも、他国に適用できるような、「公共オンブズマン」<sup>3)</sup>の提案を以下の文章でしていきたいと思う。

### 守るべきもの：

#### 民主主義、市民の政治参加

民主主義は世界の殆どの国で採用されており、ここでは簡潔に集団の構成員による多数決によって政治的決定が行われる制度とし、選挙や国民投票のように、政治的な決定に関わる機会を国民に与える制度と定義する。

民主主義は構成員の平等性を担保する前提であり、集団内の決定を平和的に行うための人間の知恵とも言える。選挙によって政治的代表が決定され、直接又は間接選挙によって大統領や首相が選ばれ、政府・行政をコントロールし、議員たちが議会において法案を審議し、政府へのチェック機能を果たす。そ

して、もし首相や大統領が国民の支持を失えば、次の選挙において退陣することとなり、国民の次なる支持を得た新しい人間が政府代表となる。これによって、政府の代表には正統性が選挙によって定期的に確認され、政府への信頼が生まれる。

一方で、民主主義は人々の政治参加が不可欠である。投票率が著しく低下し、投票はしないが政治に不満がある人々が多数を占めれば、民主主義が成立しなくなる。民主主義でない政治は暴力や実力によって正統性を確保する集団が出現しかねないであろうし、人々の権利や平等性を担保する前提がなくなるであろう。よって、民主主義政治を守っていく必要がある。

一方、市民の政治参加には選挙以外にも別のアクセス手段がある。市民による政府・行政への監視として、情報公開制度に加え、欧米では公的オンブズマンが設けられ、日本も市民によるオンブズマン活動が自発的に行われている。行政が公共の目的に則して活動しているか監視することは、不正が明らかになれば一時的に政府や行政の不信を高めてしまうが、監視活動の効果が十分に発揮されれば、行政の不正が減少し、監視によって政府への信頼が高まるであろう。

また、総務省の行政評価局や市民の無償ボランティアによる行政相談や、沖縄県や川崎市等に公的なオンブズマンが設けられている。それらの活動によって市民の相談が受理されて、行政に対して一定の勧告が行われる仕組みとなっており、一定の効果を上げている。これも市民が公的なものに関わる一助となっている。

### 破るべきもの：

#### 公的なものへの市民のアクセスの欠乏

一方、日本の両オンブズマンには様々な課題がある。市民オンブズマンの活動が政治的中立性に基づいているかの裏付けがなく、他の市民からの信頼が得にくく、一方では市民オンブ

ズマンの名称を暴力団が悪用するケースも見られた<sup>4)</sup>。公的オンブズマンに関しても、採用する地方自治体は少なく、総務省の行政相談は市民からの認知度が依然として低く、勧告も実効性が不透明であり、時に行政による行政監視には限界があるだろう。

他方で、オンブズマン以外の手段で公的な物事に対して参加する機会は市民には乏しい。公約を並べた政治家同士の選挙戦は、どの政策が有権者の支持を得たか不明である。裁判も訴訟コストがかかり、裁判所が行政の裁量を広く認めれば敗訴の可能性が高まる。

また、行政への苦情や相談に対して、行政側が説明責任や誠実な対応を果たすことを制度的に担保する仕組みはなく、他方では行政が政策の意味や要望を実現できない理由を説明することも不十分である側面もある。

冒頭で述べた通り、今の日本の政治への不信が高まりつつあり、行政の活動や公的な事項に関われる仕組みの欠乏が政治離れの一因になっていると思われる。政治的なことには、市民生活から多少離れた政治的分野（外交、産業政策）があるが、行政が市民にサービスを直接に提供する部分は市民の行政への信頼に大きく関わり、その行政サービスが悪ければ、行政をコントロールする政府やその政府を監視するはずの議会への失望へとつながり、選挙によって政治が改善されなければ、政治参加は市民にとって虚しいものになるであろう。

創るべきもの：

### 政治から市民への応答としての「公共オンブズマン」

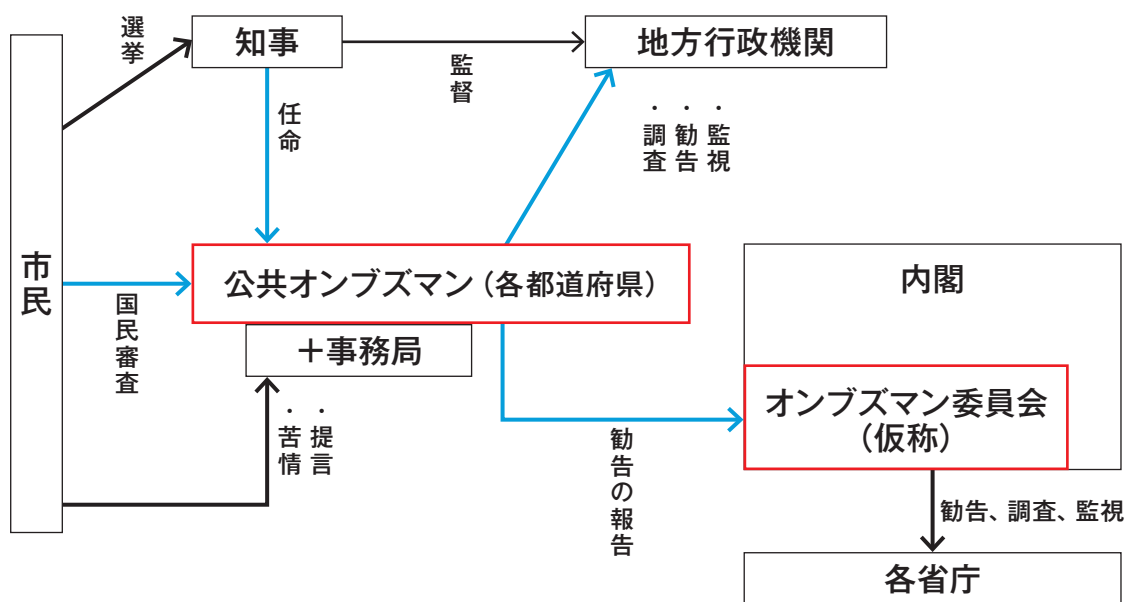
市民の公的な事項への関わりを容易にするために、公共オンブズマンを提案する。公共オンブズマンは一定の政治的正統性を持ち、市民の声に耳を傾け、他国のように行政監視を行い、それに加えて、行政の説明責任担保や行政改善のための勧告に努める。市民がオンブズマンを通して政治に部分的に参加できる仕組みを作り、行政の信頼性を高め、ひいては政治への信頼と期待を生み出せる機関を作るべきであると思う。

「公共」の言葉を使う意図は、行政からの独立性と政治的中立性と公的な事項の包含を強調するためである。これについては、公共オンブズマンの具体的な仕組みを説明する中に織り交ぜて言及していく。

総務省による行政相談はあくまで行政内部からの活動に留まり、国民からの認知度が低く、市民からの相談が行政の改善に十分に利用されているか不透明であると述べた。ここで、行政からの独立性を高め、さらにはオンブズマンの政治的権威や高い認知度を得るために、最高裁の裁判官の審査のように、地方議会の選挙ごとに行う国民審査の導入を提案する。

各国の制度では議会設置型のオンブズマンが多いが、議会設置型では議員の圧力が幅を効かせてオンブズマンの活動に支障が出る恐れがあると考えられ、オンブズマンの政治的責任

図1 公共オンブズマンの構想図



も議会全体に分散されて不透明となると思われる。そこで、教育委員会制度のように、オンブズマンの任命は都道府県知事が行うこととする。オンブズマンの政治的責任を首長に連帯させることで、オンブズマンに相応しい人材が知事の責任で供給されることを図る。任命権者が都道府県知事である理由として、地方自治体に対する勧告は、地方分権を前提に考えれば地方ごとに行われるのが適切であろう。地方自治体に設置するデメリットを縮小させるため、各都道府県のオンブズマンから国の行政機関への勧告は、行政評価局を総務省から内閣府に移して作った新たな組織が取りまとめて勧告する仕組みとする。

都道府県ごとに設置する他の理由として、大掛かりで新しい組織を運用するには政策実験が必要で、各都道府県において一定の枠組みの制約を法律で定めた上で試行錯誤させて、公共オンブズマンの最適な運用に早く到達させる狙いもある。

公共オンブズマンは、知事選挙があった度に当選後の知事が任命できるものとするが、次の知事選挙をはさまない限りは任期途中で解任できないものとする。裁判官ほどの身分保証を設けない理由としては、オンブズマンの政治的側面が強く、法的判断が求められる裁判官とは性格が違っており、選挙で勝ったばかりで正統性が高いと思われる知事がオンブズマンの解任をすることには問題も少なく、指名したオンブズマンの働きや成果が明らかになった後に人選を知事に再考させるメリットの方が大きいと考えたからである。

オンブズマンの人数について、様々な知見を持つ複数の人間を代表に据えて個別的な問題に対処出来る能力を確保しつつ、責任をある程度明確にするために、8人程度までが良いであろう。オンブズマンには、法的素養や行政知識がある人物が望ましい。複数いるオンブズマンの中から知事が公共オンブズマンの長を一人定めることとして、最終的な意思決定責任者を決める。

また、数多く寄せられるであろう市民の苦情や提案を処理するために、公共オンブズマンの補助を担う組織も必要であろう。新たな組織を設立する上で必要な費用を抑えるためにも、ボランティアで行政相談を行っている行政相談員の協力を得つつ、自前の相談窓口と行政調査等を行える小規模な組織を備え、行政への調査や行政監視等には自発的な市民オンブズマンを活用すべきであろう。協力的な市民オンブズマンの認定も公共オンブズマンが慎重に行い、調査等に民間から協力を得られれば組織の設置コストも削減できるであろう。

オンブズマンの任務については、公的サービスに関する苦情処理、公的サービス改善のための市民からの提案受理、行政の不正の調査に分類する。

行政サービスに関する苦情は、それを行った部署の担当者に対して市民がオンブズマンへの請願書の交付を求め、請願書を受け取った市民がオンブズマンに提出する。請願書には整理番号をつけて事案や担当部署ごとの固有の番号を振った上で、

PDF化しての提出やオンライン提出も可能とする。オンブズマンは受け取った請願を裁量によって受諾や拒否を決定し、その理由を請願者に必ず通知し、請願を受諾した場合は行政へ勧告を行う。裁判手続きとの整理のため、オンブズマンによる受諾拒否や勧告は法的効力を有さず、行政や市民が訴訟を提起することを妨げないこととする。この勧告の効力を強められないが、司法権との線引きのために必要であり、例えば元裁判官等をオンブズマンの中に加えることで、勧告の権威を確保する努力が必要であろう。また、苦情の提出の前に行政からの請願書を受け取る手続きを設けた理由は、市民の安易な苦情の訴えを抑制するためである。

また、公的サービスは行政だけでなく、公益性が認められ、行政の監督に置かれた団体も視野に入れ、例えば郵便局や市の清掃業者や自動車教習所等までも含むものとする。公共オンブズマンの実効性を高め、それらを指導する行政に適切な監督をさせるためにも勧告の対象に入れるべきである。

公的サービスに関する提案もオンブズマンが受理し、公共にとって有益なものを市民オンブズマンと協力して選別して具体化した上で行政に勧告する。また、政策提言を市民から募るコンクール等も定期的に主催すれば、市民の行政への関心や理解が高まるであろう。

行政への調査については各国のオンブズマン制度を模倣して、外交や防衛上の機密は例外としつつ、オンブズマン本人が情報公開制度を利用することなく、地方自治体の公文書を自由に閲覧でき、職員のカラ出張や無駄遣いを点検できるようにし、調査への協力を怠った職員の処分を知事に勧告できるものとする。オンブズマンの勧告は公開され、行政は勧告へ回答する義務が生じる。行政は勧告や一般公開によって何らかの対応を迫られ、政治的な圧力を受けるので、市民への説明責任を普段から果たすことに努め、説明責任を果たせないような行政の活動を改めるインセンティブとなり得る。

市民も容易に公的な物事に意見をして参加できるようになって、政治参加をより深く感じられるようになり、政治に限らずに社会的な物事への関心が高まるであろう。行政が説明責任を果たしていくことで、行政の能力や政策資源には限界があることも市民が気付き、市民も要求の度合を下げ、公的な問題や社会問題にどう対処するのかということを知事が行政官やオンブズマンとともに考えていく効果も期待できるだろう。そして、政治に対して市民の参加が回復でき、市民同士の議論も活発となって民主主義の前進にも役立つであろう。

## おわりに

公共オンブズマンという現在の政治制度から大きく離れた制度を提案し、自身も実現可能性を疑っているが、現実から跳躍

したと見られるほどの政治制度の立て直しを2030年までに作らなければ、信頼を失った政治の力が衰え、もはや何もできない政治になってしまうのではと危惧している。民主政治の立て直しとして、市民の政治参加が広がることを願い、本文の終わりとする。

#### 文中注

- 1) 日経コンピューター「アクセントが行政サービスの満足度を調査、日本は21カ国中20位」2009年2月19日  
[http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/NEWS/20090219/325114/?ST=go\\_vtech](http://itpro.nikkeibp.co.jp/article/NEWS/20090219/325114/?ST=go_vtech)  
当調査では、「よりよい生活の提供」という点で、あなた方は今の行政に満足していますか」という質問には、たったの12%の人々しか「とても満足している/満足している」と回答せず、「行政は、十分に市民に意見を求めていますか」という質問に対しては「全く求めている/あまり求めている」と回答する市民が49%を占めた。
- 2) 2015 Edelman “Edelman Trust Barometer” slide  
<http://www.edelman.com/2015-edelman-trust-barometer-2/trust-and-innovation-edelman-trust-barometer/global-results/>  
この調査では、大学での教育を受けた人々に関して、政府・企業・メディア・NGOに対する信頼度の平均が日本では37%と、各国平均の55%を下回り、調査対象国27国中ではアイルランドと並んで最下位であり、また69%の人々がメディアを信じていないと回答し、メディアへの信頼は27カ国中、26位であった。一般市民を対象とした調査でも、政府・企業・メディア・NGOに対して信頼している人々は34%と、さらに低かった。
- 3) オンブズマンという呼称に関しては、「オンブズパーソン」の呼称の方がジェンダー的配慮として適切だと思われるが、前者の呼称のほうがまだ一般的なのでここでは「オンブズマン」と表記する。
- 4) 「NPO法人認証取り消し 暴力団が統制、隠れみに 全国初、山口県が決定」読売新聞 2004年10月19日 西部本社版朝刊

#### 参考文献

- ・ 芦部信喜『憲法第6版』岩波書店、2015年
- ・ 飯尾潤『現代日本の政策体系——政策の模倣から創造へ』ちくま新書 筑摩書房、2013年
- ・ 川崎修・杉田敦編『新版 現代政治理論』有斐閣アルマ、2012年
- ・ 佐々木毅『政治の精神』岩波書店、2009年
- ・ 平松毅『各国オンブズマンの制度と運用』成文堂、2012年
- ・ 東洋経済ONLINE「日本人は『政府への信頼』が世界最低だった！」2015年1月21日  
<http://toyokeizai.net/articles/-/58596>

#### [受賞者インタビュー]

**自分の発想に自信を持てた。  
これからも難しい問題を  
考えていきたい**



#### —— コンテストに応募した理由、きっかけは？

自分のこのアイデアはどう評価されるかということを確認してみたかったからです。

#### —— この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

文献を調べるのと小論文の形式に仕上げるのに20時間くらい。小論文のアイデアを考えるのも含めるともっと長いと思います。

#### —— この論文を書く上で苦勞したことはありますか？

字数制限が厳しかったのと、自分のアイデアの短所を探して対策を考え出すのに苦勞しました。

#### —— この論文を書いたことで良かったことはありますか？

ある程度の評価を頂いたことで、自分の発想に自信が持てました。これからは難しい問題についてもっと自由な発想で考えていきたいです。

#### —— 今、どんなことに興味を持っていますか？

TPPや外国人労働者や地域経済などの話題や、少子高齢化などの問題に興味があります。

# 留学生の部

## 留学生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

### 2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、 「創るもの」

今から15年後の2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？  
皆さんが今よりもっとわくわくした毎日を送り、社会も豊かになっている姿（様子）を描いてみてください。

「守破離（しゅはり）」という言葉があります。  
剣道や茶道など「道」の世界で、修行の段階を表す言葉です。「守」で基本となる教え（型）を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作り上げた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で、「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え（思想）です。

「守破離」のような視線で未来像を描けないでしょうか。  
今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る（守）」、次に旧態依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す（破）」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る（離）」。このような3つの活動や挑戦が過去から積み重ねられ、世界中で様々な発展が生まれて、今日に繋がっているとNRIは考えます。

未来は誰にも分かりません。2030年代にかけて起こりそうなことをイメージした上で、皆さんが望ましいと思う未来社会の姿を描いてください。  
そのような新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい（貢献したい）のかをまとめてください。

2030年代は、皆さんが社会の中核となって活躍する時代であり、皆さんの世代が「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思・責任感を持って、具体的な行動を起こすことが不可欠です。

皆さんの知識や実体験に基づいた独自の観点から、革新的な未来社会の姿を提案して下さることを期待しています。

\*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。





大賞 [留学生の部]

## 問題解決学科

——「守破離」の精神から

北海道大学大学院 経済学研究科 修士課程1年

李超君 り ちょうくん (中国)

将来の日本に必要な、問題意識を持った人材を育てるために、大学教育における「問題解決学科」の設置を提言。その根拠、設計の具体性、実効性は審査委員の評価を集めました。文章力と論文としての完成度の高さも際立っていました。

### 1. はじめに

近年、人的資本が社会の話題になっている。最近話題の本、トマ・ピケティの『21世紀の資本』の中でも、人的資本を重要視し、その人的資本が貧富格差を縮小する重要な力であると指摘されている。特に、少子化問題が深刻である日本社会にとっては、持続可能な経済成長を果たすための人的資本が重要な課題である。

大学教育は、人的資本の蓄積に対して極めて重要な役割を果たす。日本だけではなく、他の国も大学教育の重要性を認識し、多くの力を注いでいる。日本の場合、2015年5月末に、文部科学省から国立大学に通知する素案が公表されたが、内容を簡単にまとめると、「文系の学部・大学院の廃止や定員削減を早急に進めよ」というものである。

私にとっては、それはかなり衝撃的であった。もちろん、経済学的な観点から見ると、科学技術が経済成長に対する貢献度が高いのは事実である。確かに理系の人的資本が、文系の人的資本より一般的に高く評価されるかもしれない。ここから考えると理解できないわけではない。

だが、学問の本来の目的から見たらどうだろうか。学問の価値は、「人的資本=将来利益の現在価値(貨幣価値)」だけでは測れないだろう。もし、学問の価値も将来の貨幣価値で測れば、大学は貨幣価値を創造できる資本主義の部品を作る工場でしかないのではないか。ゆえに、改めて大学の果たす社会的な役割を考えなければいけない。

「守破離」は、武道や禅の教えとして有名な言葉である。基本を「守」りつつ、それを「破」り発展させ、最後に既存の型から「離」れて独創的なものを創り出すことを意味する。学問とは何かを考えるうえで、「守破離」の精神は不可欠だと思われる。本稿では、「守破離」をキーワードに、今後の日本社会にあるべき人的資本について考察する。

### 2. 守——学問の多様性を守ろう

学問というのは、その文字の通り、長い間、人々が学習しながら問う、問いながら学習することで形成されてきた結晶体である。そこには、人々が学習しながら問い、問いながら学習する過程で同じ観点が集まり、さらにその学問が拡大したり、同じ観点から違う観点が分裂し、新たな学問が誕生する進化のプロセスが存在する。

他方、筆者が専攻する経済学では、2010年に日本学術会議が大学における経済学教育の参照基準を公表した。その内容は、主流経済学である「ミクロ経済学」と「マクロ経済学」が経済学カリキュラムの基本であり、それに「統計学」を加えたものを基礎科目とし、他のいくつかの科目をその応用分野とする「経済学の体系」が示された。ゆえに、このような「経済学の体系」に合わない社会経済学や経済学史といった科目は排除ないし周辺化されるべき対象となり、究極的には、歴史的要因・制度的要因・思想的要因に関わる科目はすべて周辺に追いやられることになる。

経済学は他の科学と違って、人類の活動を研究する科学であり、不確実性、予測不可能性が多い。グローバル化とともに、世界は急速に進化している。新たな情報、新たな商品がほぼ毎日新たに出てくる。その中で、人類の活動も進化していく。つまり、経済学という学問は人類の歴史とともに進化していると言える。ゆえに、経済学にとって、その多様性は極めて重要な特徴であり、その多様性を否定する上記の参照基準の提案は、経済学の有する可能性を毀損しかねないものとなる。高等教育の質を保証するために、参照基準を公表することに反対ではない。だが、基本的には大学教育の多様性を損なわず、教育課程編成に係る各大学の自主性・自律が尊重される枠組みを維持すべきだと思う。

### 3. 破——専門<sup>かまち</sup>の框を壊そう

大学の役割は、大きく2つに分類できる。1つは優秀な人材を育てること、もう1つは最先端の研究を先導していくことである。では、優秀な人材とはどのようなものであろうか。将来利益の現在価値(貨幣価値)が多く創造できる人が優秀な人材なのか。筆者は、問題意識を持って問題を発見し、解決できるように努力していく人間が優秀な人材だと主張したい。

ここで2つの問題を指摘したい。

1つは専門本位の教育方式である。例えば、地球温暖化のような環境問題を解決するためには、環境科学の専門的なメカニズムだけではなく、経済学と政治学の知識も重要である。しかし、環境経済学という科目が開講しているが、これは経済学研究科の科目であり、環境科学研究科の学生はほとんど履修しない。逆に、環境経済学を研究している学生は、環境科学の専門的なメカニズムや技術については詳しくない。もちろん、他の学部の講義を聴講することは可能であるが、基本的に自分の学部の授業を履修しなければならない。

ゆえに、ここで提案したいのは「専門本位」の教育方式ではなく、「課題本位」の教育方式である。課題本位の教育方式とは、自らが興味を持つ課題に応じて、その課題解決のために、専門を問わず役に立つ授業を履修する方式である。

もう1つの問題は、今の大学の教育システムでは、ほとんどの学生は学部のと き問題意識を持たず、専門知識を勉強するということだろう。修士課程に進学したら研究計画書を書いて、自分が興味を持っている課題を研究する。つまり今の大学の教育システムでは、このような問題意識を持ち自ら知識を蓄積できるのは修士課程からであるという点である。したがって、学部学生にも、専門知識の形成だけではなく、問題意識や問題解決能力を養成できるような学科が望まれる。

### 4. 離——問題解決学科を創ろう

私は「問題解決学科」を創ることを提案したい。ここで、問題解決学科をPS (Problem Solving) 学部と略称する。

2年前から、北海道大学では学部向けの新渡戸カレッジ<sup>1)</sup>というプログラムが進行している。新渡戸カレッジもPS学部のように学生の専門を問わず入学することができるが、基本的に自分の学部の授業を中心にしている。また、新渡戸カレッジは問題解決の養成よりも、世界の共通語である英語を使って、様々な背景を持つ人々と円滑にコミュニケーションをとるスキルを養成することが重要な目標である。PS学部の目標は、高度な専門知識を有するだけでなく、問題意識を有し、他の人と協力しつつリーダーとしてイニシアティブをとれる総合力を有したグローバル人材像を養成することにある。

#### 4-1. 学生募集

大学の全学部2年生から30名ぐらい、元の専門を問わず、各学部から問題意識を持っている学生を募集する。2年生から募集する理由は、学部の1年次は自分が解決したい課題を考えたことがないかもしれないし、もし解決したい課題があっても、その現実性や専門性に精通できていないかもしれないからである。今のほとんどの日本の大学では、1年生は「全学教育科目」を履修して、専門科目を履修するための基礎知識を勉強する。北海道大学の経済学部の「全学教育科目」の場合は、社会科学系の学問領域にとどまらず、自然科学や人文科学など、幅広い学問に触れることができる。幅広い学問に触れる過程で、自分の解決したい課題も考えることができるし、その現実性や専門性を理解することもできる。

なぜ30名ぐらいしか募集しないのか。後でも説明するが、教育の質を重要視するため、PS学部は大学の多くの資源を占有するからである。

PS学部の入学試験は、研究計画書と英語の試験からなる。研究計画書では、解決したい課題が社会に対する意義と現実性、学生が社会に対してどの程度の責任を持っているかが重要なポイントである。また、グローバル化とともに、外国の研究者や他の分野の人材と協力して行くためには英語力も不可欠である。

#### 4-2. 授業方式

PS学部に入学した学生の問題意識を参照し、それらを例えば日本の人口問題、世界の環境問題、日本の持続可能な経済成長問題、発展途上国の飢餓問題、発展途上国の教育問題などの大まかなカテゴリーで括り、学生をグループ分けする。

PS学部の授業方式は少人数のグループ授業であり、メンバー1人に対して、4~6人の生徒で授業を行なう方式である。同じグループである4~6名の学生たちは、共有している問題意識に基づき、課題を解決すべく協力する。そこでは、みんな同じ授業を履修してもいいし、課題を解決するための知識をメンバー間で分担すべく別々の授業を履修してもいい。そのために、PS学部の学生は、どのような学部や大学院の授業も履修可能であり、大学側はそのための施策を講じることになる。

#### 4-3. 問題点

このようなPS学部には、主要な問題が2つ存在する。

- ① 留学などでPS学部から離れる際には、他大学で同様の質を有したカリキュラムを履修できない恐れがあり、国際的に大学間でPS学部構築のために協力する必要がある。
- ② PS学部の設立は、多くの大学の多くの教育資源を占有し、他学部の学生や教員に負担がかかる可能性がある。

## 5. 終わりに

日本人の友達と色々話をしたときに聞いたことがある。「なぜ日本人の学生は留学をしたくないの？」彼女の答えを聞いたら、すぐに「確かに」と共感できた。「日本が住みやすいから」。中国、韓国に長い間住んだことがあるが、確かに筆者にとっても日本が一番住みやすかった。どの国へ行っても、日本が一番住みやすいと感じるだろう。これは、日本人の、他の人に迷惑をかけないという価値観と関係があると思う。日本人は不満があっても、それを話したら他の人に迷惑をかけるから文句を言わない場合が多いと思われる。また、「12人の優しい日本人<sup>2)</sup>」という映画のように、日本人は「優しい」から自分の意見を言わず、大勢の意見に従おうとするのかもしれない。

その社会の雰囲気、価値観の長所として、みんな「優しい」からお互いのトラブルが少ない。社会が安定的である。つまり住みやすい。だが、短所も多いと思われる。みんな「優しい」からお互いのトラブルや、さらには社会的な問題を解決しようとするのを避ける傾向があると思われる。避けたら解決できる問題もあるが、ぶつけて倒れなければいけない問題もある。

今の日本人、特に若者は問題意識がない、起業家精神がない<sup>3)</sup>とよく聞かすが、そのような「優しい」文化と関係があると思う。だが、社会的な雰囲気、価値観は長い間を通じて形成されたものであり、簡単に改変することはできないし、改変する必要もない。ただ、私が提案したいのは、何人かの人の意識を改変しようということである。少数であっても、他の人をリードし、他の人に影響を与えて社会的な課題を解決していくことができれば、他の人の問題意識を喚起できるのではないか。さらにPS学部が培う問題意識は、起業家精神の中でも、社会のイノベーションを実現できる基礎要因だと思われる。ここで、中国の有名な企業——アリババ・グループの代表者ジャック・マーの有名な言葉を借りたい——「問題があるところにチャンスがある」。

このような人材は、冒頭で論じたような理系学部を推進する近視眼的な教育目的では育成することはできない。文系理系を問わずに、自身の問題意識に応じた多様な学問を学ぶことが不可欠である。このような人材を大学が輩出してこそ、大学は社会的な存在意義があり、経済的にも文化的にも社会を豊かなものにする礎となる。

文中注

- 1) 北海道大学 新渡戸カレッジプログラム  
<http://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>
- 2) 三谷幸喜が東京サンシャインボーイズのために脚本を書き下ろした舞台劇、およびそれを原作とした1991年制作の日本映画
- 3) 世界銀行 Doing Business 2014によると、日本の起業のしやすさランキングは世界120位  
<http://matome.naver.jp/odai/2139899436225745101>  
平成25年度創業・起業支援事業（起業家精神と成長ベンチャーに関する国際調査）『起業家精神に関する調査報告書』  
[http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331\\_gem\\_tyousa\\_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%](http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%)

参考文献

- ・ トマ・ピケティ『21世紀の資本』みすず書房、2014年
- ・ 一般財団法人ベンチャーエンタープライズセンター 平成25年度創業・起業支援事業（起業家精神と成長ベンチャーに関する国際調査）「起業家精神に関する調査報告書」平成26年3月  
[http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331\\_gem\\_tyousa\\_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%B7%E6%A5%AD%E5%AE%B6%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E4%BF%82%E6%95%B0](http://www.meti.go.jp/policy/newbusiness/downloadfiles/140331_gem_tyousa_houkokusyo.pdf#search=%E8%B5%B7%E6%A5%AD%E5%AE%B6%E7%B2%BE%E7%A5%9E%E4%BF%82%E6%95%B0)
- ・ 日本学術会議経済学委員会 経済学分野の参照基準検討分科会報告「大学教育の分野別質保証のための教育課程編成上の参照基準 経済学分野」2014年8月29日  
<http://www.iwamoto.e.u-tokyo.ac.jp/memo/SBS/kohyo-22-h140829.pdf>
- ・ 経済学分野の教育「参照基準」の是正を求める全国教員署名 2013年10月28日  
<https://pro.form-mailer.jp/fms/8fe8371a49520>
- ・ 北海道大学 新渡戸カレッジホームページ  
<http://nitobe-college.academic.hokudai.ac.jp/>

【受賞者インタビュー】

受賞できたことで、  
これから頑張っていく  
原動力を得た



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

今回の論文コンテストのテーマの中で、「守破離」という言葉に興味を持ち、自分のアイデアを「守破離」の精神から表現したかったからです。

——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

論文を書いたのは1週間ぐらいですが、いろいろ資料を調べたり、頭の中で構想を練ったりすることに長い時間がかかりました。

——この論文を書く上で苦勞したことはありますか？

論文を書く文法や表現は、日常生活に使われる文法や表現と違いがあるので、外国人として正しく書くのが難しかったです。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

まずは、入賞して本当に嬉しかったです。今回の論文は自分自身についてもひとつの肯定となりましたし、これからもっと頑張っていくための原動力になりました。

——今、どんなことに興味を持っていますか？

今は、日本や中国の貨幣問題に興味を持っています。

# 中国留学生から見た 青森県の地域活性化について

弘前大学大学院 人文社会科学研究所 修士課程2年

金 春海 きん はるみ (中国)



青森県産のりんごを出発点にした、青森と世界という複眼的な思考に独自性がありました。留学生として青森で生活する筆者にしか書けない、実感に基づく具体性に富んだ記述や、図表を用いた考察のユニークさ、多様な調査を実施した積極性も評価されました。

少子高齢化が急速に進んでいる地方、若者の流出も高まり、東京一極集中となりつつある今日、地域創生は迫った課題となってきた。青森県も例外ではない。増田寛也さんの『地方消滅』では、2040年に青森県の20～39歳の女性は50%減少するそうだ。筆者は弘前大学の学生であり、青森で2年間の留学生生活を送ってきた。本論では留学生の視点から青森県の地域活性化をいかに創るべきか検討し、その対策について、りんご輸出の拡大、そして観光産業の盛り立て、この2つの面から述べる。

経済発展が目覚ましい諸国に対する「高級」果実の輸出は、注目を浴びてきた。青森県は農林水産業を営んでおり、特にりんごは全国でも有名で、高い評価を得ている。青森は日本一のりんご産地であり、りんごといえば青森、青森といえばりんごと深い繋がりがあがる。しかし、りんごの輸出は台湾への依存度が90%と高く、中国の内陸都市への輸出はほんの少ししか見られない。日本に隣接している中国は、ご存知のように13億人以上の人口を有している国である。そのため、中国市場の開拓がうまくいくと、青森県産りんごの輸出は更なる拡大が見込まれる。

2014年2月、筆者は弘前大学の「地域の創生に貢献する人材の育成プログラム」に参加し、上海で青森県産のりんごを販売しながら、卸売市場の上海輝展果蔬市場と繁華街の高級スーパーOle、この2カ所で青森県産品のりんごの値段についてアンケートを行った。

上海輝展果蔬市場は、世界各国から果物を仕入れて、小売店に向けて販売する卸売市場である。そして、Oleは外国系スーパーで、パン、ワイン、カットサラダ、果物、チーズ、ハムなど、在住外国人向けの食材が揃っている。Oleでは果物の売り上げが一番だそうだ。

それぞれのりんごの値段について統計したところ、上海輝展果蔬市場では、金星が28玉で460円(1玉約320円)、サンふじが14玉で260円(1玉約370円)、世界一が11玉で280円(1玉約500円)、王林が32玉で367円(1玉約230円)であった。一方Oleでは金星が1玉76円(約1,500円)、サンふじの場合、小さい玉は1玉40円(約800円)、ちょっと大きい玉は1玉76円(約1,500円)、世界一は1玉122円(約2,440円)、王林は小さい玉が1玉41.8円(約800円)、大きい玉が1玉76円(約1,500円)である(表1)。

表1 青森県産りんご1玉あたりの値段の比較

	上海輝展果蔬市場	Ole
金星	320円	1,500円
サンふじ(小)	370円	800円
サンふじ(大)	不明	1,500円
世界一	500円	2,440円
王林(小)	230円	800円
王林(大)	不明	1,500円

2015年8月 筆者が調査結果を元に作成

表2 りんご移出業者の商協連加盟数

(単位:社)

年	商協連加盟数
S.58	320
H.10	130
H.15	118
H.20	94
H.25	79

出所: 講演稿「りんご移出業者の出荷戦略と在庫管理」  
北山 和彦 2015年

表3 全国のりんご収穫量と青森県のりんご収穫量

(単位:千t)

年産	全国りんご収穫量	青森県りんご収穫量
S.51	879	416
S.52	959	475
H.元	1,045	503
H.2	1,053	501
H.10	879	477
H.20	911	493
H.23	655	368
H.24	794	446
H.25	742	412

出所: 講演稿「りんご移出業者の出荷戦略と在庫管理」 北山 和彦 2015年

表1から分かるように、上海輝展果蔬市場とOleで販売している青森県産のりんごの値段は、遥かに差がある。しかも日本国内に比べても相当高い。その原因はいろいろあると思うが、まずりんごを卸売市場、小売業者などに移出しているりんごの移出業者の商協連加盟数がどのような影響を与えているか見てみよう。表2で示したように、昭和58年に商協連加盟数は320社、平成10年には130社、そして平成25年には79社に減少し、この30年間で約4分の1になっている(表2)。

しかし、青森県のりんごの収穫量と全国のりんごの収穫量を見ると、青森県のりんごの収穫量は年々若干変化があるものの、全国でのシェアは高くなりつつある。このことから、りんご移出業者の変化はりんごの移出に大きな影響がないと判断できるだろう(表3)。

では、上海で販売している青森県産りんごは、なぜそんなに高いのだろう。その理由は、青森県産のりんごは形の揃いや大きさ、色の付きかたが良く、食味、芳香、鮮度などどこから見ても世界一の品質であるからであろう。中国で販売しているりんごを見ると日本に比べて小さいし、少し傷が付いているものもあれば、つるがあるものもないもの、ワックスが塗られているりんごなど、さまざまである。そのため、このようなりんごに慣れている中国人には、かえって青森のりんごは色がきれいで大きいから薬を入れていないかなどと心配をしている人も多く見られる。青森県の「キタエアップル」という会社から青森県産りんごを仕入れて、上海Oleで販売を手掛けている小売業者のJCKの斎藤青雲社長に聞くと、こんなに高い値段でりんごを販売しても、実は利益はあまりないそうだ。青森でりんごの輸出に携わる山野りんご株式会社の山野社長は、「りんごはアップルではない(This is not an apple. It is another kind of fruit!)」とキャッチフレーズを用いながら強調し、青森りんごと他のりんごとの差

別化を重要視している。このように、いかに青森県産のりんごを中国国内のりんごと差別化し、ブランド化して中国国民に知ってもらうかは、重要な課題の1つであると思う。

もう1つの課題は、りんごの価格である。2015年、青森の有袋りんごの栽培比率は30%を切っている。有袋は無袋に比べ、木箱1箱最低700円以上の高価格が付かないと作る農家は少ない。有袋りんごは色付きがとても良く、台湾では大好評である。しかし、栽培に手間がかかり、その分収益もないため、栽培をやめる農家が増えてきた。このままいくと有袋りんごの輸出価格が上昇し、台湾での市場が懸念される。有袋りんごの価格だけではなく、表1で分かるように、中国において青森県産りんごの価格は日本国内に比べて相当高い。りんごの輸出を拡大するには、価格を抑える措置を取る必要があると思う。そのためには国内の小売業者だけでなく、海外の小売業者との取り引きを増やして市場を確保する必要があると思う。

前述したように、青森県産のリンゴの輸出は、台湾への依存度が90%と高い。しかし、台湾の衛生福利部食品薬物管理署(FDA)基隆弁事処は2015年3月24日、10社の台湾企業が、東京電力福島第1原子力発電所事故の発生で輸入禁止地域としている福島など5県の食品の産地を偽装して申告している事例を発見したと発表した。FDAは産地偽装の疑いのある食品283件のリストを公表し、輸入企業に対し、卸し先の企業に市場から商品を撤去するよう通知した<sup>1)</sup>。産地偽装を防ぐために台湾政府は、原産地証明の添付と、野菜・果物・乳製品などの特定食品について、公的機関が発行する放射能検査済み証明を希望している。このような「食品の産地偽装問題」により、台湾では日本からの食品輸入について規制が強化されることとなった。台湾は福島原発の事故発生後に福島、茨城、栃木、群馬、千葉の5県の食品輸入を禁じていたが、この事件

後は残る42都道府県の食品でも産地証明書の添付が必要となると発表した。これは青森県にも影響が及んでいる。マルジン株式会社の社長に話を伺ったところ、現在、台湾にりんごを輸出するには、りんごの産地を明記する以外、農林水産省の検査を受ける必要があり、前より一層手間がかかるようになったそうだ。中国内陸でのりんごの需要が高まると、このような事例が再び発生するかもしれないので、日本の関連部署からもそれを防ぐために前もって措置を取っておく必要があるのではないかと思う。

それでは、次に青森県の観光産業の盛り立てについて述べたいと思う。青森県は四季鮮明な所であり、春は桜祭り、夏は弘前ねぶた祭り、青森ねぶた祭り、秋は紅葉祭り、菊祭り、冬は雪灯籠祭りなど四季を通じて祭りがあり、何よりも世界遺産の白神山地、十和田湖、十二湖、八甲田山などの自然風景が絶景である。温泉地の数は全国で4位と高い位置を占めている。しかし、このような四季を通じて観光が楽しめるきれいな所が、まだそれほど中国人に知られていないのが現実である。2010年の中国における日本の都道府県の知名度を見ると、中国に最も知られている都市は東京、次いで大阪、京都は第3位で、その次が北海道である。そして、沖縄が第5位、広島が第6位、福岡が第7位を占め、青森県は23位である。青森県のすぐ隣に位置する北海道の知名度に比べて、青森県の知名度は信じられないほど低いことが分かる。

実は北海道の知名度は、2008年12月に中国の馮小剛監督が『非誠勿擾』という映画を撮影した後に飛躍的にアップしたものである。北京出身の馮小剛監督は、この北海道ロケに関し、交友関係のある人物の紹介で、1990年代に東京から釧路へフェリーで訪問したことがあり、本人はひどく風景に感動したそうだ。映画の中に出演している主人公の舒淇（スー・チー）、葛優（グォ・ヨウ）、徐若瑄（ビビアン・スー）は、中国で大人気の俳優である。この映画の後半の主な舞台は日本の東北海道の釧路、阿寒湖、網走、厚岸、斜里、美幌で、その映画は中国で大ヒットとなり、中国に北海道観光ブームを巻き起こした。表4は2000年から2013年までに北海道を訪れた中国人の観光客数を示したものである。北海道を観光した中国人は2002年の5,200人から徐々に増え、2008年は47,400人に達している。その後の2009年、2010年、この映画を撮影した後のこの2年間の数字に注目してもらいたいのだが、北海道への観光客数は2008年の47,400人から急速に増え、2009年に92,700人と前年度対比で95.6%増加し、2010年には135,500人と前年度対比で46.2%増加している（表4）。

この映画のシーンに出てくる観光スポットのJR釧網本線北浜駅、能取岬、町道朝日10号線、キリスト兄弟団斜里教会、阿寒湖、知床グランドホテル北こぶし、炬燵た浜っ子居酒屋等は、

今日でも中国人にとっても人気がある。もちろん、青森でも韓国ドラマ「優しい男」の撮影があり、このドラマは韓国で大ヒットしたが、主な舞台として登場するシーンが短く、しかも中国にはまだその影響が及んでいない。中国人に青森県を覚えてもらうためには、青森県のりんご農園、白神山地、十和田湖、十二湖、八甲田山などのロケ地を中国映画、ドラマの主舞台として登場させ、しかも登場するシーンを長く、印象深く撮影してもらう必要があるだろう。このような映画かドラマをたくさん撮影してもらうと、中国において青森県の知名度は当然高くなるし、青森県にも中国人の観光ブームが起こるのではないかと思う。

私は中国吉林省の延辺大学の日本語教育学科を卒業し、その後、大連のIBM株式会社に勤めたことがある。そんな私がなぜ日本にやってきたか今でもよく周りの人に聞かれるが、その理由は、会社に勤めていた時、日本人のお客様向けにサービスを提供していたが、その時、日本人のお客様からよく「中国人は日本語ができて日本文化、日本人の考え方が分からないと商売とかできないよ」という声を耳にしたからである。私が日本に来て一番驚いたことは、街の清潔さ、そして街の中の静かさだった。中国ではよく見かけるゴミが日本ではめったに見られず、ゴミ箱もビンや缶、ペットボトル、燃やせるゴミ等にきちんと分類されて設置されていることに驚いた。そして、街中を走る車は割り込みをせず、お互いに譲り合いながら進んでいるため、

表4 北海道の中国人客数

(単位:人)

年	中国人客数
2000年	2,400
2001年	3,900
2002年	5,200
2003年	5,800
2004年	12,050
2005年	15,650
2006年	17,350
2007年	26,950
2008年	47,400
2009年	92,700
2010年	135,500
2011年	101,400
2012年	102,200
2013年	158,300

出所：北海道経済部観光局が統計した訪日外国人来道者の推移を元に作成 2014年

クラクションの音が聞こえなかった。このような状景は、日本に来る前までは分からなかったことである。まさに、日本の文化、習慣、日本人の考え方等を理解しないと商売がうまくいくはずがないと思った。

この2年間、私は日本と中国の文化、習慣など異なる文化を理解するため、弘前で行われる祭り、イベント等に積極的に参加した。春の桜祭り、夏のねぶた祭、秋の菊と紅葉祭り、冬の雪灯籠祭りなどは、いずれも中国では体験できない貴重な経験となった。それだけでなく、私は弘前大学、岩手大学、秋田大学の3大学の合宿活動、着物の教室、市民との餅作り大会、りんご品評大会、津軽よさこい等にも積極的に参加し、日本人の学生、日本の市民と交流を深めた。そして、このような触れ合いを通して、日本への理解を深めてきた。表5は私がこのような活動を通じて感じた食文化、生活面の違いである。(表5は青森県で実感したものと中国東北地方の文化、習慣を比較して作成したものである)。私はこの経験を共有することで、日中両国の人々の円滑な交流に少しでも貢献できたらと思う。

#### 文中注

- 1) 日本貿易振興機構JETRO 世界のビジネスニュース「輸入企業による日本食品の産地偽装申告が発覚」2015年3月26日  
<https://www.jetro.go.jp/biznews/2015/03/55136689df250.html>

#### 参考文献

- 北海道公式ウェブサイト「北海道観光入込客数の推移」  
<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/kz/kkd/irikominosuii.htm>
- 黄孝春・平本和博『りんごをアップルとは呼ばせない——津軽りんご人たちが語る日本農業の底力』弘前大学出版会、2015年
- 増田寛也編著『地方消滅——東京一極集中が招く人口急減』中公新書、2014年
- 戴二彪「訪日中国人観光客の旅行先分布構造と影響要因」東アジアへの視点 2012年  
[http://shiten.agi.or.jp/shiten/201203/shiten201203\\_01-12.pdf](http://shiten.agi.or.jp/shiten/201203/shiten201203_01-12.pdf)
- 田中重貴「日本産りんご輸出における産地流通主体の役割：青森県産りんごを事例として」北海道大学農経論叢 第62号 pp.141-150、2006年  
[http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/8355/1/62\\_12.pdf](http://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/8355/1/62_12.pdf)

#### [受賞者インタビュー]

### 日本と中国の 架け橋になれるよう、 日本でITを学びたい



#### ——コンテストに応募した理由、きっかけは？

弘前大学に留学するときに、中国の友達や先生に「青森ってどこ？」と言われ、青森は知られていないんだなと思いました。青森県の知名度を高めたかったし、青森の活性化につながるのではと思って応募しました。

#### ——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

字数制限が一番大変でした。大学の研究で行っている上海でのりんごの販売活動や現地の人の声、そこで気づいたことなどを字数制限内にまとめるのにとても苦労しました。

#### ——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

青森では地域活性化という課題が活発になってきています。この論文を書いたことで、青森県の魅力をたくさんの人に伝えられたかなと思っています。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか？

PCでWebページを作ったりするのが好きで、IT技術者のための試験を受けようと思って勉強しています。ITを駆使して社会生活を支えることに興味があるので、日本で技術を学びたいです。そして将来は、日本と中国が円滑にビジネスができるように、「日本と中国の架け橋」のような人になりたいと思っています。

表5 日本と中国の習慣

	日本	中国
食習慣	ニンニクは値段が高く、家庭ではあまり使わない	ニンニクは値段が安く、料理によく使う
	野菜が高い	野菜が安い
	スーパーで売っている肉はステーキ用、ひき肉、角切り等に	肉はほとんど市場で1kgくらい買って、自分がステーキ用、角切りなどに切る必要がある
	生卵をご飯にかけ、醤油を入れて食べる	生卵は食べない
	ラーメンと餃子を一緒に食べる	餃子は主食、水餃子をよく食べる
	辛いものが食べられない	辛いものが好き
	お弁当のおかずの種類が多い	お弁当のおかずが少ない。大体1品か2品
	コロッセ、から揚げ等の揚げ物をよく食べる	主に炒めた料理を食べる
	甘いものが好き	甘いものより辛いものや、濃い味のものが好き
	朝食はほとんど家で作って食べる（ごはんか、パン）	朝食はほとんど外で買って食べる（豆乳、揚げパン、おかゆ、肉饅頭、焼餅など種類がいっぱいある）
	どうもろこしは柔らかくてジューシー	どうもろこしは固い
	果物などは1個ずつ売っている	果物は1斤（500g）単位で売っている
	カクテルが安い	カクテルは高級なお酒であり、普通のレストランでは販売していない
	ビールは冷えている	ビールはぬるい、ほとんど瓶ビール、生ビールは少ない
	飲み放題をやっている居酒屋が多い	居酒屋は少ないし、お酒は瓶ビールか、白酒が主流。飲み放題の店はほとんどない
	人数分の料理、1人1人のお皿で食事	大きなお皿を複数の人が囲んで一緒に食べる
	りんごは焼いても食べる	焼きりんごはほとんどない。クリスマスイブにりんごを食べる
	刺身など生ものが好き	生ものはほとんど食べない
生活 & 文化	市民も大学の図書館に入れる	大学図書館に入れるのは、その大学の学生か先生のみ
	小学校の時から学校で水泳を教える	水泳はめったに教えない
	期末試験はレポートが多い	95%筆記試験
	迷惑をかける行為はしない	どこでも大きい声で話す
	電車やバスの中では電話をしない、電話はマナーモードに設定するか電源を切る	バスの中で普通に通話する
	運賃は後払い、運賃は距離によって違う。両替ができる	バスの運賃は乗る場所、降りる場所に関係なく値段は同じ。しかも前払い。両替はできないため、事前に用意
	車は走行中、クラクションを鳴らさない	常にクラクションを鳴らす
	どこのトイレにもトイレペーパーが置いてある	高級なデパート等を除いてトイレペーパーはなし
	すべての国民に医療保険がある。国が7割負担、国民が3割負担	会社員、公務員だけ。田舎の人や、自営業の人はなし。しかも3割負担でなくて、まず自分で全額を払って、その後保険会社に請求し、保険会社が保険対象内の業であるか、保険対象外の業であるかを判断し、保険対象内の業の料金を口座に振り込む
	子供を生んだら政府から補助金が出る。おもちゃや粉ミルクももらえる	一人っ子政策、次の子供を生むと罰金。政府からの補助は一切なし
	貸し出ししているアパートの中にほとんど何も無い	冷蔵庫、テレビ、ガス台、エアコンは基本的なもの、電子レンジなどは大家さんに相談可
	寒い東北地方なのに床暖房はほとんどない。ストーブかエアコンを使用	東北地方はどの家も床暖房か、スチームが設置されている
	銀行は土日ほとんど休み	銀行は土日営業
	通帳を使う人はまだ多い	お年寄り以外の人はカード、通帳はあまり使わない
	通帳を使って一覧をチェックする人が多い	お金の引き出しや、預かり入れ等の動きがあったとき、指定の携帯に通知する機能が設置できる
	カラオケを歌う時は、順番に1人ずつ回して歌う	歌いたい人が結構歌う。盛り上がるのが重要視されている
	ヘアカット代が高く、女性の場合3000円くらい（1000円カットを除く）	中国では約20-50元（400円～1000円）。1000円だったら結構高級なサロンでカットできる
	コンタクトを使う人が多い	めがねをかける人が多く、コンタクトを使う人は少数
	日本人は中学生ごろから化粧する	大学生も、会社員も化粧をしない女性がいっぱいいる
	運転手の席は右。左側通行	運転手の席は左。右側通行
	お湯はあまり飲まない	風邪を引いた時も、寒い時もお湯をよく飲む
	水道水を飲む	家にはウォーターサーバーを置いて水、お湯を飲んでいる。水道水は沸かさないと飲めない
	奇数が好まれる	偶数が好まれる
	結婚すると女性の名字は変わる	結婚しても女性の名字は変わらない
	おもてなしの心を重要視している	孔子の中庸思想が強い
	定年後、カルチャセンター等に通って勉強を続ける人が多い	定年後、ほとんど遊び、勉強している人はほんのわずか





特別審査委員賞 [留学生の部]

## デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか ——選択代行時代への移行

一橋大学大学院 社会学研究科 文部科学省国費研究留学生1年

朴 知遠 ぱく じおん (韓国)

タイトルにとどまらず、問題意識や着眼点がユニークで、文章の上手さで読ませる力も評価を得ました。デジタル化がさらに進行した2030年の未来では、考える力や周りへの関心といった「人間らしさ」を守るべきだという主張が印象的でした。

### 1. はじめに

#### デジタル時代の迷子：溢れる情報の海にて

インターネットの登場により、私たちの生活形態は一変した。通販サイトを利用して海外で販売されているものを簡単に手に入れたり、SNSを用いて自宅にいながら世界中の人々とコミュニケーションが取れる世界が到来したのである。技術の力は物理的制限を越えて、以前とは比べられないほど多様な生き方を可能にしている。このような流れの中で生まれたのが「ノマド族」と呼ばれる、デジタル遊牧民の存在だ。

彼らはどこかに束縛されず、独特なライフスタイルを持つ。全世界を旅行しながら自分の経験をSNSにアップしたり、本を書いて生活している人や、趣味で始めたブログが有名になり、そのブログの広告収益で生活しながら自分の会社を設立したケースもある。彼らの共通点は、常に新しいものを追求する態度である。トレンド戦争で負けてしまうと、すぐ忘れられてしまうウェブという新しい生態系の中で、ノマド族はトレンドを主導するリーダーとして日々奔走している。このような一連の変化は、企業にとって、既存のデータだけでは変化の速度に合わせて物を生産することが大変難しくなることを意味した。従って、速く変わっていく消費者の行動パターンに対して速やかな分析が出来る新しい技術が必要となったのである。

しかし、デジタル遊牧民のようにトレンドをリードする人は極めて少数で、大半の人達は溢れる情報の中で何を選べばいいか、混乱を感じている。心理学者ジョージ・ミラーによると、人間が一度に覚えらるる情報量は5つから9つだという。また、オックスフォード大学の進化人類学者、ロビン・ダンバーによると、人間が知り合って交流可能な最大人員は150名ほどのことである。にも関わらず、現在私たちが選べる商品の数は数万個を超え、SNSなどを通して知り合いが数千人を超える場合も多い。

私たちは毎日、数えられないほどの商品や人間に触れ合いな

がら何かを選択する。情報の急増は選択の幅を広げてくれたが、その代わりに不正確な情報、信用出来ない人間と遭遇する可能性も増やしてしまった。例えば、図1のように、私たちは旅行をする時、主にインターネットを用いて旅行先を決めている。しかし、その情報には広告や間違った内容も混ざっており、ネット上の情報だけで旅行先を選ぶと失望する可能性も少なくない。つまり、私たちは毎日の選択から「不確実性」に直面している。溢れる情報の海の中で、まるで迷子のように道に迷っているのである。このような問題を解消するため、消費者側でも「より正確で、役に立つ情報」を選別し、求めるようになった。そして、この願いはやがて、「ビックデータ」という新しいものへの探求を導いた。

### 2. ビックデータという幻：機会か、危機か

「ビックデータ」とは何なのか、ひと言で定義するのは大変難しいが、一般的には数えられないほど多くの情報を含んでいるデジタルデータの集まりを示す。ビックデータの発展には、インターネットの普及によって情報へのアクセスがより易くなったことが決定的な役目を果たした。企業はユーザーのウェブ上での移動経路や、検索結果などを把握し、その人の趣向に合わせた商品を紹介することが出来るようになった。店舗では、POSと呼ばれる端末機に記録される売り上げの推移や特定商品が売れる時間帯に関する統計データを他店舗と共有し、在庫が残らないように商品を発注をしたり、Aという商品を買うお客様が選ぶ可能性の高いBという商品を特定し、商品陳列を変更することもある。

しかし、ビックデータの裏には致命的な問題点がある。あまりにもデータ量が多いため、分析過程でバイアス(誤差)とノイズ(求める情報とは関連性が少ない情報)が含まれる可能性も高いのである。統計はあくまでも確率に基づいて予測を行う。

ビックデータのように情報量が多い場合、サンプルを取ったり、分析する過程で数多くの変数が入ってしまい、変数間相関関係や変化の程度を正確に測定するのが大変難しくなる。それに加えて、ネット上のユーザの動きを同意なしにトラッキング（追跡）し、個人のプライバシーを侵害する可能性もある。そして、確保した情報が信頼できるものかどうか、確認することが難しいという問題も持っている。

この問題に対して統計学者やデータ分析家たちは、新しい解析法を工夫したり、分析技術を向上させることによって対処してきた。2008年のアメリカ大統領選挙結果について、50の州のうち49の州の結果を正確に予測して有名になった専門統計分析家ネイト・シルバーは、彼の著作『シグナル&ノイズ』で、ビックデータのような変数が多く膨大な情報が存在する場合、数学の「ベイズ推定」を用いると、ある事件が発生する前に持っていた情報（事前確率）を活用し、事件が発生した原因に対する確率（事後確率）を求めることができるという。

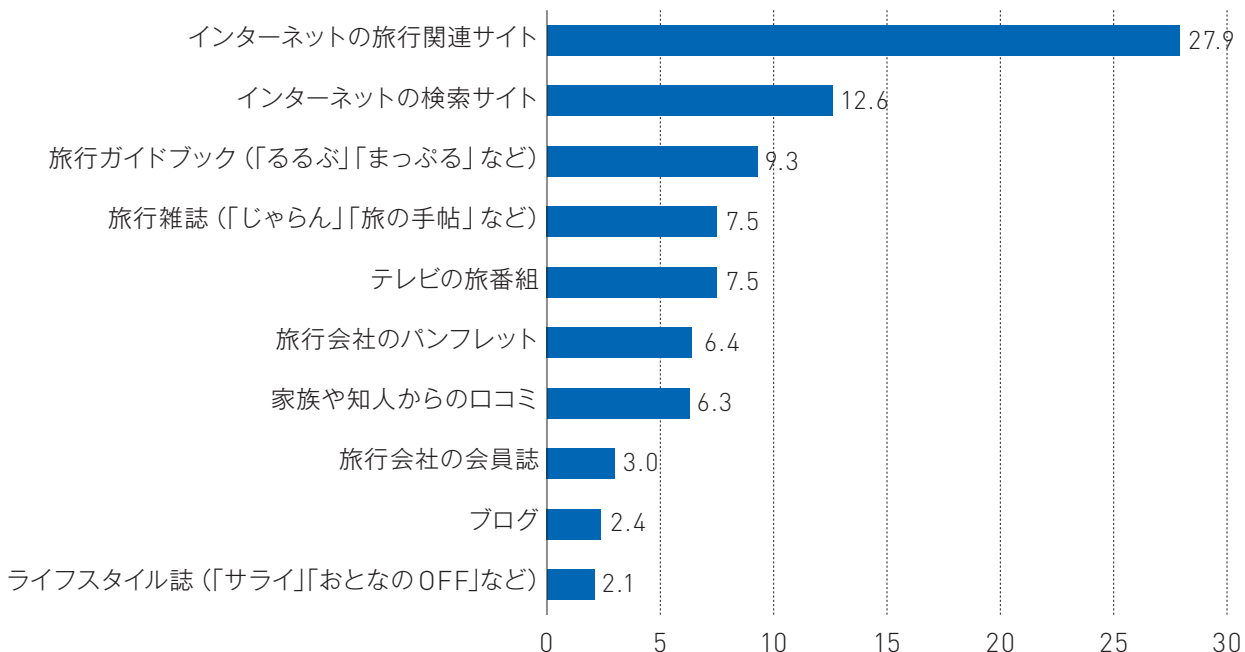
ある人が癌を患う確率が1.4%だと仮定してみよう。癌診断をする時、結果が正しい確率は75%、間違っている確率は25%だという。この場合、ベイズ推定を用いると、検査を受け、癌だという結果が出た時、実際癌を発症している確率は11.9%になる。ここで事前確率は1.4%で、検査結果癌だと判明された後、

実際癌になっている確率は事後確率で11.9%だといえる。この結果は、検査の不確実性という事実を反映し、実際癌を患う確率を計算したことから意味を持つ。

もう一つの例として、進化的アルゴリズムに注目したい。進化的アルゴリズムとは、データや分析結果を集めてメタヒューリスティックな最適化を実施し、進化的計算を行う人工知能である。癌の例で考えてみると、実際に癌になった人のリスト、癌検診結果、その検診結果が間違ったケースなどを全部集めて、指定された確率で模擬実験を行う。普段何十年もかかる実験を、シミュレーションして短期間に無限反復させ、その結果を記録し、結果からさらに癌発病の要因になる可能性が高い要因を分析する。

ビックデータは、このような技術的補完がある時、真の価値を持つ。しかしその進歩は、どんどん人間の仕事の領域を脅かしている。今はまだ未熟な段階であるが、2030年頃にはこのような技術がより広い分野で活用され、個人の趣向分析や疾病管理から飢餓問題、地球温暖化まで、数多くの課題を解決する道具になっていくと予測されている。つまり、伝統的に人間の領域だと考えられた判断と予測の問題さえも、コンピュータが解決する時代が近づいている。このような時代の変化は、私たちに何を示唆するのか。

図1 旅行先選択の決め手になることが多い情報源



※公益財団法人日本交通公社 観光文化事業部によるオピニオンリーダー層へのグループインタビュー調査 (2008年12月) より

### 3. デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか： 進歩する技術の中で人間が持つ力

『アンドロイドは電気羊の夢を見るか』というタイトルの小説がある。1968年に出版されたこの物語は、核戦争が行われた後の地球を舞台にしている。大多数の人間は火星に逃げてしまい、地球には火星から逃げて来たアンドロイド（ロボット）と少数の人間が共存していた。主人公のリックは家で電気羊を飼っており、怪我をして働けなくなった友人の代わりに火星から地球へ不法に入ってきたアンドロイドを退治する仕事を始める。リックに与えられた任務は、人間とほぼ違いがない、新型アンドロイドを破壊することだった。この世界でのアンドロイドと人間の差は、他の生命体に共感できる感情を持っているかどうかである。動物は核戦争でほぼ絶滅してしまい、生きているものは高い値段で売られている。リックの夢はアンドロイドを退治し、その懸賞金で本物の羊を買うことだった。

しかし、彼は任務を果たしながら、自分の仕事に疑問を抱いてしまう。人間のように美しい歌を歌うアンドロイド、そして放射能に汚染された人間を徹底的に疎外し、いじめる人間の残酷性を目にして、どちらが正しいか分からなくなったのである。このような悩みが、私たちの世代にはどんどん深くなっていくと考えられる。2030年代になると、さらに進歩した形の技術、例えば3DプリンタやIoT（モノのインターネット）が実用化され、毎日の選択——例えば何を食べるか、何を着るかなど——をコンピュータが代行するようになると予測される。人間は技術の進歩やデータの力で「不確実性」という障害物を壊していく一方で、守るものとしての「人間性」を、哲学ではなく生存の問題として再び考えなければならぬかもしれない。

技術の発展は人間の生活をより豊かにしてくれたが、その分、考える力や周りへ関心を注ぐ機会を奪ってしまった。クリック1回でほぼ全ての知識が調べられる世界で、わざわざ頑張って世界地理を暗記することは無駄だと考えるかもしれない。ネット上でも遊べる人はいっぱいいるのに、顔を合わせ気を遣わなければいけない友達に時間を使うのは疲れると思う人もいるだろう。しかし、考える力や他人の感情に共感しようとする態度があるからこそ、人間は人間らしく生きていられるのではないだろうか。

私たちが「人間らしさ」を守らなければならないもう一つの理由は、生物学の中でも見つけることができる。かつてハーバート・スペンサーは、「適者生存」という概念を通して、「自然は生き残る種の特徴をランダムに選び、最も環境に適している、生き残った固体の子孫がより増え広がる」と主張した。これは、競争で勝ち残ったものだけが増え広がるという意味ではなく、むしろ自然がいつ、どう変化していくか、完全に予測することは人間には出来ないため、種全体の生存率を高めるためにも障がいがある人、社会的弱者などと助け合う必要があるということを示す。

今の基準ではあまり頼りになりそうもない人でも、先の小説のような地球滅亡の危機が来た時、彼の体の中に新しい環境に適応出来る力が潜んでいて、生き残り、新しい社会を再建していくかもしれない。他人に共感したり、集団生活をしながらお互い助け合う文化は、人間の生存のために必要不可欠な条件のひとつだった。人間同士の協力がなかったら、人類の文明がここまで発展することも出来なかったのは明らかであろう。

### 4. おわりに 選択代行時代のコンサルティング： マクロからミクロへの進化

それでは、このような変化の真只中で、私たちが「創るもの」とは何か。私はコンサルティングからその答えを求めてみたい。今まで「コンサルティング」と言うと、何か巨大なシステムを構築したり、有名な会社の未来を左右する戦略を立てるなど、大きなプロジェクトに関わるイメージが強かった。しかし2030年代のコンサルティングは、このようなマクロの領域だけではなく、ミクロの領域まで拡張し、私たちの様々な日常生活の問題を解決したり、選択をする時に役立つようになると考えられる。

人が認知可能な範囲を超えて情報が広がり、選択可能なものが多すぎると、人々は混乱を感じて、むしろ考えるのをやめようとする可能性がある。ビックデータの機械的分析や人工知能による予測は、このような混乱の時期には人々の意思決定を手伝う有用な道具になれるが、人の心に伝えるあたたかさや優しい助言までは期待しにくい。私たちが毎日出会う選択という機会は、ただの情報だけではなく、個人の趣向や意思が反映される所で、より複雑な性質を持つ。

溢れる情報の中で、人間は誰を信用して自分の情報を任せたり相談すればいいのか、分からなくなってしまう。このような隙間をコンサルティングが埋め、より合理的な意思決定が出来るように手伝う必要がある。人間は、データだけでも感情だけでも生きられない。そのどこかでバランスを取って、不安な現実から安定感を求めるためにも、他人の手助けを必要とする。このような時代的要求によって、相談とコンサルティングは融合していく可能性が高い。データだけならコンピュータでも求めることができるが、それ以上の何かを求める人たちがいる限り、コンサルティングはこれからも存続して行くのだろう。

自分も知らないうちに自分の検索結果や消費パターンが分析され、コンピュータから最適消費パターンを勧めてもらう選択代行の時代を目の前にしている今、私たちは道を迷いながらどこかに辿り着くため、新しい神託を求めている。そしてビックデータという「電気羊」と、人間のあたたかさという「本物の羊」の中のどこかにコンサルティングがある。

## 参考文献

- ・ 公益財団法人日本交通公社ホームページ「インターネット情報の氾濫と「外れ」リスク」[コラムvol.69]、2009年2月13日  
<http://www.jtb.or.jp/researcher/column-information-internet-risk-shioya>
- ・ Manuel Grana [Information Processing with Evolutionary Algorithms: From Industrial Applications to Academic Speculations (Advanced Information and Knowledge Processing)] Springer London; 1版、2006年
- ・ チャン・グンヨン「心理学オデッセイー私が知らない私を探して行く冒険」イエダ出版社、2009年
- ・ 一般社団法人ソーシャル・デザイン Social Design News「旅しながら働く。oDeskの調査から分かる「デジタルノマド」という大潮流」  
<http://social-design-net.com/archives/12141>
- ・ ネイト・シルバー『シグナル&ノイズ：天才データアナリストの予測学』日経BP社、2013年
- ・ ビクター・マイヤー＝ショーンベルガー『ビッグデータの正体：情報の産業革命が世界のすべてを変える』講談社、2013年
- ・ フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るか?』早川書房、1977年
- ・ マルコムグラッドウェル『ティッピング・ポイント いかにして「小さな変化」が「大きな変化」を生み出すか』飛鳥新社、2000年

## 【受賞者インタビュー】

### 字数制限内で 伝えたいメッセージを 表現するのに苦労した



#### —— コンテストに応募した理由、きっかけは？

学校に貼ってあったポスターを見て興味を持ち、応募しました。

#### —— この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

構想やアイデアを絞り出すのに1週間ほど、書き上げるまで1週間ほどかかり、合わせて2週間ほどかかりました。

#### —— この論文を書く上で苦労したことはありますか？

字数制限に合わせて話したい内容を圧縮し、表現するのが大変でした。そのため、ディテールを諦めて、伝えたいメッセージを集中的に書くことにしました。

#### —— この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の中で漠然と考えていたビックデータや、最近の統計的分析法の問題点などを人文的視点でちゃんとまとめられたことです。

#### —— 今、どんなことに興味を持っていますか？

日本の未来、特に移民政策や外国人労働者の受け入れ、その中でも特に高度人材育成政策や留学生の就労状態に対して興味を持っています。

# 私たち、夢に向かってまい進中!

2006年に始まり、開始以来10年めの節目を迎えた「NRI学生小論文コンテスト」では、これまでたくさんの受賞者を生み出してきました。本コンテストの受賞者は、OB・OGとなってもNRIや受賞者同士のつながりがあり、今回の「NRI学生小論文コンテスト2015」の表彰式にも出席し、後輩の受賞を祝いました。表彰式後はOB・OG懇親会が開催され、近況を報告し合って交流を深めました。そこで、この誌面で受賞OB・OGの近況をご紹介します!



## IT会社を経営しています

宮川 耕 さん | 第1回(2006年)【大学生の部】優秀賞受賞  
論文タイトル: ユビキタスネットワーク社会が要求するルールの変更とその功罪  
応募当時: 早稲田大学商学部4年

第1回めのコンテストの応募数は約130、第10回めの今回が約2600。この10年で応募数は20倍になり、それだけ世の中で認知されてきたということで、10年継続することの意味を感じます。私は受賞時からIT系の会社を経営し、変化の波の激しいIT業界でチャンスの波を捉えてこの10年で6社ほど経営してきました。数社の売却・譲渡を経て、今は適正規模で1社を経営しながら、個人としてはマンガの原作の仕事なども手掛けています。



## メディアデザインの仕事の一環でラジオパーソナリティも

生田 和徳 さん | 第1回(2006年)【大学生の部】優秀賞受賞  
論文タイトル: メディア・リテラシー——ユビキタスネット時代に新たな価値を生み出す知恵  
応募当時: 中京大学社会学部3年

地元の長野県を拠点に、地域密着で仕事をしています。映像、写真、記事の執筆、編集、デザイン等の領域をまとめて「メディアデザイン」と名付け、メディアデザイナーとして活動しています。仕事の中心は長野県松本市に開局したコミュニティFM、『FMまつもと』でのラジオパーソナリティと制作で、その他にケーブルテレビや雑誌の記者、また県内の放送部のある学校で放送に関する外部講師の活動も続けています。



## 物語作家として本を出版

久米 絵美里 さん(旧姓: 蜂屋) | 第4回(2009年)【大学生の部】特別審査委員賞受賞  
論文タイトル: Skypeが描く世界語会話教室——非透明人間と不透明人間の協働実現を目指して  
応募当時: 慶應義塾大学法学部3年

2014年に朝日学生新聞社児童文学賞をいただき、現在は『朝日小学生新聞』にて連載、出版の機会をいただきつつ、さまざまな物語を執筆中です。伝えることを意識すること、文献や経験から得た知識を再構築する意義を学ぶことができたのは、本コンテストあってこそで、今でもとても感謝しております。



『言葉屋 言箱と言珠のひみつ』  
発行: 朝日学生新聞社  
(2014年11月)  
朝日学生新聞社児童文学賞  
第5回(2014年)受賞作

# 高校生 の 部

## 高校生の部 テーマ

世界に向けて未来を提案しよう！

### 2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、 「創るもの」

今から15年後の2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？  
皆さんが今よりもっとワクワクした毎日を送り、社会も豊かになっている姿（様子）を描いてみてください。

「守破離（しゅはり）」という言葉があります。  
剣道や茶道など「道」の世界で、修行の段階を表す言葉です。「守」で基本となる教え（型）を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作り上げた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で、「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え（思想）です。

「守破離」のような視線で未来像を描けないでしょうか。  
今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る（守）」、次に旧態依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す（破）」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る（離）」。このような3つの活動や挑戦が過去から積み重ねられ、世界中で様々な発展が生まれて、今日に繋がっているとNRIは考えます。

未来は誰にも分かりません。2030年代にかけて起こりそうなことをイメージした上で、皆さんが望ましいと思う未来社会の姿を描いてください。  
そのような新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい（貢献したい）のかをまとめてください。

2030年代は、皆さんが社会の中核となって活躍する時代であり、皆さんの世代が「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思・責任感を持って、具体的な行動を起こすことが不可欠です。

皆さんの知識や実体験に基づいた独自の観点から、革新的な未来社会の姿を提案して下さることを期待しています。

\*入賞論文は基本的に原文をそのまま掲載していますが、一部、表記統一などの調整をしています。



大賞 [高校生の部]

## 「地方院」構想

— 民主主義と地方を守り、無意味な議会を壊し、  
私たちの議会を創る

宮崎県立宮崎大宮高等学校1年

橋本 康平 はしもと こうへい

政治への高い問題意識から、参議院に代わる「地方院」創設を提案。その斬新さや、「日本の政治を良くしたい、もっと地方の声を国政に届けたい」という高校生の立場からの強い想いが高く評価されました。設計の具体性、実現性も際立っていました。

### 「1人1票」の価値とは

現在問題となっている「1票の格差」。1962年に初めて参院選の無効を求めて提訴が行われ、現在では2009年から升永英俊氏を中心とする弁護士グループを中心に、各地で裁判が起こされ、違憲判決も数度出ている。同じ日本国民でありながら、住む地域によって1票の価値が違うというのは、民主主義上あってはならないことだ。2015年7月には、参議院の選挙区変更の可決により県をまたいでの合区案が国会で可決されたものの、依然3倍近い格差があり、抜本的見直しを迫る声大きい。

しかし、地方の声を国政に届けるという選挙制度の目的から見た場合はどうだろうか。県をまたいでの合区が進んでいけば、参議院議員が1人もいない県が出てくる可能性がある。これでは地方の声が国に届かなくなってしまう。もちろん、形式的に言えば、現在の状況では1人1票の価値は平等でないのかもしれない。だが違う見方がある。衆議院の選挙区で、東京14区は24.95km<sup>2</sup>なのに対し、北海道12区は14,740.11km<sup>2</sup>と、岩手県に匹敵する面積がある。これは約590倍である。面積の小さな区域では、ある程度地域が抱える問題は絞られるだろうが、北海道12区のように広大な選挙区だと様々な問題が地域内に点在しているため、1人の議員に膨大にやらなければならないことが発生してしまう。果たしてこれが平等だと言えるのだろうか。人口の3倍も大問題だが、面積の590倍も問題ではないか。選挙においては、1人1票であるため、人口割の議員定数の考えは理解できるが、住民1人あたりが管理する選挙区内の面積との比較も判断材料に含める必要があるのではないか。もちろん人はそれぞれ考え方が違うから、きっちり人数で区割りをするのが民主主義を守ることにつながるのは間違いない。しかし、地域を大切にできるという小選挙区制のメリットを考えた時、人口に関係なく、都道府県ひとつひとつが国政で意見を直接述べることが必要なのではないだろうか。

私は、民主主義と地方の声を守り、この現状を打破するため、「地方院」構想を提言したいと思う。

### 「地方院」とは

それでは、この構想の具体的な説明を行っていくと思う。地方院は参議院を廃止して国会に設置し、衆議院との二院制とする。地方院の議員は、各都道府県から2名ずつ選出する。都道府県議会議員から1名、また各都道府県に新たに設置する市町村議会の代表者の会議「市町村代表者会議」から1名選出する。どちらも1年ごとに改選する。100名程度の参議院より小さな院にし、原則政党の結成は認めない。また委員会を行わず、基本的に本会議のみを議論の場とする。また地方院の議員は国務大臣になる資格を有さないとともに、必要最低限の諸手当のみを支給する。

このように非常に小規模にしたのは、あくまで地方院の役割を「国会に地方の声を届けること」、「政府・与党の政策を、政策的な考えにとらわれず地方の目線のみで評価すること」の2つに絞ったからである。この2つだけでも衆議院の行き過ぎを防ぐことは十分可能であるどころか、地方と近い、つまり国民の意見が反映されやすくなるため、より国民に近い議論が行われるようになるであろう。また、小規模なため各地方に均等に発言力が与えられ、効率良く議論が行える。例えば、沖縄の基地移設問題では、政府が国会での議論と沖縄県との議論を別々に行っているが、地方院を導入すれば国政と地方自治のねじれ解消につながる事が期待できる上、その他にも、給与が要らないので予算を削減できるなど多くのメリットがある。

また、地方院導入に伴って、衆議院の権限は一段と増加する。権力だけではなく、国会運営に対する責任も大きくなる。よって、よりクリーンな国会運営が求められるようになり、衆議院にも良い影響がある。

## 参議院の廃止と地方院の特徴

私が参議院を廃止して地方院を置くという構想にした理由は、現在の国会運営を見る限り、参議院の存在意義が薄くなってきていることにある。本来、参議院は衆議院の行き過ぎを防ぐために設置されている。しかし、現在のように衆参両院で最大政党が同じ場合、議論に時間がかかることはあっても、参議院で覆られるという事例はほとんどない。また最大政党が違う場合、いわゆるねじれ状態も長期間にわたって続いたことはなく、むしろねじれになると審議が進まないため、国会運営が滞りがちになってしまう。今ここで参議院を廃止し、代わりに地方院を置けば、政党の考えにとらわれずに、地域にとって最善の選択をすることができる。また2015年7月15日の衆議院特別委員会では、安保法制に反対する野党議員がプラカードを掲げて審議を中断させようとしたことが話題となったが、地方院では政党がないためそのような妨害行為が起こることもなく、本質的議論に多くの時間を費やすことができるようになるのだ。

## 「地方院」の地方での効果

地方院の議員は、1年に1回改選される。これは地方の声を素早く国会に届けるためである。都道府県、市町村議会の議員は、地域に根差した活動をしている。実際私の住む地域でも、県議会議員が毎朝ボランティア活動をしているし、市議会議員は地域のイベントに頻繁に顔を出している。対して、ある宮崎県選出の国会議員のfacebookからは、東京での仕事が忙しく、なかなか宮崎に帰って地元の意見を聞く時間をとることができていないという印象を受ける。地方院では、1年に1回の改選により、より多くの地方議員が国政を経験できること、また仕事内容の簡略化により地域に根ざした活動を犠牲にしないで済むことで、地方議会の活性化を図ることができる。

また、小さな村議会からでも国政に関わるチャンスがあるため、特に過疎地域で進んでいる地方議会のいわゆるマンネリ化、例えば立候補者の固定化などを解消することも可能である。宮崎県諸塚村では、四十年にわたって村長選挙が行われていなかったが、2015年4月には現職に対抗して40代の新人が出馬し、選挙戦が行われた。なんと投票率は92%。国政選挙と比べると驚異的な数字だ。過疎地域の底力を感じる。この力を国政に活かすとともに、まだ潜在的な力を発揮できていない地域の底力を引き出すものこそ、地方院である。地方院の制度ができることで、意欲を持った若者が積極的に選挙に出て来るようになるのではないかな。

このように、地域に活力を与え、地方政治の変革のきっかけになる可能性をも秘めている地方院なのである。

## おわりに

現在、日本は「地方分権」「道州制」など様々な形で地方の振興が叫ばれている。しかし、政治的側面から見れば、いくら自由に使える予算が増えようと、その予算が国から来ている限り国の影響力がまだまだ大きく、現状はそう大きく変わらないのではないかな。現在は、国から地方へという一方的な地方分権しか行われていない。これを変えるためには、もっともっと地方が国に介入していく必要があると思う。地方院構想はその一つの手段である。他にも国税を減らして地方税を上げるとか、国の力をできるだけ使わない形で地方に権限を持たせるべきではないかな。地方の意見をより国政に反映させることは、私たち一人ひとりが国政に近くなっていくことにつながる。まず、国民一人ひとりが、国政にも、地方政治にも関心を持つところから始めなければならない。

### 参考文献

- ・ 朝日新聞デジタル  
<http://www.asahi.com/>
- ・ ZIPANGU Renaissance ホームページ  
[http://blog.livedoor.jp/zipangu\\_renaissance/](http://blog.livedoor.jp/zipangu_renaissance/)
- ・ 特定非営利活動法人 一人一票国民実現会議 ホームページ  
<http://www.ippyo.org/>

### 【受賞者インタビュー】

#### 政治に対する想いや夢が整理できた



#### —— コンテストに応募した理由、きっかけは？

学校の夏期課題のひとつとして、自分の考えを自由に表現したいと思い、応募を決めました。

#### ——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

発想から1日で一気に書き上げました。

#### ——この論文を書く上で苦労したことはありますか？

字数制限内に自分の想いをまとめることが難しかったです。結果として書き切れなかったことも多かったことが、今回の反省点です。

#### ——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

自分の政治に対する想いや夢が整理され、これからやりたいことが膨らみました。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか？

18歳選挙権年齢引き下げの問題です。これによって政治がどう変わるのか、注目しています。





優秀賞 [高校生の部]

## 日本で本当にグローバルな 人材を育てるには

The Hills Grammar School 2年

江橋 朱里 えはし あかり

留学生活での観察や体験に基づき、グローバル人材の育成のためには日本独自の美德「思いやりの心」を守りながら自己主張力を鍛える場を創っていく必要があるという提案には、オリジナリティと説得力がありました。育成策の具体性も評価を得ました。

近年、日本を取り巻く環境は大きく変わってきている。国際化が進み、日本人が海外に進出する機会が増えている。2030年には、2020年の東京オリンピックを経て、国際交流がより盛んになっていることだろう。現在、日本は国を挙げてグローバル人材養成のために日本人の英語力強化に力を入れている。しかし、私は英語力強化ばかりに力を入れるだけでは世界に通用するグローバルな人材は育たないと考える。2030年代、私はオーストラリアでの生活を活かした教育者になりたい。私はグローバルな人材を育てるために、「思いやりの心を守ること」「学ば場での思いやりの心を壊すこと」「自己主張力を鍛える教育を子供たちに与える環境創り」が必要であると考え。

日本が守っていかなければいけないのは、思いやりの心である。なぜなら私は、思いやりの心とは他文化には存在しない日本独自の美德であると考えからだ。私は2年前から多民族国家と呼ばれるオーストラリアで生活をしている。大多数のオーストラリア人は、この200年の間に全世界からやって来た移民かその子孫である。私の通う現地の高校にも、ヨーロッパやアジアの様々な国の出身者がいる。私は今まで日本人として日本で生活していたため、日本という国を客観的に見る事がなかった。しかし、オーストラリアで生活を始めて日本を客観的に見るようになり、気が付いたことがある。それは、これからの社会において、日本の美德である思いやりの心は残すべきであるということだ。思いやりの心は相手の立場を押し量り、相手に余計な気遣いをさせず、また主張しないという意味である。この思いやりの心は、他文化には存在しない日本独自の美德である。これに気付かせてくれたのは、アメリカ人の母と日本人の父を持つハーフの友人である。彼女は災害後にとった日本人とアメリカ人の行動が同じ人間とは思えないと言った。2011年3月11日の東日本大震災後、多くの人々は家族や家を失うなど死と隣り合わせの生活に怯えていた。しかし、日本人はどんなに厳しい環境

に置かれても限られた食糧を分け合い、命を繋いだ。自分だけでなく皆が辛い思いをしているのだという思いやりの心が、日本人一人一人に意識せずとも存在していたからである。

一方、アメリカで大規模なハリケーンが起こった際、店の商品は略奪され、人種差別さえも起こった。似た状況下で全く違う行動が見られたのである。これは、日本人は幼い頃から身に付けた相手の立ち場を押し量る思いやりの心を持っているのに対し、アメリカは人種のるつぼと呼ばれ、多文化の人が共存しているため、個人を主張するという社会性が存在していることが原因である。

このように、思いやりの心こそ日本ならではの美德である。東日本大震災は多くの人々の命を奪った。しかし、日本の美德である思いやりの心までも奪うことはできなかったのである。したがって、私は2030年もその先の未来までも、思いやりの心を残していくべきであると考え。

思いやりの心は守っていくべきであるが、私はグローバルな人材を育てるためには学びの場で思いやりの心は捨てるべきであると考え。なぜなら私は、グローバルな人材を育てるには英語力強化よりも自己主張力を身に付けさせる方が重要であると考えからだ。平成25年4月8日、自由民主党はグローバルな人材育成を目指した英語教育の抜本的改革について英語力の強化を含んだ文書を提出した。施策としては、英語教師について一定の英語力の義務化や、小中高等学校の生徒の英語に触れる時間の増加などである。

オーストラリアでの生活を始めて数カ月間、私は英語力不足のために友達ができず孤独であった。しかしながら、英語が少しずつ上達しても、現地の人々の会話についていけないのである。私が、現地の人に「日本は無差別に真珠湾を攻撃した」と言われた時、日本軍がそれに至った経緯を主張することができなかった。私はその社会的背景を英語で説明する能力はあった

が、主張をする勇気がなかったのである。なぜなら、私の日本人としての考えがオーストラリア人の気分を害してしまうと考えたからである。それは、日本独特の思いやりの心の表れであった。英語の能力はあっても、相手を配慮し過ぎて自己主張力のある外国人に対応できないのである。私は多民族の中で生活をして、彼らの自己主張の強さに驚いた。それと同時に、思いやりの心を大切に過ぎる日本人の社会性に不安を覚えた。私が考えるグローバルな人材とは、言語に長けているだけでなく、自分というものに重点を置きながら他文化を理解し、多文化を尊重できる力を持っている者だ。したがって、いくら自由民主党が国を挙げて英語力強化を推進しても、相手を気にし過ぎる社会性が身に付いた日本人が、他文化を理解し多文化を尊重できるようグローバルな人材に育つことはないのである。

したがって、思いやりの心を守りながら、学びの場では思いやりの心を捨て、自己主張力を鍛える場を創っていかねばならないのである。現代の日本の授業形態の多くは、教師が指導権を握り、教師の板書を軸とし生徒が発言をするときは手を挙げなければならない。一方でオーストラリアの授業形態は、教師よりも生徒が中心となって展開している。板書を単純にノートに写すよりもディスカッションによる生徒の発言に重点を置いている。他人が自分の考えに異議を唱えようと、構わずまたそれに異議を唱える。討論は相手を納得させることができるまで続けられる。

今までに両国の異なる授業形態を経験した私が、2030年代に望ましいと思う授業形態は、学年ごとに3段階に分かれた自己主張能力を身に付けるということである。小学校2年生までは、日本人として日本の美德である文化は身に付けておくべきであるため、この授業形態は小学校3年生から始まる。まず、小学校3年生から6年生までは、集団の中で自分の意見を主張できる能力を身に付ける訓練をする。そのため、授業中に集団に分かれて意見交換をする時間も設ける。教師が授業の初めにその日話す話題について生徒に投げかけ、生徒が集団になってそれについて様々な視点から意見を出し合う。そして、集団で考えたことを皆の前で発表する。次に、中学校時代は自己主張能力を確実なものとするために、定期試験の他にその単元で習ったことについてのプレゼンテーションを実施する。プレゼンテーションの課題は教師によって出題され、生徒はそれに対し自ら調べ、自分の答えを発表する。自分の意見を皆に理解してもらうことは、自分の意見を主張する上で重要なことだ。高校生時代には、グローバルな人材を育てるために重要なグループディスカッションを実施する。対立する意見を理解しながら自己主張を行う必要がある。しかし、前の2段階を踏んでいるため、自分の意見を主張するための力は十分備わっているはずである。

15年後の2030年、日本はより国際化が進んでいるに違いない。私の頭の中には、自分に重点を置き、他文化と多文化を尊重しながら世界中で多くの日本人が活躍する未来社会図がすでに完成している。これを現実にするために、思いやりの心を守りながらも、学ぶ場での思いやりの心を壊し、そして、自己主張力を鍛える教育を子供たちに与えることができる環境を創るべきである。

#### 参考文献

- ・ 鈴木孝夫『ことばと文化』岩波新書、1973年
- ・ 金田一春彦『ホンモノの日本語を話していますか?』角川oneテーマ21 角川書店、2001年
- ・ 自由民主党教育再生実行本部「成長戦略に資するグローバル人材育成部会提言」平成25年4月8日  
[https://www.jimin.jp/policy/policy\\_topics/pdf/pdf112\\_1.pdf](https://www.jimin.jp/policy/policy_topics/pdf/pdf112_1.pdf)

#### [受賞者インタビュー]

### 教師として 日本の未来に貢献したい



#### ——コンテストに応募した理由、きっかけは?

私はオーストラリアで生活を始めてから、「海外に進出するには英語力を身に付ければ良い」と考えている日本人に疑問を持ち始めました。でも、この思いを伝える場がありませんでした。コンテストに応募したら、日本の未来について考えるだけではなく、書くことにより私が教師として日本の未来に貢献したいという夢に実行力を持たせ、伝えることができると思いました。

#### ——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか?

書き始めてから書き終わるまでは1週間ほどでしたが、自分が書きたいことを頭の中で整理するには時間がかかりました。

#### ——この論文を書く上で苦勞したことはありますか?

書きたいことを頭の中では整理できても、3,000字にまとめることがとても大変でした。

#### ——今、どんなことに興味を持っていますか?

日本の教育、日本のセンター試験廃止についてです。



優秀賞 [高校生の部]

# 2030年バイキング式社会の 実現に向けて

神戸朝鮮高級学校3年

金道慶 さん とぎょん

2030年の活気ある日本社会のためには、ライフステージに応じて柔軟な働き方が選択できる「バイキング式社会」の実現が必要であると力強く主張。高校生らしい夢や視野の広がり、それによって実現される多様な働き方の具体的な記述が評価されました。

## 1. 2030年の日本

2030年の日本を予測したデータがある<sup>1)</sup>。人口に占める65歳以上の高齢者の割合が30パーセントを超える超高齢社会が到来し、現役世代1.7人で1人の高齢者を支えなければならなくなる。また、ひとり世帯が全体の37.4%を占める。ひとり暮らしは家族同士の支え合いができないことから、失業や病気といったリスクに弱い。労働力人口は少子高齢化の影響で激減するというのに、ニート(若年無業者)の数は増加し続け、働き手の不足が叫ばれる一方で非正規雇用率は上昇する。2030年には、15歳から34歳のパート・アルバイト・契約・派遣社員等の割合が4割近くに増えるとみられている。非正規雇用者は正社員と比べて給料も低く、雇用も不安定である。それは、20歳から34歳の若者たちの親との同居率を高めることにつながる。経済的に不安定で未婚である彼らの同世代人口に占める割合は、男女共に50%を超えると予測されている。人口は減少するが、生活保護受給者の数は増え続け、300万人に達するであろうと予測されている。日本の財政は破綻しているかもしれない。

私は、我々高校生が30代を迎えている2030年の日本を、決してこの悲観的なデータの予測通りにしてはならないと強く思う。2030年の日本を世界がうらやむような社会とするために、私は本論で、これからの15年間の日本の「新しい働き方」に基づいたバイキング式社会の実現を提案する。

## 2. 守るもの、壊すもの、創るもの

日本がこれから先も守るべきもの、それは平和である。70年間、どの国とも戦火を交えず1人の戦死者も出さなかったことは、日本が世界に誇れることである。しかし、たとえ戦争がなくても、貧困や環境破壊、感染症や天災の恐怖は私たちの命を脅かすものである。日本は今まで多くの困難にも知恵を絞り、乗り

越えてきた。まだまだ問題点は多くあるが、それでも国民皆保険制度を実施し、公害対策に取り組み、感染症対策や風水害の被害の防止のために多くの事業を実施し、今では世界の国々から多くの視察団が訪れるまでになっているし、日本は多くの開発途上国の発展のモデルとなっているのである。

本当の平和とは、明日を信じられることである。戦後の日本が明日を信じて生きられる社会を作ったことが、今日の日本の経済的な発展にもつながっているのだ。何よりも平和を守ることが大切である。

それだけではない。日本がこれからも守っていくものは、「和魂洋才」の精神である。戦後の日本の製造業は、欧米に30年で追いつき追いつ越してしまった。このキャッチアップの速さは、歴史的に日本人が異質で高度な文明・文化に触れたとき、それを素直に評価して猛烈な勢いで採り入れるという特性に由来する<sup>2)</sup>。しかし、私が言う現代の「和魂洋才」の「洋」は、従前の西洋だけを指すものではない。それは世界中のすべての先進的な技術や制度を意味するものである。現在、遅れをとっていると指摘されているマルチメディアの分野でも、必ず日本は和魂を持って自分のものとして消化し、より高度なものへと発展させるであろう。

2030年の数々の問題を解決し、日本が「和魂洋才」を持ってより良い社会へと発展するためには、現在の日本人の働き方を根本的に「壊す」ことが不可欠である。従来の「新卒で定年まで同じ会社で働くことがベストな働き方」だという考え方を壊さなくてははいけない。「～でなくてははいけない」というmustからの脱却が求められている。2015年の今も、多くの日本人は平和な社会で暮らしながらも、心のどこかでは「今のような働き方でいいのだろうか」「もし働けなくなったらどうすればいいのだろうか」という不安の中で、日々の雑事の中でそれをごまかしながら生きているのではないだろうか。しかし我々は、2030年のデータが真実であることが証明される日に毎日近づいている。

2030年という明日を信じていくためには、新たな創造が必要である。私が提案する「バイキング式社会」とは、好きなものを好きな分だけ自分で取って食べるという食事方式からとった言葉である。例えば、超高齢社会が到来すると予想されるが、60歳や65歳という定年制を廃止するのだ。本人がもっと働きたいと希望し、会社にも利益が出るのなら、何歳になろうか働けるようにするのだ。それとは反対の考え方で、40歳をひと区切りとして会社から一度退き、大学院や研究所などで学び直すことを可能にする。または、本人の希望があるのなら、全く違う分野で働き、セカンドキャリアを積んでもらう。

少子化による労働力不足の解消には、女性の社会進出が効果的である。バイキング式の働き方は、より効果的に作用するであろう。子どもがまだ小さくて保育園にも預けられないうちは、インターネットを活用したリモートワーク（地方でネットを利用して働く）やクラウドソーシング（ネットによる仕事の発注とその請負）を活用し、子どもの成長に応じて働き方をバイキングしていくことを可能にすればよいのである。もちろん女性に限定されず、男性こそ従来の「会社第一人間」から自分のライフスタイルに合った働き方で子育てに参加することが可能になる。

また、バイキング式の働き方では、障害を持った人や人間関係に不安が強い人、健康に自信のない人も、できる範囲で仕事を選択することができるのだ。

ネット環境があれば、世界中を相手に自宅で仕事ができる。日本で就職するのではなく、日本にいながら外国の企業で働くという働き方もバイキング式働き方のひとつである。

バイキング式働き方は、日本人だけに限定したものではない。日本で働くことを希望する多くの外国人にも、日本に来てもらうのだ。ネット環境の世界的な発展により、日本語が堪能で日本が大好きな外国人が増加している。日本の社会を日本に住むみんなので支え合うのである。

### 3. バイキング式社会——日本の実現のために

自分の希望や条件を優先し、フレキシブルに働くことのできる社会が、私の提案するバイキング式社会である。人生は何があるか分からない。しかし、どういう形であろうと、人間は社会にコミットして生きて行くことを本能的に望むものである。年齢や性別は勿論、学歴や国籍の違いで働くことが決まる社会ではなく、誰もが自分の生をより良く生きることのできる社会——バイキング式社会の実現こそが望まれるのだ。その実現のためには、既得権を守るためだけのような規制を廃止し、より柔軟な法律に改正することが政治に望まれる。多様な働き方を奨励し、そのための起業やネット環境の充実や、多様な生き方があり働き方があるという教育を早い段階から始めることに力を注ぐことが、バイキング式社会の実現を左右するであろう。

これからの世代がわくわくする社会にするための改革、いや、革命が必要であろう。新しい「和魂洋才」が2030年の日本を世界で最も住みやすい社会にするということを、私は信じている。

文中注

- 1) NHK オンライン 首都圏プロジェクト「プロジェクト2030」第1シリーズ「2030年予測データ」
- 2) 石井威望「日本人の技術はどこから来たか」PHP研究所、1997年

【受賞者インタビュー】

今まで関心の  
なかったことにも  
視野が広がった



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

国語の先生に勧められて応募しました。

——この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

夏休みの2～3週間ほどで書きました。

——この論文を書く上で苦勞したことはありますか？

書く内容をまとめて、自分の言葉で表現することが難しかったです。

——この論文を書いたことで良かったことはありますか？

今まであまり関心のなかったことにも視野を広げられたことです。

——今、どんなことに興味を持っていますか？

海外に留学して、自分の知らない世界を見たいです。



優秀賞 [高校生の部]

## 世界に目を向けさせるために、 「世界問題」の授業を行おう

千葉県 私立 市川高等学校 2年

近藤 柚香 こんどう ゆか

義務教育の学年ごとに世界で起こっている問題を学び、世界への視野を段階的に広げていく教科、「世界問題」を提案。論理的に組み立てられたプロジェクトである点や、日本の教育を変える実効性に、審査委員の評価が集まりました。

今回この小論文に取り組むにあたって、「壊さ」なければならぬほどの大きな問題点が自分の身のまわりにあるのかどうか、考えてみた。改善すべき点、手直しが必要な点などは思いつくのだが、どうしても「壊すべきもの」が見当たらない。生命が脅かされることのない安全な社会、整備された教育システム、病気になるばききちんとした治療を受けることができるし、おいしくて安全な食べ物も手に入る……。一体何を「壊す」必要があるのでろうか。

しかしこの夏、私は、そのような意識を変える経験をした。外国の大学生とディスカッションをするプログラムに参加したのだ。そのプログラムで世界の貧困問題について話し合ったとき、1人の学生にこう指摘された。「日本人は裕福で不自由のない生活をしているから、世界中で起こっている様々な問題に対して無関心である。だから、それらの問題がいかに深刻なのか、自分たちがいかに恵まれているのか分かっていないのではないか」と。

日本人も、世界中で起きている様々な問題を知らないわけではない。高度に情報化された現代においては、得ようと思えば、ありとあらゆる情報が手に入る。しかし、この指摘によって、私は単に「知っている」ということと「分かっている」ということは異なるのではないかと気付かされた。日本の学生と異なり、外国の学生は世界で起きている問題に真摯に向き合い、解決しようとする行動力を持っている。

日本に住んでいる人々のほとんどは何不自由なく暮らし、飢えに悩まされることも危険にさらされることもない、自分たちの現状に満足している。だから、外国では十分に食べ物もなく戦争やテロに巻き込まれている人々がいることを知っただけで、自分たちに直接関係がないために、その問題を深刻に捉えることがない。それは、本当の意味では分かっていないということである。この「自分たちの現状に満足」しているという内向的な殻こそ、私たちが壊すべきものなのだ。

一方、日本人には道徳心や思いやりがある。小さい頃から、

「人の気持ちを考えなさい」「相手の立場になって考えなさい」と教育されるため、自分だけ良ければいい、という考え方をする人は少ない。ずっと日本で生活しているとそれが普通だと思ってしまうが、他の国には、自分本位な考え方をする人が多いようである。その証拠に、インターネットには、日本に来た観光客が日本人のちょっとした心遣いに感動した、というような話があふれている。このような「思いやりの心」は「守るべき」ものだと考える。世界中で起きている深刻な問題を本当の意味で理解した時、思いやりの心を持った日本人ならば、問題を解決するために何ができるのか、何をすべきなのか、考えるようになるのではないだろうか。

「自分たちの現状に満足」している内向的な殻を壊し、日本人の持つ思いやりを世界で起きている問題の解決に役立てるために、私は義務教育の小学校と中学校で週に一度「世界問題」という教科を設けて授業をすることを提案する。「世界問題」の授業では、9年間を通して、世界で起きている問題を、単なる知識として覚えるのではなく、深く理解し、自分たちの力で何ができるかを考えることを目的とする。

小学校の6年間では、主に世界で起きている問題は何があるのかを学ぶ。どういう問題が起こっているかを知るだけではなく、なぜ起きているのか、それによって誰がどのように苦しんでいるのかを学ぶことで、日本人の自分たちがどれだけ恵まれた環境にいるのか、世界で今起きている問題がどれだけ深刻なことかを実感することができる。下学年では、外国の自分と同じ年の子供たちの生活を学ぶ。例えば、毎朝遠くまで水を汲みに行っている子、命の危険にさらされながら学校に通う子、家のために学校にも行けず働いている子などについて学べば、自分の恵まれた環境を自覚することができる。上学年では、下学年の個人と個人の比較とは違い、社会や国の単位で何が起きているのかを学ぶ。アフリカでの貧困問題やシリアで起こっ

いる紛争について学び、下学年で学んだ、同じ年の子供たちがさらされている状況は何か作り出しているのか、その原因を考える授業である。

中学校の3年間では、小学校で学んだことを元にして、自分たちがどうすれば問題解決に貢献できるかを考え、それを実践に移す授業を行う。4、5人1組でグループになり、1年を通して、グループごとのテーマに沿って、問題解決のためのプロジェクトを作っていくのだ。中学1、2年生の時には、自分たちの力で実現可能なプロジェクトを作っていく。例えば、使わなくなった文房具やランドセルを集めて外国の子供たちに寄付するなど、学校の生徒や近所の人々の協力を求めてプロジェクトを行うのもいいだろう。学校の授業の一環として行っている旨を伝えれば、学校に通っている子供たちがいない家でも、快く協力してくれるはずだ。自分たちでプロジェクトを作り、それを実践していくことで、自分たちの力でもできることがあるのだという意識を作ることができる。中学3年生では、将来的に実現可能な、大きなプロジェクトを作る授業を行う。自分たちが何をすればいいかを考えるのみではなく、日本がどうしたらいいか、世界がどのように協力すれば問題解決に向かうのかも考えることを目的とする。貧困による飢餓や世界で起こっている紛争など、どんな国からの協力が必要で、どれだけの時間と人手を要するのかを実際に考えることで、自分たちには関係ない問題だという意識を、自分たちが行動を起こさなければならない、自分たちが動けば問題の解決につながるかもしれないという意識に変えることができる。

私たちが大人になり、社会で活躍できるようになっている頃には、様々な問題が現在よりも深刻な状態になる。例として挙げられるのは、人口の増加による食糧問題や地球温暖化である。その時に、社会を動かし先頭に立ってゆく私たち日本人が、世界で起こっている問題に関心を持ち、解決策を打ち出すことは、問題解決への大きな力になり得る。そのためには、子供の頃から世界で起こっている問題を知り、解決策を考えようとする意識を育むことが必要なのだ。

[受賞者インタビュー]

### 自分の想いを 論文にまとめることで 世界の問題に向き合えた



—— コンテストに応募した理由、きっかけは？

学校の夏休みの課題でした。

—— この論文を書き上げるまでに、どのくらいの時間がかかりましたか？

実際に文章にまとめた時間は1日でしたが、自分の考えをまとめたり、プランを考えることには2週間くらいかけました。

—— この論文を書く上で苦勞したことはありますか？

自分の考えを具体的にプランの形にすることには苦勞しました。

—— この論文を書いたことで良かったことはありますか？

今まで漠然と考えていただけだったものを具体的な形にできたことです。このような機会がなければ、世界の問題に真摯に向き合うことはなかったと思います。

—— 今、どんなことに興味を持っていますか？

海外への旅行や留学です。今回の小論文コンテストの表彰式で、海外経験を持つ人とたくさん話げできたことがきっかけです。

# 受賞はスタート、自らアクション!

2006年に始まり、今回で10回目を迎えた「NRI学生小論文コンテスト」。本冊子40ページ「受賞OB・OGのいま — Part 1」に続き、受賞OB・OGの近況をご紹介します!



## 大学でふくろうの生態系を研究中

草間 由紀子 さん | 第4回(2009年)【高校生の部】特別審査委員賞受賞

論文タイトル:長野モデルから日本モデルへ

応募当時:長野県長野高等学校1年

大学は理工学部に進み、現在3年生で、ふくろうの生態系の研究をしています。表彰式の当日、特別審査委員の最相さんとお話しし、将来の仕事についていろいろ助言をいただきました。後日、最相さんから取材で関わったNHKのドキュメンタリー番組を紹介していただき、その番組を見て、生態系をもっと学ぶ必要があると思い、現在の進路を決めました。受賞は自分にとって大きな分岐点だったと思っています。



## 山形で地域活性化の活動をしています

山本 泰弘 さん | 第7回(2012年)【大学生の部】大賞受賞

論文タイトル:政経社会系教育重点校「スーパーソーシャルハイスクール」

応募当時:京都大学大学院 地球環境学舎 修士課程2年

2015年春から地元・山形県で県の職員となり、現在は税務関係の部署にいます。仕事以外の時間では、地域に積極的に行き、地域の活性化のために活動している研究者や学生とつながってさまざまなプロジェクトや研究活動に携わったり、文章を書いて発表するなどしています。このコンテストでの受賞はゴールではなく、そこがスタートとなって今の活動につながってきていると感じています。



## 海外の大学で創薬研究、日本ではサイエンスバーの経営に参画

石原 純 さん | 第8回(2013年)【大学生の部】優秀賞受賞

論文タイトル:先端医療技術が達成するピンピンコロリ(PPK)社会

応募当時:東京大学大学院 新領域創成科学研究科 博士課程3年

現在の職業は2つあり、1つは海外の大学の研究室で、博士研究員として創薬の研究をしています。これまで1年半スイスにいて、2016年3月からはアメリカのシカゴ大学に移る予定です。もう1つの仕事は、サイエンスラウンジ合同会社という会社で、最高技術顧問として『サイエンスバー インキュベータ』というバーの技術面を見ています。論文は書くだけでなく、書いたことを実現するためにアクションを起こすことが大事だと思っています。

NRI 学生小論文コンテスト2015

# 募集告知から審査、 そして表彰まで



# “目指したい未来社会”を描く 小論文コンテストがスタート!

2015年のコンテストは、NRIのホームページ上に4月30日に募集要項が発表され、スタートしました。今年も1人でも多くの学生の皆さんにコンテストをお知らせし、論文を応募していただきたいと、告知活動を展開しました。全国の高校や大学に案内を送り、チラシやポスター、受賞論文記録集を配布。新聞や雑誌にも広告を掲載し、応募を呼びかけました。

## 世界に向けて未来を提案

世界のいたるところで、政治・経済・社会に大きな影響を与える事態が相次ぎ、将来の不透明感、閉塞感は強くなっています。NRIは、次代を担う若者が日本から世界に向けて未来を提案し、行動することは、これを打破し、新たな時代を切り開いていくことにつながると考えています。

## “2030年に向けて—— 「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」 というテーマ

学生の皆さんが社会の中核となって活躍している2030年、その時代に向けて、皆さんの世代がどんな夢を描き、その実現のために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか——。このテーマは、皆さんの世代に「自分たちの未来を自ら切り拓いていく」という主体的な意思と責任感を持って具体的な行動を起こし、よりよい未来社会を創る原動力になってほしいという想いを込めて設定しました。

## ペア応募のねらい

「互いに議論し合うことは、考えをより深めることにつながる」という考えから、2011年のコンテストからペア応募を受け付けています。

**第10回 NRI学生小論文コンテスト2015** 野村総合研究所 主催

募集テーマ (抜粋) **世界に向けて未来を提案しよう!**

**2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」**

今から15年後、皆さんが社会の中核となって活躍する2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているでしょうか？  
皆さんが今よりもっとワクワクした毎日をおくり、社会も豊かになっていく姿(様子)を描いてみてください。

「守破離(しゅはり)」という言葉があります。  
創造や革新など「造」の世界で、修行の段階を表す言葉です。「守」で基本となる教え(型)を学んで身につけ、次に「破」で、「守」の段階で作らされた既存の殻を破って自分の型を見出し、そして最後の「離」で、「守」「破」で体得した型から離れ、独自の道を自在に作って、道を究めていくという考え(思想)です。  
「守破離」のような視座で未来像を描けないでしょうか。

今あることの中で、まず残したい、尊重したい伝統や文化は「守る(守)」、次に固執依然とした規制や人々の自由を奪う慣習などを「壊す(破)」、そして技術革新やグローバル規模での相互交流を通じて、全く新たな仕組みや価値を「創る(離)」。このような3つの活動や挑戦が過去から積み重ねられ、世界中で様々な発展が生まれて、今日に繋がっているとNRIは考えます。  
未来は誰にも分かりません。新しい社会の実現を目指すために、何を「守り」、「壊し」、「創っていく」のか、その中であなたがどのように関わりたい(貢献したい)のかを、皆さんの知識や実践に基づいた独自の観点からまとめてください。

※テーマの詳細は、下記の「コンテストホームページ」をご覧ください。

**大学生の部**  
賞【大賞1名】賞金50万円【優秀賞 若干名】賞金25万円【奨励賞 若干名】賞金5万円  
字数：4,500～5,000字(別途400字程度の要約を添付)  
応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)に在籍している学生で、2015年7月1日時点で27歳以下の個人またはペア(ペアの相手は、大学生の部、留学生の部、高校生の部の応募資格者のいずれでも可)。

**留学生の部**  
賞【大賞1名】賞金50万円【優秀賞 若干名】賞金25万円【奨励賞 若干名】賞金5万円  
字数：4,500～5,000字(別途400字程度の要約を添付)  
応募資格：日本国内の大学院、大学、短大、高等専門学校(4～5年)、日本語学校に在籍している留学生で、2015年7月1日時点で30歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は留学生の部の応募資格者に限る)。

**高校生の部**  
賞【大賞1名】賞金30万円【優秀賞 若干名】賞金15万円【奨励賞 若干名】賞金3万円  
字数：2,500～3,000字(別途200字程度の要約を添付)  
応募資格：日本国内の高校、高等専門学校(1～3年)に在籍している学生で、2015年7月1日時点で20歳以下の、個人またはペア(ペアの相手は高校生の部の応募資格者に限る)。  
※大学進学をめぐって悩んでいる大学受験資格を持つ学生の方は、大学生の部にご応募ください。

**募集期間**  
【大学生の部】【留学生の部】2015年7月1日(水)～9月5日(土)  
【高校生の部】2015年7月1日(水)～9月14日(月)

・オンライン送信の場合は、締め切り日当日中に事務局で受信したものとまで有効  
・郵送の場合は、締め切り日までに「必着」

**【応募方法】**  
下記の「コンテストホームページ」でテーマ詳細や応募要項を確認の上、「応募用紙」をダウンロードし、必要事項と論文(本文、要約)を記入して、以下のいずれかの方法でお送りください。  
●「コンテストホームページ」の応募画面からオンラインで送信  
● CD-Rに保存の上、下記、コンテスト事務局に郵送(CD-Rは郵送いたしません)  
● 応募用紙に書き添えたものを、下記、コンテスト事務局に郵送(事前に電話またはE-mailでご連絡下さい)

**【審査方法】**  
野村総合研究所社員による一次審査の後、理事長の谷川史郎を委員長、ジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰氏、ノンフィクションライターの最相葉月氏を特別審査委員、社員数名を委員とする審査委員会による最終審査を行います。

特別審査委員  
ジャーナリスト 池上 彰 氏  
ノンフィクションライター 最相 葉月 氏

**【入賞者の発表】**



## 全国の学校や書店で コンテストへの応募を呼びかけました

全国の大学のインフォメーションコーナーや書店などに、ポスターやチラシを掲示して、コンテストをアピールしました。また、今年もNRIグループの社員有志が出身校等への告知活動を行いました。メッセージを添えてポスターやチラシを送ったり、実際に学校に足を運び、直接学生たちにコンテストを紹介しました。(詳しくはP.72)



フェリス学院大学 学生ラウンジ 中央大学 商学部



早稲田大学 早稲田キャンパス 同志社大学 今出川キャンパス・書店



鹿児島大学 郡元キャンパス 東京大学 本郷キャンパス 弘前大学 食堂

# 厳正な審査を経て、 入賞論文を決定しています。

入賞論文は、予備審査→1次審査→2次審査→最終審査会という4つのステップを経て、決定しています。

どの審査段階においても、規定の評価基準に基づき、応募者の学校名、名前などの属性を秘匿したうえで、厳正に審査を行っています。

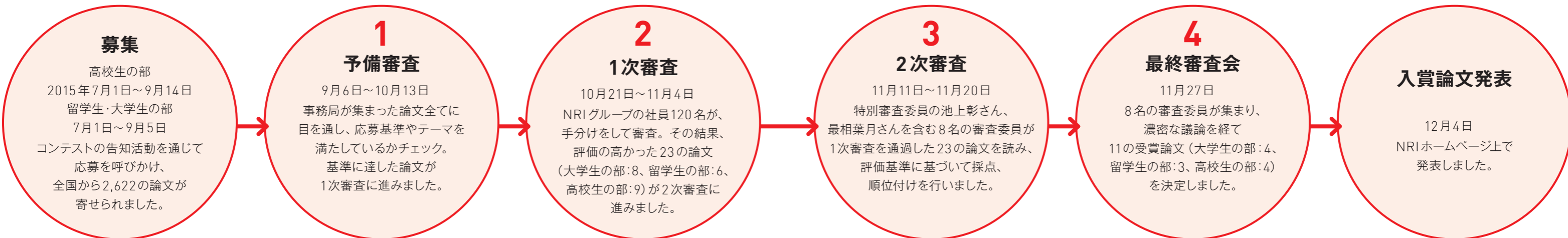
また、評価が偏らないように、1つ1つの応募作品を複数の者が評価しています。



## 論文審査の評価基準

- テーマと論点に整合性はあるか？
- 提案力はあるか？
  - ・提案や解決策の独自性・実現性
  - ・提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
  - ・提案内容、主張の明快さ
- 考察力・分析力が優れているか？
  - ・論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
  - ・具体例や数値を使用するなど、論点の分かりやすさ
  - ・論点への考察の深さ
- 文章力は高いか？
  - ・論文構成の分かりやすさ
  - ・文法の正しさ、誤字・脱字の少なさ
- 評価基準以外のプラスアルファ  
 評価基準に該当しない観点においても、特に評価が高い論文は加点  
 (例：独自の調査・取材の実施、執筆者の熱い想いなど)

## 「NRI学生小論文コンテスト2015」審査ステップ



### 募集

高校生の部  
2015年7月1日～9月14日  
留学生・大学生の部  
7月1日～9月5日  
コンテストの告知活動を通じて  
応募を呼びかけ、  
全国から2,622の論文が  
寄せられました。

### 1

### 予備審査

9月6日～10月13日  
事務局が集まった論文全てに  
目を通し、応募基準やテーマを  
満たしているかチェック。  
基準に達した論文が  
1次審査に進みました。

### 2

### 1次審査

10月21日～11月4日  
NRIグループの社員120名が、  
手分けをして審査。その結果、  
評価の高かった23の論文  
(大学生の部:8、留学生の部:6、  
高校生の部:9)が2次審査に  
進みました。

### 3

### 2次審査

11月11日～11月20日  
特別審査委員の池上彰さん、  
最相葉月さんを含む8名の審査委員が  
1次審査を通過した23の論文を読み、  
評価基準に基づいて採点、  
順位付けを行いました。

### 4

### 最終審査会

11月27日  
8名の審査委員が集まり、  
濃密な議論を経て  
11の受賞論文(大学生の部:4、  
留学生の部:3、高校生の部:4)  
を決定しました。

### 入賞論文発表

12月4日  
NRIホームページ上で  
発表しました。

# 濃密な議論を経て、 入賞論文を決定しました



最終審査会参加者

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

特別審査委員

池上 彰 ジャーナリスト・東京工業大学教授

最相 葉月 ノンフィクションライター

審査委員

三浦 智康 執行役員 未来創発センター センター長

淀川 高喜 研究理事

中野 ひなつ 証券ソリューション事業本部 HRM 室 室長

山之内 亜由知 生産革新ソリューション開発二部 上級システムコンサルタント

野呂 直子 コーポレートコミュニケーション部 部長

NRIグループ社員による1次審査を、23の論文

(大学生の部8、留学生の部6、高校生の部9)が通過しました。

2次審査には、審査委員長を務めるNRI理事長の谷川史郎をはじめとする社内審査委員に加えて、池上彰さんと最相葉月さんを特別審査委員に迎え、8人があたりました。

まず、審査委員各自が1次審査を通過した全ての論文を読み、審査基準に基づいて評価、順位付けを行いました。

事務局がその結果を集約し、2015年11月27日に最終審査会を開催。

3時間におよぶ議論を経て、11の受賞論文(大学生の部4、留学生の部3、高校生の部4)を決定しました。

審査委員長

谷川 史郎 NRI 理事長

「こんな2030年にしたい」という、自分が目指す社会の姿を、「守る」「壊す」「創る」という枠組みを踏まえて論じることは、大変難しかったと思います。この枠組みをベースにしながら論理を展開し、他の人には書けない独自の提案をしているかどうか、審査する上で大きな軸となりました。結果的に「この論文を書いた人に来てみたい」と強く思わせるような作品が、入賞作品として残ったのではないかと感じています。

ぜひ今後も皆さんの抱いた問題意識を長期に持ち続けて、それを次のステップでも解決に向けて掘り下げていただけていくことを期待しています。



特別審査委員

池上 彰 さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

今回のコンテストも、総じてレベルの高い作品が多かったと思います。特に、高校生からの応募が増えたことによって、高校生の部のレベルが例年以上で、大変読み応えがありました。また、今回は従来のスケールに収まらないような、ユニークな視点から書かれた作品が多く、それらが選考に残った点も特徴的でした。あえて付け加えるなら、自身の提案を批判的に再検討する目を持つことによって、提案の中身をさらに一歩突っ込んだものにする力を身に付けてほしいと思います。



特別審査委員

最相 葉月 さん ノンフィクションライター

今回の応募論文に共通して見られたのは、18歳への選挙権年齢引き下げに伴う「政治参加」や、どのように「行動」するか、「問題解決」を図るか、また、「思いやり」などのキーワードでした。自分が考えているようなことは人も考えているものなので、論文のテーマや問題解決策が重なることはよくあることです。では、みんなが同じようなことを考えているのに、それが解決できていないのはなぜなのでしょう。そういった点について「私はこう思う」と独自の意見や解決策を提示していくことが、論文として大切なポイントだと考えています。



# ドキュメント最終審査会

2030年に向けて—  
「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

2015年11月27日、審査委員8名が一堂に会し、約3時間にわたって最終審査を行いました。その議論の一部、誌上に再現します。なお、各論文の応募者の情報は一切伏せられたうえで審査は進められています。

大学生の部

## 既存テーマに独自性と実現可能性を追求

入賞候補論文 \*文中での呼称

- 人に寄り添う医療を目指して—2030年へ向けた医療改革の提言 \*「人に寄り添う医療」
- 地域力結集で実現する『中継ぎ保育』の拡充 \*「中継ぎ保育」
- 日本のベンチャー市場の活性化にむけて 武者修行退職制度の導入 \*「武者修行退職制度」
- 公共オンブズマンの設置—市民の政治参加の架け橋 \*「公共オンブズマン」

※他に4つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

### 力作それぞれに対し、 審査委員が評価ポイントを発表

谷川—私は「人に寄り添う医療」を最も高く評価しました。かかりつけ医はよくあるテーマですが、グループで行うという提案はユニークで、現実的なアプローチとして納得感がありました。

池上—私は「武者修行退職制度」を1位に評価しました。いったん大企業を退職をして、ベンチャーで武者修行することが一定の企業グループなどで認められれば、大変面白いと思いました。次いで評価したのが「人に寄り添う医療」です。かかりつけ医や予防医といったテーマは例年見られますが、海外では既にあるかかりつけ医制度を、改めて日本での仕組みとして提案しており、実現性があると思いました。

淀川—1位にしたのは「武者修行退職制度」で、大企業とベンチャー企業の間で人材の流動化を図れば、互いが活性化するというアイデアが面白いと思いました。2位は「公共オンブズマン」です。「公共オンブズマン」を公的制度として作ろうという提案は、視野の広がりがあり、高く評価したいと思います。

山之内—これからの日本企業はどこも事業を創造できる社

員がほしいはず。その人材をいかに確保するかという手段として、「武者修行退職制度」は非常に面白いアイデアだと思いました。

中野—私は「中継ぎ保育」が良いと思いました。民間での育児支援はよくあるテーマですが、この作品はロジカルで分かりやすく、論文としての完成度が高いと思いました。課題設定を机上だけで済ませずに現場の調査を行っている点も、説得力を増しています。また、地域の支援者のメリットと安全の懸念への対策をしっかりと述べている点も評価できます。

審査委員  
淀川 高喜  
研究理事



未来社会を「守る」「壊す」「創る」ものという与えられたフレームの中で論じる今回のテーマ設定は、自由度が限られていて難しかったと思います。その中で独自性があり、実現可能性の高い提案をしている論文を高く評価しました。

最相—私は「公共オンブズマン」を1位にしました。問題設定と考察プロセスが鮮やかで、疑問が次々と説明されていく文章の運びも良かったです。アイデア自体も非常に具体的に書かれていて、良質な意見だけが受理されるシステムまで考えている点も評価したいと思います。ただ、最後に本人が「実現可能性を疑っている」と書いている点は残念でしたね。

三浦—「公共オンブズマン」は、守破離の「守る」「壊す」「創る」という枠組みを意識して論理を展開していますし、正当性や実現性、有効性を兼ね備えた設計も評価できます。特にオンブズマンの役割や機能が詳細に規定されている点が良いと思いました。

谷川—私は「武者修行退職制度」については、実現性に疑問を感じます。会社はやはり、一番出したい人を出すものだと思うので、この制度は機能しないのではないのでしょうか。ただ、テーマが今日的だと思ったのと、明快な主張がある点で評価できると思います。

### グループによるかかりつけ医制度を 提案した論文が大賞に

谷川—大学生の部は、審査委員が上位に評価した作品が分散していて、大賞を決めるのが難しいですね。評価の点数としては「人に寄り添う医療」が一番高く、次いで「中継ぎ保育」、「武者修行退職制度」、「公共オンブズマン」は評価が分かれています。



三浦—得点が最も高く、グループによるかかりつけ医というアイデアの実現性も高い「人に寄り添う医療」が大賞にふさわしいと思います。

中野—「中継ぎ保育」は提案の壮大さはありませんが、よくアイデアを盛り込んでいて、支援者にも受ける側にもメリットがあるように、深く案を練ってある点を評価したいと思います。「人に寄り添う医療」も日本にとって素晴らしい提案ですので、どちらが大賞でも異論ありません。

谷川—それでは、大賞は「人に寄り添う医療」でよろしいでしょうか。

一同—賛成。

谷川—「人に寄り添う医療」と甲乙つけがたい「中継ぎ保育」は、優秀賞で良いと思います。では、「武者修行退職制度」はいかがでしょうか。

池上—「武者修行退職制度」だと大企業が要らない人を出してしまうという意見もありましたが、これは自ら出たいという人を認める制度だと思いますので、私はこれも優秀賞でいいと思います。最相さんが高く評価されている「公共オンブズマン」は、特別審査委員賞でいかがでしょうか。

谷川—そうですね。では、大学生の部の大賞は「人に寄り添う医療」、優秀賞は「中継ぎ保育」と「武者修行退職制度」、特別審査委員賞は「公共オンブズマン」に決定します。

留学生の部	<h2>日本への鋭い観察眼とユニークな視点</h2>
	<p>入賞候補論文 *文中での呼称</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 問題解決学科—「守破離」の精神から *「問題解決学科」</li> <li>• 中国留学生から見た青森県の地域活性化について *「青森のりんご」</li> <li>• デジタル遊牧民は電気羊の夢を見るか—選択代行時代への移行 *「デジタル遊牧民」</li> </ul>

※他に3つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

### 日本での生活が学びの土台に

**中野**—留学生の論文には「守る」「壊す」「創る」という枠組みに即していないものもありました。その中で、「問題解決学科」は論文としてよくまとまっていて、文章力も高く、実現性の高い具体的な提案がなされていると思いました。

**池上**—私も「問題解決学科」を最も高く評価しました。文部科学省が国立大学には人文系学科は要らないかのような通知を出したことに對して、単に反対するだけではなく、具体的な提案が述べられている点に大いに共感しました。

**三浦**—「問題解決学科」の設計は非常に良くできています。「守る」「壊す」「創る」にそって記述されており、日本人をよく観察してゴールを設定し、論理展開している点も評価できると思います。

**最相**—留学生の論文は、グローバルでありながら自分の足元をしっかり見ている、日本に暮らしていることが学びの土台になっているという印象を持ちました。その中で、私はあえて「青森のりんご」を1位にしました。自分が現在暮らしている場

所で問題意識を持ち、そこから世界を見るという、複眼的な思考が面白いと思います。中国でりんごを売ってアンケートをしたり、小売業者に話を聞いたり、積極的に取材を行う姿勢も評価したいですね。

**山之内**—私が1位にしたのは「デジタル遊牧民」です。今、ビッグデータと人工知能によって人間の仕事が奪われるということが議論になっていますが、「人間らしさを守らなくてはいけない」という筆者の主張は心に響きました。



審査委員  
**中野 ひなつ**  
証券ソリューション事業本部HRM室 室長



目指す社会を明確に描き、提案の実現のための具体策を深く掘り下げているかどうかを評価しました。留学生の論文には日本人のクリエイティビティや日本のポテンシャルに言及したものが、背中を押され、勇気づけられる思いを持ちました。

**池上**—「デジタル遊牧民」には、SF小説『アンドロイドは電気羊の夢を見るのか?』を読んでいることで、まずひきつけられました。この作品を論文として評価してよいのかどうか議論が分かれるところだと思いますが、文章が非常に上手く、読ませる力があることは確かだと思います。

**最相**—「デジタル遊牧民」はまずタイトルからして印象的で、コンサルティングと相談が融合していくというストーリーも興味深く読みました。

### 枠にはまらない2作品が特別審査委員賞に

**谷川**—全員の評価を合わせると、5人の審査委員が1位を付けた「問題解決学科」が大賞で異論はないと思います。

—同—賛成。

**谷川**—次いで評価の高かった「デジタル遊牧民」ですが、この作品は大変興味深い内容なのですが、テーマの枠組みにあてはまらず、他の論文と比較しにくいですね。「青森のりんご」も今回の候補作の中で全く異質な作品だと感じますが、最相さんが言われるように、取材に基づいて論じて

審査委員

### 山之内 亜由知

生産革新ソリューション開発二部  
上級システムコンサルタント



自分自身が技術系なので、技術系のテーマの論文には大いに興味をひかれました。今回は論文としての完成度よりも、むしろ“読んでいてはっとさせられる”、“何らかの気づきが得られる”というポイントを重視して評価しました。

いる点では頭抜けていますね。

**最相**—「青森のりんご」は非常に留学生らしいというか、他の人には書けないユニークな論文だと思うのです。一生懸命自分で見たり聞いたり調べたりしたことを書いていますし、日本と中国の生活習慣を比較した表も実に興味深いです。おそらくこの筆者は、日本で暮らしながら気が付いたことを、日頃からメモしていたのではないかと思います、ぜひこの人に出会ってみたいと思ったのです。

**谷川**—「会ってみたい」というのはいいですね。

**淀川**—留学生による、青森からの着眼点というローカル性も面白いですし、特別審査委員賞にふさわしいと思います。

**谷川**—私は、今回の留学生の部は特別審査委員賞を2つ出してもいいと思うのです。「デジタル遊牧民」と「青森のりんご」は他とは全く違うタイプの作品ですが、本コンテストがどんな作品を求めているかを考えると、こういった異質な作品も評価していきたいという思いがあります。

**池上**—特別審査委員賞が2作品ということはこれまでありませんよね。

**中野**—表彰式が盛り上がりそうです。

**池上**—最相さんが推す「青森のりんご」は特別審査委員賞でよいのではないのでしょうか。

**谷川**—「デジタル遊牧民」についてはいかがでしょうか。

**池上**—この作品もぜひ特別審査委員賞に推したいです。

**谷川**—そうですね。それでは、特別審査委員賞は今回は2作品にしましょう。留学生の部の大賞は「問題解決学科」、特別審査委員賞は「青森のりんご」と「デジタル遊牧民」に決定します。

高校生の部

筆者の強い関心や実体験に根差した説得力

入賞候補論文 \*文中での呼称

- 「地方院」構想—民主主義と地方を守り、無意味な議会を壊し、私たちの議会を創る \*「地方院」
- 日本で本当にグローバルな人材を育てるには \*「グローバルな人材」
- 2030年バイキング式社会の実現へ向けて \*「バイキング式社会」
- 世界に目を向けさせるために、「世界問題」の授業を行おう \*「世界問題の授業」

※他に5つの論文が入賞候補に残りましたが、誌上では受賞作品について取り上げました。

グローバルな課題を扱う作品が多いことが特徴

最相—選挙権の18歳への引き下げによって、高校生の部で政治の課題を扱う論文が増えたという印象でした。その中で「地方院」という発想は独創的で、具体的な仕組みが細かく記述されていて、想像力を喚起されました。政治を内側から考えるという当事者意識の高さに感銘を受けました。

池上—私も「地方院」を最も高く評価しました。参議院を変えて地方院を作ろうという提案は、アメリカやロシアの上院と性格に近いものですが、今の日本の参議院は選挙制度が変わることによって衆議院と差がなくなって、結果的に1票の格差という問題が起きています。全く違う地方院にして地方代表という位置づけにすれば抜本的な対策になり、憲法改正は必要ですが、非常に良いアイデアだと思いました。

淀川—高校生が政治への関心から提言を行っている論文はこれまであまりありませんでしたし、「地方院」は論理もしっか



り組み立てられています。

三浦—「地方院」は地方分権の実現をゴールに据え、「守る」、「壊す」、「創る」、という3つの視点をしっかり書いている点が評価できます。特に現状を踏まえた観察がうまく盛り込まれていて、実現性や効果が精査してある点も説得力を強めています。

中野—私が最も評価したいのは「グローバルな人材」です。高校生の論文にグローバルな問題を扱ったものが多い中で、日本の思いやりの心を守り、内向的閉鎖性を壊し、主体性を持ちながら「他文化と多文化を尊重する」という主張に、多くの論文のベースに流れる考えが集約されているように感じました。オーストラリアでの実体験も納得力を高めていました。「世界問題の授業」も大変優れた論文で、完成度は一番高いと思いましたが、まとも過ぎていたがゆえに、もう少しオリジナリティが欲しいという感想を持ちました。

三浦—確かに「グローバルな人材」には、自らの観察や実体験に基づく説得力がありますね。

谷川—私は「世界問題の授業」が主張が明快で、ユニークで、論文としての完成度が高いと思いました。同じグローバルな問題を扱った「グローバルな人材」も面白かったのですが、主張の明快さでは「世界問題の授業」のほうに納得感がありました。

最相—「世界問題の授業」は、小学生から高校生にかけて段階的に世界への視野を広げていく、とても論理的に組み立てられた優れたプロジェクトだと思うのです。また、「思いやりだけでは駄目なんだ」ということを具体的に指摘している点や、「知っていることと分かっていることは違う」という気づきも、とても良いなと思いました。

山之内—「世界問題の授業」は文章が力強く、内容もよく練られていて、文句なしで素晴らしい論文だと思いました。

三浦—グローバルな問題に取り組める人材によって豊かな日本を創ろうという「世界問題の授業」の主張は明快で、教科書の設計も大変よくできています。

池上—「世界問題の授業」は、世界の出来事にもっと目を向けるために、日本の教育を変えるきっかけになるのではないかと思いますね。

山之内—私自身がワーキングマザーであることから、ライフステージに応じて仕事を選んでいるような社会になったら夢があるなと思い、「バイキング式社会」を評価しました。

政治への関心に根差した「地方院」の論文が大賞に 優秀賞には3作品を選出

谷川—評価の集計を見ると、最も点数が高いのは「地方院」です。

池上—「地方院」も「世界問題の授業」も上位に評価が集中しています。これだけ集中しているのも珍しいので、どちらが大賞でもおかしくないのではないのでしょうか。

山之内—1位を付けた人の数は「地方院」のほうが多いですね。

谷川—それでは「地方院」を大賞として、次点の「世界問題の授業」を優秀賞とするのでよろしいですか。

池上—「世界問題の授業」は文句なく優秀賞ですね。

淀川—「グローバルな人材」は評価が分かれています。

谷川—分かれていると言っても、3位までに評価している人が多いので、優秀賞で問題ないと思います。「バイキング式社会」

は評価が分散していますが、いかがでしょうか。

中野—「バイキング式社会」は高校生らしい夢があるので、優秀賞にふさわしいと思います。

谷川—そうですね。高校生の部の入賞論文は、大賞は「地方院」、優秀賞は「世界問題の授業」、「グローバルな人材」、「バイキング式社会」、以上の4作品に決定します。

審査委員

野呂 直子

コーポレートコミュニケーション部 部長

高校生と大学生の論文が力作ぞろいで、読み応えのある作品が多かったことを嬉しく思っています。「目指したい2030年の社会」について課題設定し、そこにオリジナルな「守る」、「壊す」、「創る」、という視点を加えているものを高く評価しました。



# 受賞者の皆さん、おめでとうございます!



2015年12月25日、受賞者とその家族、学校関係者を招いて、東京・丸の内の東京ステーションホテルにおいて「NRI学生小論文コンテスト2015」の表彰式と祝賀会を開催しました。

表彰式は、NRI代表取締役会長兼社長の嶋本正の祝辞からスタート。

「NRIは、今年、創立50周年を迎えるにあたり、『変える意志、変わらぬ信念。』というキャッチフレーズを掲げた。この言葉を皆さんにもプレゼントしたい。これから人生を切り拓いていくとき、さらなる成長のために今までの自分を変えていく“変える意志”と、今まで育んできた良いところや誇れるものを持ち続ける“変わらぬ信念”、この2つを大切にしていってほしい」と祝いの言葉を述べました。

続いて、嶋本社長から受賞者一人ひとりに表彰状と副賞を手渡し、受賞を祝いました。



## 大賞受賞者の言葉



**[大学生の部]**  
**大賞**  
岡口 和也 さん  
岡口 正也 さん

**こ**のように素晴らしい表彰式や祝賀会を開催していただいたこと、また、世の中に対して学生が意見を表明できる場を作ってくださったことを大変感謝しています。医療に関わる問題について弟と力を合わせてまとめることができ、自分たちが普段考えていることを形のあるものにする、大変良い機会だったと感じています。今後、弟はおそらく医者として地域医療に携わっていくと思いますし、私としても今回の経験をもとに、将来に向けてさらに頑張っていきたいと考えています。(写真左:正也さん)



**[留学生の部]**  
**大賞**  
李 超君 さん

**日**本に留学するとき、実は「中国や韓国にいる友達みんな、自分の学業や仕事があり、結婚した友達もいる。私が今日本に留学することは正しいことだろうか?」と考えたこともありました。今は、「日本への留学は私にとってきわめて重要な決断だった」とはっきり言うことができます。日本に来たからこそ、このように素敵な賞をいただくことができましたし、日本は私に素晴らしい先生や、大切な人との出会いを与えてくれました。本日はありがとうございました。



**[高校生の部]**  
**大賞**  
橋本 康平 さん

**政**治について勉強していると、真面目とか優等生というイメージを持たれがちですが、自分は全くそんなことはなく、私にとって政治は趣味という感覚です。ニュースを見たり新聞を読むことは大変楽しく、好きでやっていますし、学校の教科ではない、いろいろな知識を得ることが活力になっています。きっと、こういうことから未来のイノベーションは生まれてくるのではないかなと感じています。みんなが勉強を楽しんで、これからの未来を良くして行けたらいいなと思っています。



# 受賞者が“目指したい未来社会の姿”をプレゼン



受賞者による論文発表のあと、審査委員長・NRI 理事長の谷川史郎、特別審査委員の池上彰さん、最相葉月さんが、お祝いの言葉とともに、受賞論文一つひとつに講評を述べました。

審査委員長の谷川は、「幅広いテーマで書かれた論文を比較するのはかなり難しかったが、審査の過程で出た“この論文を書いた人に出会ってみたい”という言葉が審査のポイントになった」と総評。池上彰さんは「今回のコンテストはとりわけ高校生の部のレベルが高く、読み応えがあった」、最相葉月さんは「今回初めてプレゼンテーションを聞いたが、本当に素晴しかった」と、おふたりそれぞれが受賞者をたたえました。



2015年12月25日に開催された表彰式において、表彰状授与のあと、受賞者による論文発表が行われました。

特別審査委員を務めたジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんをはじめ、NRI社内審査委員、NRI役員、学校関係者、受賞OB・OGらを前に、各受賞者が論文の内容を発表しました。

受賞者はみな緊張しながらも、それぞれが考える“2030年に向けて―「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」”を堂々とプレゼン。会場一同は受賞者の提案に惜しみない拍手を送りました。



## 祝賀会

論文発表に続いて祝賀会が行われました。和やかな雰囲気の中、池上さんや最相さん、NRIの審査委員や役員・社員と、論文の内容や将来の夢について語り合ったり、記念撮影をする受賞者の姿が見られました。





# コンテストへの応募動機

2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

## 大学生

大学で「社会デザイン論ゼミ」に所属しており、これからの未来を創造していくことにとても興味があります。この興味が、今回の「2030年に向けての**理想的な社会を提案する**」というテーマと一致し、応募しました。

15年後、自分が35歳で世の中の中心になって働いている時代がどんな時代になっているのか興味を持ち、**自分で未来を創造してみたい**と思ったからです。

**未来志向のテーマに関心**を持ったから。文字に起こすことで自分の考えを深めることができ、また学びの域を学校に留まらせたくないと思ったので、応募に踏み切った。

### テーマにひかれて

テーマがとても新鮮で、日頃の**問題意識をアウトプット**できることに魅力を感じました。

日頃から胸の中にあった**アイデア**を、**論文という形で外部へと発信**することに大きな意味があると感じた。アイデアを文章化することは、その欠点や改善点を知る手がかりにもなり、大変有益だった。

### 考えを発信したい

自分の**想いを文章にし、誰かに伝える**ことに強い興味を感じながら大学生活を過ごしてきた。「守り、壊し、創る」というテーマと、自分が成し遂げたいことへの想いに、通ずるものを感じた。

ゼミで社会問題を解決する研究をしているが、これまでの視野では過去や現在の問題ばかりに関心が向きがちで、将来に対する意識が低いと感じていた。本コンテストは「**未来**」に向けて私の視野を広げてくれると思い、応募することにした。

## 「自分たちが担っている “2030年”の社会について考えてみたいと思った」

学生が考えることをコンテストという場を借りて発言できることは、学生にとって非常に有り難く、少しでも**自分の想いが伝われば**と思った。

## 留学生

図書館のポスターでコンテストを知り、「守破離」というテーマに興味を持ちました。**外国人として日本語で論文を書く**ことも一つの挑戦だと思い、応募しました。

### 留学生としてできること

今日の**日本の社会問題は世界各国にも将来起こり得る**もので、日本の社会問題を解決することは非常に重要である。商学研究科の大学院生として、経営の立場から問題を解決していきたいと思った。

## 高校生

### 遠いようで近い2030年を考えたい

**遠いようで近い2030年**は、自分たちの世代が社会を成り立たせる時代です。そんな15年後をどのような社会にしていけるか、なかなか考える機会もないと思ったので、この機会に自分なりに考えようと思いました。

自分たちが社会を担っていく時代は、遠いようで間近に迫ってきているのだと、応募要項を読んで実感しました。この論文を書くことで**自分たちの未来について考える契機**としたいと思ったからです。

学校に掲示されているポスターに惹かれた。「2030年に向けて」という文字を見たとき、「自分が30歳になったとき、1人1人が意志を持って暮らしているといいな」と、自然に頭の中に浮かんできた。この**思いを将来に向けて発信したい**と思った。

東京オリンピックが2020年に開催されることが決定し、未来を楽しみに思う人が増えたと思います。明るい未来を創るために必要なものを、自分なりに考え、同じように**未来を考える人たちと意見を共有**できたらと思い、応募しました。

### 高校生の視点で——

**高校生ならではの視点で考えたアイデア**を多くの方々に見てもらい、知ってもらいたかったから。また、自分の意見を発表する機会が私の日常生活で少ないため、良い機会だと思いました。

「2030年に向けて」というタイトルに興味を持ち、**理想の未来を描ける**このコンテストに応募したいと思いました。

未来社会を築いていくのは私たちであるのだと改めて思い、**17歳の視点**で未来に向けて、この論文のテーマである「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」を考えてみようと思ったからです。

私は交流協会奨学金留学生として、日本と台湾の架け橋という使命感を持っている。野村総研は東アジア各国の政策提言に活躍しているので、私の論文が**東アジアの平和に貢献できれば**と考えた。

日本でも選挙権が18歳からとなり、世界の状況がどのようなものかを知りたいと思いました。自分自身も**2年後に選挙権を持つことの重要性を知りたい**と思いました。

# NRIグループ社員による審査の感想

2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」

1次審査にあたった有志の社内審査委員の感想の一部をご紹介します。

## 大学生

論文としての体裁が相応に整っており、問題意識も高く、それぞれに**読み応え**があった。しかし「2030年に向けて」なのだから、もっと想像を膨らまして**大胆な着眼があっても良かった**のではないかと思う。

筆者の「想い」を熱く書いている半面、最終的にはどこか綺麗におさめようとしているところもあった。**夢や想いを広げて**、大きな意味で「守破離」を捉えて論述してほしい。

「世界」というより「**日本**」の問題点に**着眼しがちな**気がする。「世界」の問題にもっと取り組んでもらいたいという気持ちがあります。

### より大胆な構想を

大きな構想を描いて、そのためのアプローチという、大学生らしい論文を期待していたが、自分の**専門領域での課題解決に留まってしまったもの**が多かったように思う。

「**壊すもの**」「**守るもの**」の記述に苦戦している印象を受けた。普段「**創るもの**」はよく考えるが、壊したり、守ったりということはなかなか考えないということだろう。

「2030年代、日本は、世界はどんな姿になっているか？」という問いに対して、応募者が**夢想する未来図が語られているものがとても少なく**残念。2015年の現在の問題にとらわれすぎて、その解決案の字数が多くなっている。

### 高い問題意識で読み応え

多くの応募者が、大学での専門に関する研究、活動を通して、日頃感じている問題意識をベースに議論を展開している点が印象的だった。対象領域に対して**情熱を持ちつつも、冷静に問題を分析**しようとする学生が多く、好感が持てた。

「**創るもの**」については**各自の主張**がそれなりに記載されていたが、実際に何かを創っていくにあたっては「**守るべきもの**」「**壊すべきもの**」/壊さなくてはならないものは必ず何かあるはずで、その点についてもきちんと考察されているとより良いと思う。

大学生の**問題意識の高さ**には驚きました。ただもう少し、世間では聞かないような独自の**アイデア**があると**もっと良かった**と思います。

## 高校生

### 実体験に基づく新鮮な視点

高校生の**真摯で、かつ熱い想い**のこもった文章に触れると、こちらも身が引き締まる思いがする。自分たちの未来は自分たちで創っていくんだ!という**気概**が感じられる作品は、**読んでいて気持ちが良い**。

高校生にとっては、2030年はまさに自分たちが活躍する時代であり、書きやすかったのか、**例年に比べて出来が良かった**ように感じた。

変に大人びた考えではなく、**身近な出来事をきっかけ**に改めて自分の周囲について考え直し、小論文としてまとめた人が多いと感じた。

本人の体験に基づいた論文は納得感があった。創りたいものに対して、自分がどのように関わっていきたいのか、どう**いう行動を起こしたいのかを、もう少し具体的に**書いてほしい。

各人の経験からの問題意識・将来展望が多岐にわたり、とても興味深かった。総じて**文章力が高いもの**が多かった。

さまざまな視点の論文があり、読んでいて興味深く新鮮でした。**実体験から社会問題を考察**する論文が多くあったことが印象的でした。

全体的に感じたのは、自ら新しい社会を実現するためにどう関わっていくか、**明確に書かれていない点**です。抽象的・客観的な分析や論説に終始して**アピール力が不足**していると思いました。

### より深い考察を

情報としてインプットされたことからではなく、**実体験から考察した論文が印象に残った**。情報が溢れる世の中だからこそ、**リアルな体験から自分の体や心で感じること**こそ今後守るものであり、そこから創造力が生まれるのではないかと感じた。

2030年の未来を見ながらも、「壊す」など現在の制度、価値観を変える提案が必要となる**難しいテーマ**だと思う。提案内容が**感想レベルで終わってしまっている論文**がいくつか見られたのが残念だった。

今回の**テーマは特に難しかった**のかなという印象を受けました。「**守・破・離**」がそれぞれ何を指しているのかわからなかったり、文字数の関係か終盤になって考察がやや浅くなる論文が多かったように思います。

このテーマの小論文を執筆するには、どの論文も**参考文献が少ない**のではないかと感じた。普段は読まないような本も読み漁って、さまざまな評価軸を知った上で論文を書いてほしい。

## 「若い世代の真摯な問題意識に刺激を受けた」

## 留学生

### 留学生としての視点

初めて留学生の部の審査を担当したが、自分が見ようとしてこなかった世界に引きずり込まれるような**迫力を感じた**。知の探求あり、世界情勢あり、社会問題ありと、バラエティに富んだ論文をどれも楽しく読ませてもらった。

全体的に難しい言葉を使った論評や一般論の部分が多いためか、主張がぼやけている印象が強かった。問題意識を明確にした上で、論理展開をシンプルに考えて、身の丈に合った内容で肉付けをすることが望ましい。また、**留学生としての視点**を是非とも忘れないでほしい。

### 日本社会への期待を感じた

東アジアからの留学生が多いと思われるが、歴史認識をめぐる国家間の対立に**焦燥感**を感じていることが端々から伝わった。**自国のナショナリズムとの間に揺れながらも**、日本や日本の社会に対して期待をしている。我々はその**期待に応えられる社会にする必要がある**と感じた。

留学生だけに、海外との比較から日本の課題を考えている点に印象に残りました。日本が「**課題先進国**」としての**責務**を負っているということを改めて意識させられました。

# NRIグループ社員によるコンテスト告知活動 全国の学校を訪問して応募を呼びかけました

NRI学生小論文コンテストの告知活動は、有志のNRIグループ社員による「社内応援団」が大きな役割を担っています。  
ポスターやチラシ、受賞論文記録集を持って、母校や全国各地の学校を訪問。生徒や先生にコンテストと今回のテーマを説明し、応募を呼びかけました。

## 芝浦工業大学 大学でのOB講演で紹介 矢部 裕亮 (流通システム二部)

母校から要請を受け、「学生の間(いま)に何をやっておくべきか」をテーマに講演しました。その「いま」の先には、自分だけでなく、世界や日本社会の未来がどのようになっていて欲しいかを真剣に考えることが重要だと思います。それを考えるきっかけにもなるため、講演後にこのコンテストを紹介しました。



## 東京都立立川高等学校 日々の仕事では得がたい “ほっこり感”

五十嵐 卓 (NRIデータテック株式会社 取締役総務部長)

母校を訪問し、本コンテストを説明し、応募をお願いしました。本コンテストにエントリーしている学生の皆さんが、学業の傍ら、大半は夏休み期間を費やして論文を仕上げていることに、頭が下がる思いです。文献調査に加えて、中には取材等のフィールドワークを伴っている論文もあり、「今どきの若者も捨てたものじゃない。失われた20年の間にも開花に備えたしっかりとした芽吹きがあった」と実感しています。本コンテストは、日々の仕事ではなかなか得ることのできない「待ちわびた春が近づいて来たほっこり感」が満載です。



## 福井県立藤島高等学校 未来に目を向けてもらうきっかけに 宇野 博志 (情報セキュリティ部)

母校からの依頼で、「働くこと」について講演しました。後輩に「自分の興味ある分野や長所を伸ばし、多くの友人を作り、広い見識が持てるよう頑張ってください」と激励するとともに、未来についてしっかり考える機会として、このコンテストを紹介しました。今回応募した生徒さんがいると聞いて、大変嬉しく思っています。



## デジタルハリウッド大学 実践的クリエイター人材への 刺激に

佐野 則子 (保険営業推進部)

未来社会を描く「守破離」というテーマで、クリエイターを刺激してみたいと思いました。当大学関係者の知人に本コンテストを紹介したところ、学内グループウェア上に掲示していたくことになり、応募につながりました。私自身は1次審査にも参加し、若者の考えるさまざまな「守破離を踏まえた2030年の社会」を覗かせて頂きました。



## 先生から見た「NRI学生小論文コンテスト」

### 弘前大学人文学部 留学生の部 特別審査委員賞受賞者の在籍校 黄 孝春 教授



地方国立大学はいま、地域で活躍する人材の育成に力を注いでいます。私のゼミでは、農産物輸出をテーマに教育研究が進められています。

2015年2月、上海でゼミ生による青森県産りんごの試食販売が実施され、青森県産りんごの消費状況に関する貴重なデータを収集することができました。金春海さんの論文は、このような経験に基づいてまとめられたもので、審査委員に評価されたのだと思います。

### 神戸朝鮮高級学校 高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校 李 英三 教諭



前回の大賞、今回の優秀賞と、本校から2年連続で受賞者が出たことは嬉しい驚きです。これも全て生徒の努力の結果であると思います。毎年生徒には応募を呼びかけ、手を挙げた生徒に課題を出して夏休み中に指導を行っています。今回の受賞者はラグビー部のキャプテンで受験生。忙しい中、粘り強く課題に取り組みました。生徒には日頃から「できるだけ本を読むように」、また「目標を持ってチャレンジすることが大切」と伝えていきます。コンテストは一つの目に見える登竜門であるため、生徒の大きな自信と励みになります。来年度以降も応募を希望する生徒を学校として応援し、指導していきたいと思っています。

### 千葉県私立市川高等学校 高校生の部 優秀賞受賞者の在籍校 浅地 道子 教諭



当校の生徒が、前々回の優秀賞に続いて今回優秀賞と奨励賞を受賞し、嬉しく思っています。本コンテストには、2013年から学校単位で応募を始め、高校2年生が「構造読解」という教科の夏休みの課題として取り組みました。「構造読解」は文章を構造的に正しく読み、人に正しく伝わるような構造で表現する力を付ける教科です。当校はスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けており、教科の壁を越え、生徒が自らの教養を深めるさまざまなプログラムも組まれています。学外の小論文コンテストへの挑戦はその延長線上に位置付けているので、ぜひ来年度以降も学校として応募を続けていきたいと考えています。

### 岐阜県立関高等学校 高校生の部 奨励賞入賞者の在籍校 林 直樹 教諭



当校では、スーパーグローバルハイスクール事業を通じて学んだ成果を、小論文にまとめてコンテストに応募するよう奨励しています。外部による審査は、生徒・教師双方にとって緊張感ある得難い経験となります。当校からの2年連続の奨励賞入賞は、本人のみならず、同級生・後輩、そして指導にあたる教師にとっても良い励みとなりました。他者を受け入れ、自己の考えをまとめ、正しく表現できる人間。われわれの目指すグローバル人材の「鍛錬の場」として、本コンテストへの参加を次年度以降も生徒たちに促していきたいと考えています。

おわりに

「NRI学生小論文コンテスト」は、おかげさまで10回目を迎えることができました。応募論文も過去最多の2,622作品が集まり、レベルが高く甲乙付けがたい多数の論文の中から、白熱した議論を経て、入賞者を選考させていただきました。

集まった論文を読んでいると、政治・経済・社会・医療・人材育成など多岐にわたる前向きな提案がされており、いつの時代も言われる「今どきの若者は・・・」というネガティブな言葉とは正反対に、明るい希望を感じさせてくれるものばかりでした。この記録集を読んでいた皆さまとも、同じ気持ちを共有できればと思っています。

今回は記念すべき10回めということで、過去に受賞したOB・OGの方にも授与式にご参加いただき、第1回の受賞者からはスピーチをいただきました。受賞者の皆さんが社会で活躍している様子を伺うと、この10年の重みを感じ、続けることの大切さを改めて感じます。

今後も受賞者や応援していただいている皆さまと一緒に、このコンテストを育てていきたいと思います。すでに準備を進めている2016年度のコンテストにも、たくさんの斬新な提案が集まり、出会いと気づきが生まれるよう、皆さまの応援をよろしくお願いいたします。

2016年3月

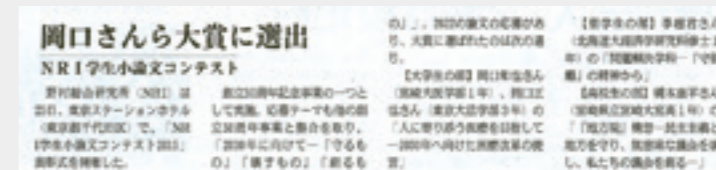
「NRI学生小論文コンテスト2015」事務局

## メディアでの掲載

「NRI学生小論文コンテスト」は、毎回さまざまなメディアに取り上げられています。その一部をご紹介します。



「宮崎日日新聞」  
2015年12月23日付  
(宮崎日日新聞社提供)



「フジサンケイビジネスアイ」 2015年12月28日付 日刊21096号



「北海道新聞」 2015年12月26日付



「東奥日報」 2015年12月9日付



「朝鮮新報」 2016年1月13日付



「高校生新聞」  
2016年3月1日発行  
第234号





NRI 学生小論文コンテスト2015

**世界に向けて未来を提案しよう！**

**2030年に向けて——「守るもの」、「壊すもの」、「創るもの」**

野村総合研究所 コーポレートコミュニケーション部 CSR推進室

発行：2016年3月

Copyright© 2016 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.



株式会社 野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル  
Tel.03-5533-2111

<http://www.nri.com/jp>